

Tree of Knowledge

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート

2018





未来の図書館 研究所

The libraries of the future research, Inc.

調査・研究レポート Vol.2 (2018) 目次

■ ごあいさつ	1
---------	---

■ 未来の図書館 研究所 第2回シンポジウム 記録	3
---------------------------	---

図書館とソーシャルイノベーション

太田剛, 宇陀則彦, 永田治樹

■ ワークショップ「図書館員の未来準備」の概要	34
-------------------------	----

■ 研究レポート

1

つながりっぱなしの日常に、『図書館』をいかに埋め込むか：
ソーシャル・デジタルライブラリーの設計技法の確立に向けて

常川 真央 ——— 39

2

「Web を活用した図書館サービス」を考える

川嶋 斉 ——— 48

ごあいさつ

ようやく、調査研究報告の第2号をお届けすることができます。遅ればせながらごあいさつを申し上げます。

創刊の際には、米国大統領選やブレクジットの投票に影響を及ぼしたかといわれた「フェークニュース」を話題にしました。昨今、厚生労働省の「統計不正」が話題になっています。長年、法律で定めたとおりの調査が行われておらず、その間違った結果により不利な扱いが明るみに出て、不法行為とその理由解明処理の不適切さが問題となっています。

いわゆる「フェークニュース」とこの「統計不正」とは、事実を歪めた情報が流されたという点で同じです。しかし、情報のプロヴェナンス(出所)がはっきりしているかどうかという点でまったく違います。公表されている情報が偽なのかどうか、どの程度信頼できるかなどを判断するのに、それがどのような方法によって取得され公表されたのかを確認します。「統計不正」は、政府という公の組織によるものでした。

今でも人々を間違った情報を与え、誘導している政府もありますし、わが国も「大本営発表」のような歴史があり、今回のものが必ずしも例外とはいいきれません。

ところで、情報化された今日、膨大な情報が溢れています。しかし、それらを人々はどのように吟味しているのでしょうか。ピュー・リサーチ・センターの昨年10月の報告に、「アメリカにおいては、若い層(18～48歳)のほうが年配者(50歳以上)よりも、情報が事実に基づくものか、意見に基づくものかをうまく判別している」という調査が掲載されていました(<http://www.pewresearch.org/fact-tank/2018/10/23/younger-americans-are-better-than-older-americans-at-telling-factual-news-statements-from-opinions/>)。私たちは常に、情報のオーセンティシティ(本物性)の見極めに目をこらしているつもりですが、これによると年配者になってもナイーブなのかと嘆かざるをえないことがあるようです。

しかし冗談ではなく、私たちは図書館活動に関与する者です。図書館は、正確な情報を人々に届け、人々の暮らしを支えるものなのですが、私たちは、この問題に対応できているのでしょうか。どのようにすれば、それが十分なものとして実現できるかをさらに深く考えていく必要があるようです。

この号では、恒例のシンポジウム報告とともに、新しい試みとして、研究所で行っている「未来準備のワークショップ」で展開されたところを皆さんにご紹介することにいたしました。今回は、ネットワーク時代における図書館サービスの理論的な見通しや実践の拡張を、千葉大学の常川真央さんと野田市立図書館の川嶋斉さんにご寄稿いただきました。

2019年2月

未来の図書館 研究所
所長 永田 治樹

図書館で使えるビジネススキルを
少人数のワークショップで学べる!



ライブラリー・ ファシリテーター®

認定講座

定員 **6名!** | 受講料 **30,000円**

こんなスキルが
アップします!

調整力

発想力

コミュニケーション力

プレゼン力

ファシリテーション力

日程 (1)

*いずれの日程も同内容・同会場

2019年 **5月19日(日)**

10:00-17:00

日程 (2)

2019年 **6月16日(日)**

10:00-17:00

会 場

ベンチャーデスク銀座

(丸高ビル5階) 東京都中央区銀座6-16-12

内 容

講座監修: 慶応義塾大学名誉教授 糸賀雅児

- チームビルディングワーク
- プレゼントレーニング
- 傾聴力を高めるワーク
- アイデア発想法
- 図書館法ワーク
- ファシリテーション実践
- 自治体基本方針ワーク
- アクションプラン作成 等
- 図書館経営・PR

講 師

北村志麻

「図書館パートナーズ」代表



<実績>

日本図書館協会研修、公共図書館館長向け研修
埼玉県図書館協会・埼玉県立図書館研修
丸善・紀伊國屋・ヴィアックス社内研修、等

<著書>

「マイクロ・ライブラリー
人とまちをつなぐ小さな図書館」学芸出版社
「地方自治職員研修」2015年8月号・
「進む! 協働」公職研

お申し込み・お問い合わせは
こちらまで

以下のメールアドレスまで、「お名前・メールアドレス・お電話番号」をご記入の上、お送りください。

✉ info@libraryfacilitator.com

主催 | 図書館パートナーズ

—— 未来の図書館 研究所 第2回シンポジウム 記録 ——

図書館とソーシャルイノベーション

日時 : 2017年10月11日(水) 13:30~16:30

会場 : 日比谷図書文化館内(地下1階) 日比谷コンベンション大ホール

プログラム

13:30~13:50 シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

永田 治樹 (未来の図書館 研究所 所長)

13:50~14:35 【講演】「図書館で変わる!地域が変わる!

~ソーシャルイノベーションに向けて」

太田 剛 氏

(図書館と地域をむすぶ協議会 チーフディレクター)

14:35~15:10 【講演】「図書館はコミュニティを育てる場」

宇陀 則彦 氏 (筑波大学 准教授)

15:10~15:30 休憩

15:30~16:30 ディスカッション

●パネリスト 太田 剛 氏

宇陀 則彦 氏

●コーディネーター 永田 治樹

登壇者プロフィール

■ 太田剛（おおた・つよし）氏／図書館と地域をむすぶ協議会 チーフディレクター， 慶應義塾大学 講師（ネットワークコミュニケーション実践）

1965 年，茨城県潮来市出身。明治大学農学部卒業。高校理科教師を経て 1990 年より編集工学研究所に入社。2012 年，株式会社ギア（編集工学機動隊）を設立。自治体の IT 戦略・観光戦略と地域づくりを複合したプロジェクトを数多く手がける。2015 年に図書館と地域をむすぶ協議会を設立し，幕別町（北海道），茂木町（栃木県），梶原町（高知県），那智勝浦町（和歌山県），荒川区（東京都）ほか，全国で新図書館づくりや、ソーシャルイノベーションの核としての図書館づくりをコーディネートしている。



■ 宇陀則彦（うだ・のりひこ）氏／筑波大学図書館情報メディア系 准教授

1994 年に筑波大学大学院工学研究科修了（博士（工学）），以後筑波大学図書館情報メディア研究科で教育・研究に携わっている。
情報資源管理や電子図書館を専門とし，筑波大学附属図書館と実践的な電子図書館の共同研究も行う。近年は知識空間（人の頭の中にある知識）と情報資源空間（記録された知識）および両者の相互作用に関心を寄せ，これからの図書館における空間やシステム等のあり方だけでなく地域のソーシャルイノベーションに関与する必要性についても視野に入れている。



■ 永田治樹（ながた・はるき）／株式会社 未来の図書館 研究所 所長

名古屋大学附属図書館を振り出しに，国文学研究資料館，東京大学・金沢大学・北海道大学の図書館などに勤務後，1994 年から筑波大学図書館情報メディア研究科，立教大学文学部等で教育・研究に携わる。専門領域は図書館経営。ISO TC46 / SC8 の国内委員。近著：永田治樹編著『図書館制度・経営論』日本図書館協会，2016。



シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

(永田)

こんにちは、未来の図書館 研究所の永田と申します。第2回未来の図書館 研究所シンポジウムを始めるにあたって、ご挨拶を申し上げます。

皆さま、大変お忙しいなか、ご参集いただきましてありがとうございます。今年度もこの企画が実施できるのは、まずは皆さまのご参集のおかげであり、またお二方が発言者としてお受けいただいたことによります。本日もよろしくご協力のほどお願いいたします。

私どもは、未来の図書館を構想するにあたって、今現在の図書館がどんな機能を果たしているかをきちんとおさえ議論しようということで、第1回の昨年度は、和歌山大学の渡部幹雄先生と、カーリルの吉本龍司さんにご見識を披瀝していただき、種々の観点について議論しました（その議論の内容は、研究所の Web サイトにも載っているのですが、印刷物にもいたしまして、皆さまのお手元に配布いたしました『未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 2017』に掲載してあります。お目通しをいただければありがたいと存じます）。それに続きまして今回は、昨年の議論でも注目されていたコミュニティの観点から図書館を考えてゆきたいということで、「図書館とソーシャルイノベーション」というテーマにいたしました。

ソーシャルイノベーションというのは、ときおりは耳にはするけど、あまり普段使わない概念かと思います。社会を変革する、社会をよりよくしてゆく活動です。ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）が図書館カンパニーを設置する際に表明した趣旨を思いおこしてみてください。図書館というのは、人々の読書や話し合いを通じてコミュニティをよりよくしてゆくという仕掛けです。そのように、ソーシャルイノベーションは図書館と割となじむものだと思います。

そこでこの類似性に着目し、現在ソーシャルイノベーションといわれている活動から、図書館にとっても有用な示唆が得られるのではないかと考えました。また、ソーシャルイノベーションが、後ほど説明いたしますように、営利、

非営利という枠を超えて展開されています。図書館はむしろ公共の施設ですが、その運営については現在難しい状況にあります。ソーシャルイノベーション活動のこの側面が図書館の現状を打開するブレークスルーを与えてくれるかもしれません。

そんなことを思い浮かべつつ、今回これを取り上げましたが、その直接のきっかけとなったのは、一つは今年の1月、アトランタであった ALA 冬季大会での図書館の未来を議論するシンポジウムという催しでした。そこで「図書館とソーシャルイノベーション」がテーマとして取り上げられました。シンポジウムでは、図書館との関係のみを議論するものではなかったものの、ソーシャルイノベーションの課題は図書館にとっても取り上げなくてはならないものだと、出席者は了解できたようです。そして二つ目のきっかけは、なによりも国内の、太田剛さんの図書館と地域をむすぶ協議会です。図書館を通じて社会を変えようと標榜している活動です。太田さんは存じ上げていましたが、ソーシャルイノベーションを掲げた図書館の活動で、再度太田さんに遭遇したようでした。それに、皆さんの図書館でもやはり、ソーシャルイノベーションと同じような考え方でもって、いろいろイベントなり、サービスなりを展開しているということもありましようから、この議論をこの時点でやっておきたいと考えるに至りました。

このシンポジウムでは、図書館をめぐるソーシャルイノベーションというアイデア、あるいは、その実践がどのように展開されているかを確認し、さらに今後どのように進められるかを考えたいと思います。端的にいいますと、図書館をベースにコミュニティを革新できるかが、今回のシンポジウムの課題です。

以上が今回のシンポジウムのテーマへ向けてのいきさつでございます。これを、私の所長としてのあいさつにかえたいと思います。

そこで早速ですが、シンポジウムのプログラムに入ってくださいと思います。私はコーディネーターという立場でありまして、まずはシンポジウムの全体を説明させていただきます。ちょっと座らせていただきます。

先ほどは非常にゆるく、ソーシャルイノベーションとは

社会をよくしてゆくものだと申し上げましたが、もう少し言葉を添えておかないと話が進まないかと思います。お二方の発表に入る前に、あと 10 分程度いただいて、私のほうから「ソーシャルイノベーションとは」について、少し説明させていただきます。次いで、お二方からのご発表を、それぞれ 45 分、35 分程度お願いしたいと思います。

発表いただくお一方は、皆さまからみて左手の太田剛さんです。太田さんには、「図書館と地域をむすぶ協議会」でのさまざまな試みや実績を踏まえて、図書館とソーシャルイノベーションを語っていただきます。もうお一方は、右側の筑波大学図書館情報メディア研究科の宇陀則彦さんです。宇陀さんからは、ソーシャルイノベーションを展開するには、人々が意見を交わし、価値観の共有や新たな関係をつくり上げる場が必要だということで、そうした場についてフューチャーセンターを参照しつつ、図書館のあり方を語っていただくことになっております。

ご発表は 15 時 10 分あたりで終わると思いますので、そのあと 20 分程度休憩いただき、それから 15 時 30 分から 1 時間、ディスカッションをしたいと思います。そんな設定であります。

さて、冒頭にも申しましたように、皆さんは、ソーシャルイノベーションという言葉を目にされていると思いますが、必ずしも人口に膾炙しているわけではなく、ときに、この言葉はパスワードだともいわれ、もっともらしいけど、実際には定義や意味があいまいだと指摘されます。

ソーシャルイノベーションは、社会的な革新、社会を変える活動であると申しましたが、例えば、モバイル機器、皆さんがおもちのスマホなんかはですね、この数年の間に本当に社会を変えたと思います。そしてその技術的な便宜性だけではなくて、例えば人と人のコミュニケーションについてもわれわれの社会関係のあり方をずいぶん変えたと思います。しかしこれは製品のイノベーションであり、いわゆるビジネスイノベーションです。ビジネスイノベーションといわれるものがなにかというと、収益を得ることが前提であり、収益を求めてそういった技術開発がなされ、それが世の中に普及して、その結果として社会が変わったというわけであります。これはソーシャルイノベーション

とは申しません。

ソーシャルイノベーションというのは、社会的なニーズに合致するという目的に動機づけられたもので、収益を得ることは組織の存続としては当然ですし、収益が多いほうが事業は拡大してさらに社会の変革ができるわけですから重要なのですけれども、収益だけが中心的課題、中心的動機ではないというものであります。そのところ、なかなか難しいので、ソーシャルイノベーションを実際に展開しているものにはどんなものがあるかを具体例でみておきましょう。

図 1 のスライドにあげましたように、例えばオープンソースのソフトウェアです。ご存知の Linux だとか、各種各様、実際ものすごい数に上ると思います。また、自然食品の普及活動、ビオ（日本ではオーガニックといいます）といった、自然食品の普及販売活動もそうです。次に、開発途上国における人々の生活が維持できるように、生産物を買ひ叩くんじゃなくて必要な経費はきちんと払ってゆこうというフェアトレードという活動があります。あるいは、人々がきちんと状況を理解できるような教育モデルを提供する活動もそうです。このうちオープンソース、ビオ、フェアトレードあたりは市場で、つまり企業的な形で展開されていると思います。教育的なモデルは特に学術的な世界などと共に展開されています。

企業的な形で有名なものに、マイクロクレジットがあります。商業銀行あたりから融資を得られないような人々を対象とする、非常に少額の融資をするものです。バングラデシュでつくられたグラミン銀行が成功をおさめ、それをつくった方はノーベル平和賞をもらいましたね。このビル（図 2）はグラミンググループのビルで、グラミン銀行もこのビルに入っていますが、この写真で読み取っていただきたいことは、この種の活動でも規模を大きくすることの大切さです。規模が大きくなれば、それだけ社会改革が大きくなります。

さらに、ホームレスのための雑誌として、皆さまも街角で『ビッグイシュー』という雑誌を売っているのをご存知かと思いますが、その販売収益はかれらの生活支援にあてられています。それからさまざまな公衆衛生の活動もあります。ここであげられた例をみると、多くのものが企業的

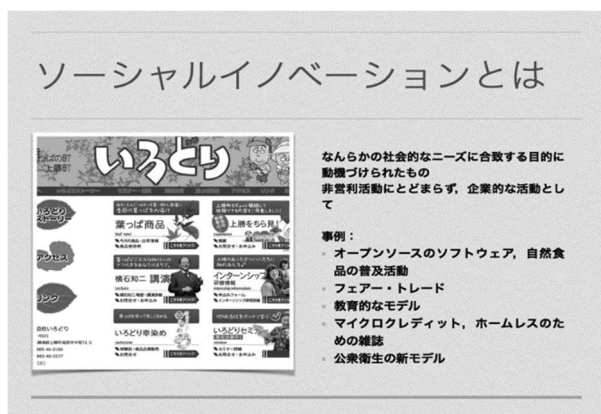


図1 ソーシャルイノベーションとは



図2 グラミンググループ社屋

な形でソーシャルイノベーションは展開されています。

図1のスライド中の左は「いrodu」(<http://www.irodu.co.jp/>)という会社のものです。皆さんよくご存じかと思いますが、徳島県の上勝町の「葉っぱビジネス」、町の高齢者たちが、料理に添える葉っぱを取ってきて、その葉っぱをうまく売って、高齢者たちの生きがいや、健康管理にも有用な効果を得たという事業です。

あと2分しかありませんが、もう一点。ソーシャルイノベーションはいつごろからいわれてきたか。思想的にさかのぼれば、ロバート・オーウェン (Robert Owen) の運動にもつながるでしょうが、これが表面に出てきたのはだいたい世紀が変わるころ、21世紀になってからといわれています。なぜそのようなタイミングに出てきたかというところ、われわれが抱える問題が非常に難しくなってきたことが

理由です。20世紀末の頃から、一般に企業が合理的というか、非常にスリムな経営を始めまして、そうしますと雇用問題に響き、雇用不安が出てきたり、あるいは会社もスリムになり余裕がもてなくなって、組織内外で共同して事業を展開するというような雰囲気がなくなってきました。そういう状況は、国や地方というような行政サイドでも同じで、いわゆる新自由主義的な政策が選好され、行政改革の推進のような話になります。なるだけ経費を削減するところにゆきます。もちろん、このこと自体には有効性もあり、インフレーションの抑制とか、生産性の向上には成功したと思います。しかし小さな政府を目指すなかでは、健康、文化、福祉、環境というような予算が削減され、対応が遅れがちになりました。

われわれの図書館予算の削減もその一環だと思います。そして、貧困や就労の問題が顕在化し、以前は相互扶助的な役割を果たしていた地域コミュニティが縮退してゆくというような社会状況になってきました。こういう社会状況が広がり、社会的課題が深刻になってきたということで、世紀の変わり目のころより、公共性でもなく、利潤追及でもない新しい行動原理が出現してきたのです。社会的価値を追求してゆくことにより、社会的課題の解決を図ろうという動きです。これが、ソーシャルイノベーションです。ですから、ソーシャルイノベーションという動きはかなり目新しく、最近になって社会的に認知されるようになってきたものです。

まずは状況が厳しくなって、現状変更のニーズが出てくるとというのが一つあり、また、変更するということは、今までのアイデアとは違ったものでなくてはならないという点もあります。新しいアイデア、あるいは、今までのシステムと違ったものでなくてはならないというところもみえます。さらにもう一つ、問題は複雑だということです。例えば地球温暖化の問題でも、ただ石炭の使用を中止してしまえば解決できるというものではない。さまざまなところに関連している、それは経済に関連するだけでなく、われわれのひとりひとりの生活にも、環境破壊の問題が関係しています。かなり広い視野でこの問題を考えなければいけないということがあります。このような課題、あるいは

状況を踏まえて、ソーシャルイノベーションというのは、「公共性でもなく利潤追求でもない新たな行動原理と社会的価値を追求してゆくことにより、社会的課題の解決を図ろうとする動き」だと規定しておきたいと思います。

少し時間が超過しましたが、早速、発言者のほうにボタンをタッチしたいと思います。それでは、太田先生よろしくをお願いいたします。

=====

**【講演】「図書館で変わる！地域が変わる！
～ソーシャルイノベーションに向けて」**

(太田)

それでは「図書館で変わる！地域が変わる！～ソーシャルイノベーションに向けて」ということで、お話しさせていただきます。

まず、この映像ですが、私ども「図書館と地域をむすぶ協議会」が、ソフト関係を全部コーディネートして、昨年の7月にオープンした茂木町の、「ふみの森もてぎ」という新しい図書館がオープンする3ヶ月くらい前です。建築設計は龍環境計画さんが地元の木材をふんだんに使った素晴らしい建築をつくってくれたのですが、私たちはその中身をフルコーディネートしました。この映像は、なにをしているかという、もともと茂木町には図書館がなくて小さな図書室があったのですね。その図書室から、普通は業者さんをお願いして蔵書をトラックに積んで引っ越しをするのですが、だいたい古い図書室から新しい図書館の間って400mくらいなのですが、町民を350人集めまして、一列に並んでいただいて、全部手渡しで引っ越ししました。これが私ども「図書館と地域をむすぶ協議会」の考え方を、とてもよく象徴していると思うので、講演会などでいつもお見せしています。これは業者さんをお願いしてお金を払えば済む話ですね。私はもともと引っ越し屋で4年くらい働いた経験がありまして、数千冊の本の引っ越しはあつという間ですよ。それこそ2トン車1台あれば入ってしまう。それをこうやって1冊ずつ350人の手で、みただければわかるように、本当に老若男女、最後のほうには車いすの方々も並んでいらっしゃいますが、なかに

は図書室を使ったことないという人も多いわけです。

この時運んだのは2,000冊くらいですが、一冊一冊、350人の町民が蔵書を手にする。しかもこの400mの道路は、茂木町のかつての中心商店街で、今はすっかり閑古鳥といますか、ただ、ちょっとおもしろい商店街で、シャッター街ではない。店は開いているのですが、人の気配がない(笑)。だから、このなかには店番していたおばあちゃんが「なんだ？なんだ？」と出てきて、「お祭り以外で、こんなにこの商店街が賑わったのは何十年ぶりだ！」って泣いていたりして。これはまだ直接経済化するわけではないのですが、私はこういう事を一つ一つ積み重ねて起こしていくことが、ソーシャルイノベーションにつながるのかなと思っています。ちょうど今、青いベストの人たちは、地元の信用金庫の方々ですが、こういう地元の企業さんも人を出してくれたり、あるいは、この時来てくれた皆さんに地元の和菓子屋さんの協力でお土産を用意するとか、いろいろな“つながり”が生まれていきます。なんとなくソーシャルイノベーションというとしそうですが、それまで業者に頼んで、お金で解決していたような事でも、ちょっと考え方を変えれば、なにかがスタートができるのではないのかなと思っています。

では、今日は「図書館で変わる！地域が変わる！」ということで、お手元にお配りした資料は、写真などはプリントしていないので数枚ですが、用意したPowerPointは120枚あって、45分しかないので急がないといけない(笑)。最初にお手元の資料の裏側にある私のプロフィールをみていただき(図3参照)、私がどういう立場の人間かっていうのをざっとご説明しますと、もともと高校の先生でした。大学の専門は昆虫で、農学部応用昆虫学です。その流れで生物の先生を3年半ほどして、松岡正剛さんが所長の編集工学研究所に入りました。そこから23年、このプロフィールに載せているのは、主にまちづくり、地域関係のお仕事だけをピックアップしていますが、これ以外にも民間ですと、例えば東京ディズニーランドさんの2020年計画とか、HONDAさんの新しい事業プランとか、NTTさんのグループCMをつくるとか、編集工学を応用して、いろいろなお仕事を経験してきました。で、ちょうど5年くらい前ですか、暖簾分けといますか、編集工学機動隊

GEARとして独立しました。その最初のお仕事は、ミャンマーのジャングルに入って戦場カメラマンのような(笑)。ミャンマーでは、今、ロヒンギャが問題になっていますが、ミャンマーには少数民族が130以上あって、そのうち少数民族武装勢力といわれる民族が11もあって、政府軍と戦っているのです。そういう武装勢力の根拠地について撮影をするような仕事をしている時に、北海道の幕別町図書館の館長さんから、どうも腑に落ちないことがあると相談いただいたのが図書館との関わりの始まりです。なので私は、図書館の専門家でもなんでもないの、お話を聞いていらっしゃる方の中には専門の方もいて、こいつなについてんだっと思う方もいらっしゃるかと思いますが、こういう来歴だと言うことでご容赦いただければ幸いです(笑)。

今日の話、「図書館で変わる！地域が変わる！」ですが、ここでちょっと注目して欲しいのは、“図書館「が」変わる”ではないのですね。“図書館「で」変わる”なのですね。この「が」が「で」であるというところが、私は今日のテーマの「ソーシャルイノベーション」の根本的なところだと思っています。「図書館「が」」と、図書館を主語で話しているうちはなにも変わらないと思います。では、“図書館「で」”なにが変わるのかっていうと、“地域「が」変わる”。今日はこの「で」と「が」にちょっとこだわってみたいと思います。

お手元の黄色い冊子(『綴通信』2号)ですが、私も「図書館と地域をむすぶ協議会」で、1年に1回発行している冊子です。本当は年に3回ぐらい出したいのですが、今、私は都内に月10日もいないと思いますが、全国を飛

太田剛プロフィール

- 編集工学機動隊GEAR代表
- 図書館と地域をむすぶ協議会 チーフディレクター
- 慶應義塾大学講師(ネットワークコミュニケーション実践)

- 1965年和歌山市生まれ／茨城県潮来市出身。明治大学(農学部応用昆虫学)卒。高校理科教師等を経て、1990年編集工学研究所(松岡正剛所長)に入社。映像から雑誌・書籍のメディア制作、文化イベント企画・施行、企業の事業戦略から自治体の観光戦略・町おこし、各種システム研究・開発など、編集工学を応用した企画・制作・研究・開発全般を担うGEAR事業部を統括する。
- とくにメディアミックスした自治体のIT戦略・観光戦略と地域づくりを複合したプロジェクトを数多く手がけ、地域コンテンツの掘り起こしと編集人材の育成を核とした「編集」による地域活性化のアプローチには定評がある。また、1995年より金子郁容(慶應大学教授)らと地域ICT利活用の数々の実証実験プロジェクトを推進し、藤沢市市民電子会議室、岐阜県情報化戦略ほか、ICTを活用した地域活性化のスペシャリストとして各種事業に参画する。2008年より慶應義塾大学(SFC)にて、ネットワークコミュニケーション実践を教える。
- 図書館および読書空間関連では、松岡正剛と共に20年以上にわたり図書街プロジェクト(NICT+総務省)や松丸本舗(丸善)はじめ、日本の書籍・読書・出版・図書館等、国内外の書籍と読書に関する多様なプロジェクトのチーフ・ディレクターとして活躍する。
- 2010年よりネット上のハイブリッド書店「honto」(大日本印刷/CHIグループ)の立ち上げに、コンテンツDB統括リーダーとして参加。さらに全国の図書館の書誌DBと管理システムを徹底して調査・研究しながら、国民読書年関連プロジェクト等に参画する。
- 2012年に株式会社ギア(編集工学機動隊GEAR)を設立。松岡正剛事務所・編集工学研究所と連携しながら、日本財団とのプロジェクトでは世界18カ国を含む国内外の各地に活動の輪を広げる。2013年より幕別町図書館(北海道)改革で全国的な注目を集め、「図書館と地域をむすぶ協議会」を設立。新図書館建設やリニューアル、システム改修事業など、図書館と地域の関係を再編集する数々のプロジェクトを実践、またはアドバイザー、講演などで全国を飛び回っている。

◎業務経歴(地域および図書館関連プロジェクト中心に主なものを抜粋)

- 図書街プロジェクト開発リーダー(NICT+総務省+慶應義塾大学)
- 歴象探索型システムプロジェクト開発リーダー(経産省+慶應義塾大学)
- 述語検索型資料管理システム開発(外務省)
- 国民読書年プロジェクト読書SNSチーフディレクター(文部科学省+大日本印刷)
- 理科教材管理・編集・配信システム開発リーダー(文部科学省)
- 災害時におけるネットワークサービス相互接続研究会(経産省)
- ネットワークコミュニティ研究プロジェクト(ニフティ)
- 総務省「ICT住民参画研究会」(座長:石井威望)WG委員
- ネット書店「honto」コンテンツDB統括リーダー(大日本印刷/CHIグループ)
- 仮想本棚SNSサービス「本座」チーフディレクター(編集工学研究所)
- 「松丸本舗」プロジェクトプランナー(丸善+大日本印刷/CHIグループ)
- 全国市町村アカデミー講師「ITと市民コミュニティ」
- コンテンツ配信標準化委員会委員(日本規格協会)
- 京都デジタルアーカイブ チーフディレクター(総務省・京都市)
- 札幌市地域文化資産デジタルアーカイブ構築業務(札幌市)
- 岐阜県情報化戦略および観光戦略作成業務(岐阜県)
- 岐阜県デジタルアーカイブ企画制作(岐阜県)
- 住民参加型教育コンテンツ流通実験(箕面市・岡山市・総務省)
- 金沢市学習プラットフォーム構築実験(NTTコム・金沢市・総務省)
- 金沢市文化芸術振興プラン策定業務(金沢市)
- 地域ICTシステム開発・運用支援(藤沢市・札幌市・洲本市・桐生市ほか)
- 地域SNS市民記者養成プロジェクト(静岡県浜松市・埼玉県秩父市)
- 岡崎市新美術館設立事業映像ディレクター(愛知県岡崎市)
- 平城遷都1300年記念「NARASIAプロジェクト」映像・ICTシステムディレクター(奈良県)
- 国際ハンセン病制圧活動/ミャンマー少数民族武装勢力映像記録ディレクター(日本財団)
- 幕別町図書館システム改修プロジェクト チーフディレクター(北海道幕別町)
- 「ふみの森もてぎ」ソフト&デザイン計画コーディネーター(栃木県茂木町)
- 「ゆいの森あらかわ」アドバイザー(東京都荒川区)
- 「ゆすはら森の中の丸ごと図書館建設支援業務」チーフディレクター(高知県橋岡町)
- 活字文化推進議員連盟「全国書誌情報の利活用に関する勉強会」実務者会議委員

図3 太田剛氏プロフィール

び回っていて、余りにも忙しすぎて 年 1 回しか出せない (笑)。最初が 2014 年 11 月の図書館総合展で配った創刊準備号のタイトルが「図書館の本来と将来を考える」。「図書館と地域をむすぶ協議会」ができたばかりのときです。当時は武雄市の図書館が話題になっていた頃ですね。どうも図書館の本来を忘れていないのじゃないかと、もう一回図書館の本来を考え直して、将来を考えようよということで、このタイトルになりました。次の 2015 年に発行したのが創刊号で、タイトルが「地域づくりの核となる図書館」。私どもの協議会でも、幕別町図書館とか茂木町の新図書館などの事例ができてきまして、われわれは「地域づくりの核となる図書館」を目指してやっていこうということで、こういうタイトルになりました。次の、昨年になりますね、2016 年のタイトルが、「地域づくりの核になる」をさらに一歩進めて、「図書館でソーシャルイノベーション」になりました。ちょうどこれが 1 年前です。この 1 年で、「ソーシャルイノベーションと図書館」という話は、ガンガン流行ってくるだろうと思ってましたが、意外と来てなくてですね (笑)。「あれ？なかなかついてこないな」って思っていたときに、今回永田先生からお話いただいて、「ああ、やっときたか」と思っているわけですけど (笑)。

これは日経新聞の記事 (2017 年 1 月 10 日, https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG09H3Y_Q7A110C1CR0000/) ですが、日本図書館協会さんがこういう調査結果を発表しました。少しびっくりしたのですが、「図書館をまちづくりの核に 497 自治体が交流や就業支援の場」として位置づけてますよというようなレポートなのですね。このタイトルからして、日図協さんが「図書館をまちづくりの核に」とかいいだすとは思ってなかったの。しかもアンケートの結果は、497 自治体がもうやっていますと手を挙げたと。中身を見ると「これ、まちづくりかい？」っていう案件もあって、どうかなという疑問もありますが、ただ一応 497 自治体が図書館をまちづくりの場だと考えていると考えれば、ここまできているんだって感じ入りました。さらに、明日からですよ、日図協さんの図書館大会。大テーマが「まちづくりを図書館から」とうたっています。「(仮)」ってなっていますけど、これでいくのでしょうか。日図協さんもこっちにくるんだって、ちょっとびっくりし

ているわけですけど。われわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」は、こうやって 2014,15,16 年と、段階を経て「まちづくりの核になる図書館」を考え続けて、「ソーシャルイノベーション」まできたのですが、次の今年、ちょうど編集集中ですが、どういうタイトルにしようか、この先に何があるのかと考えているところです。

今日はこのソーシャルイノベーションの話をします。先ほど永田先生から、ソーシャルイノベーションについて説明いただいたので、だいたい皆さんご理解いただいたかと思います。これは一つの定義ですが、日本財団の「ソーシャルイノベーションフォーラム」によると、「よりよい社会のために新しい資金を生み出し、変化を引き起こすそのアイデアと実践」、それがソーシャルイノベーションだと定義しています。その次が大事なのですが、ソーシャルイノベーションが多く「実践されることによって、本当の意味での持続可能な、みんながみんなを支える社会」が実現すると。つまり持続可能な、みんながみんなを支える社会をつくる、これがソーシャルイノベーションだといっています。

実は、われわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」はソーシャルイノベーションを目指してやっていたのではなくて、先ほどの茂木町の新しい図書館とか、これから話す幕別町図書館のシステム改修から始まったのですが、そういう図書館案件に関わるなかで、あとからこのソーシャルイノベーションという概念を日本財団のフォーラムで知って、「われわれがやっていたことって、このソーシャルイノベーションなんじゃないの？」と、気がついたという感じなんですね。

では、どういうつもりでやってきたかということ、ここ 5 年ぐらい、いろんな図書館に関わりながら、相談を受けたり、話を聞きにいたり、いろいろ見聞きする中で、すごく感じたのが、この「今だけ、金だけ、自分だけ…」でいいんですか？」(笑)。これ、ある本屋さんで平台を眺めて、1 冊だけ裏返っていて、この裏表紙の帯をみてドキッとしたのですが。これを「3 だけ主義」といって、最近けっこう聞くようになりました。「今だけ、金だけ、自分だけ」、この「自分だけ」のところを「図書館」に変えたときに、「今だけ、金だけ、図書館だけ」でいろいろなことが動い

ている事例があまりに多いんじゃないのかと気がついたんですね。先ほどのソーシャルイノベーションの逆がこれだと思います。「今だけ、金だけ、図書館だけ」といえば、先ほどの茂木町の引越しもそうで、引越業者に丸投げすれば、今はそれでいいかもしれない。でも、業者さんを叩いて、段ボール代まけさせたりして(笑)、予算は助かったかもしれない。でもそれって図書館のためにはなっていないけれども、市民のため、町民のためになっているかと考えたときに、少しやり方を変えるだけで、すごくおもしろいことができるじゃない？茂木町の例だと、あの引越大作戦を実行委員会方式にしました。その実行委員会の人たちが核になって、後に「ふみの森のこだまの会」という図書館のサポート組織ができました。今では百人以上のメンバーに拡大して、様々な図書館のお手伝いをいただいています。このように、当たり前に行っていることの、少しやり方を変えればいろいろなことができるんですね。

今日まず、幕別町で“図書館と地域をむすぶ協議会”がやった事例を、こういうプリント(図4参照)が皆さんのお手元に配られていると思いますが、この図を中心にお話をしてゆきます。

私が図書館に関わることになった最初、こののはじまりは幕別町図書館でした。先ほどお話した、ミャンマーの武装勢力をまわったり、世界中のハンセン病コロニーをまわったりしているときに、幕別町図書館の長谷館長さん、この方は企画畑などにいた方で図書館は門外漢でした。その長谷さんが、定年までの残り4年くらいの最後の花道として、図書館長になりました。幕別町はこういう(図4の中心の写真を参照)図書館で、春になるとタンポポが咲き乱れる美しい図書館ですね。この本館と、他に分館二つで約24万冊の蔵書数です。その門外漢の長谷さんが館長になってみて思ったことが三つあったそうです。一つ目は「なぜうちの図書館の本棚はワクワクしないのか」。「本屋さんの本って読んでくれ読んでくれって迫ってくるのに、なんでうちの図書館の本ってこんなに読まないでくれって顔しているの?」と思ったそうです。これ割と簡単な話で、図書館関係の方はわかりますよね。NDCは別にワクワクさせるためにできている体系じゃないので、NDCで分類配置された図書館の本棚は「読んで読んで」って迫ってくるわけないですね。実は、その前に選書の問題もあるのですけどね。二つ目が、「なぜ蔵書点検に1週間も10日も休

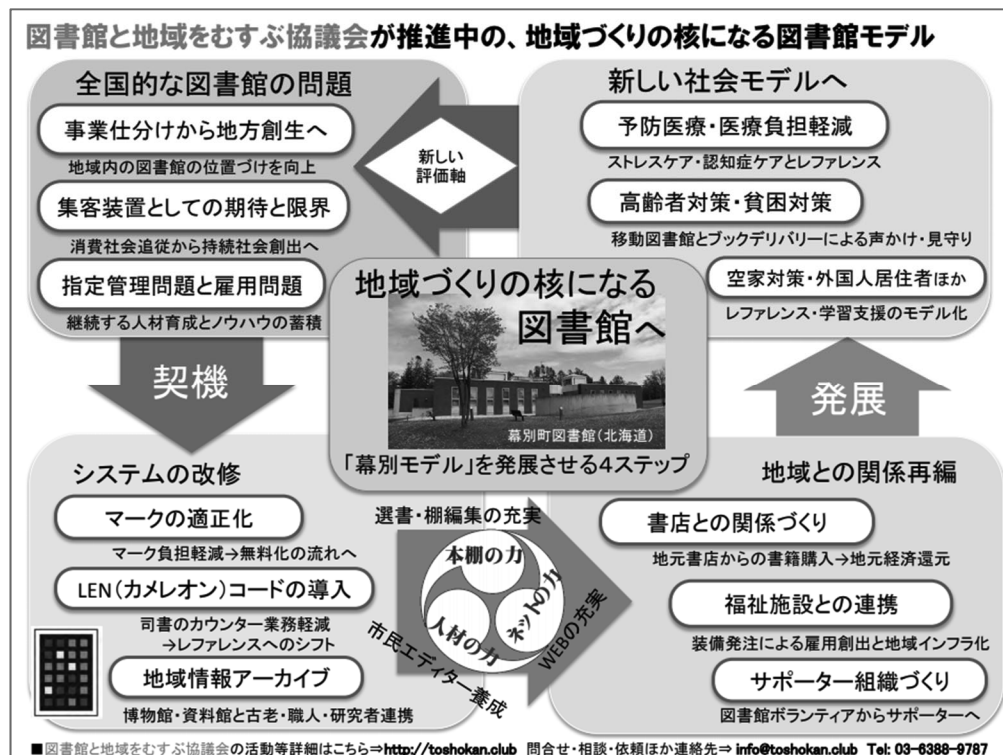


図4 幕別町図書館(北海道)実践モデル

(<http://www.toshokan.club/wp-content/uploads/2015/11/mbt4cycle.pdf>)

んでいるのか」と。「普通の本屋だったらつぶれているだろう。そういうことしていいのか」と思った。三つ目は、「なんで OPAC は、自分の館のなかの本の有無しか教えてくれないのか」と。「本来だったら、近辺の図書館、あるいは近所の本屋でその本が買えるかどうか、そこまでナビゲートしてはじめて地域の人に“本のレファレンスをするのは図書館だ”って胸を張れるんじゃないのか。自分の図書館のなかだけ案内していて、こんなんでいいのか？」と、三つの疑問を持って相談にきました。

私も、当時は図書館の専門家じゃないので、そんな三つの疑問を持ち込まれても、ふんって聞くしかない(笑)。では、ちょっと調べてみましょうかということで、皆さんのお手元の図の「発端、契機」になりますが、元々はシステム改修のお手伝いから入ったのです。先ほどの蔵書点検の休館日が長い話とか、図書館間の相互連携とか、そのあたりの疑問はシステムでほぼ解決できると思いました。これは LEN コード(カメレオンコード)というカラーコードなんですけど、幅 3.2 ミリくらいまで小さくできます。これを蔵書の背表紙に全部貼って、カメラで横にサーッと撮ると一気に蔵書点検できてしまう。幕別町図書館で全国初の全面導入に踏み切ったのですが、このおかげで蔵書点検の休館日はゼロにできました。問題は、ワクワクする本棚なのですが、NDC の分類配列を全部崩してやりかえるわけにもいかないので、この LEN コードとセットで編集的な概念をもった蔵書管理システム(チェンジ・マジック)を導入して、いろいろな特集棚を自由にガンガンつくれるようにしました。

今日の話の本題はシステムの話ではないので、図書館総合展に来ていただければゆっくり話しますが、一応、LEN コードと蔵書管理・書架編集システムで三つ疑問はほぼ全部クリアできたと。けれども、そのシステム改修の準備の過程で、いろいろなことがみえてきたわけですね。まずこの LEN コードを装備しないとイケない。そのために、図書館が新しい本を買うときに、装備してくれる所に行き必要がある。ふたを開けてみたら、本は東京の専門業者から買っていると。どうして図書館のすぐ近くに地元の本屋さんがあるのに、そこから本を買わないのか？しかも、東京の業者に LEN コードを貼ってほしいとお願いに

いったら、断られました。フローが決まっているので、そんなめんどくさいことできないと。じゃあどうしようということになった。そもそも地元の本屋さんから本を買うのが筋だろうということで、相談にきました。もう代替わりしていて、若い社長さんなんですけど、連絡していったのに迷彩服着て「なにしに来た？」みたいな顔して出てきました(笑)。

いろいろ話を聞くと、図書館のすぐそばの本屋さんなのに、生まれてから一回も図書館に行ったことがない。もう関係が完全に切れてるんですね。でも、形だけは書店組合から納入することになっていて、実際は東京の専門業者が発注を受けて、装備も納品も全てやっている。組合には 2 店登録されていて、納入された本の金額の 5%がマージンとして組合に入り、お小遣い程度のよくわからないお金が毎月入っているという。もう 1 店にも話に行きましたが、半分釣具屋さんようになっていて、高齢の店主にはとても電算化された図書館への納入はできそうもない。若い社長さんに、図書館でこういうことをやりたいので、地元の本屋さんから調達したいと説明すると、とてもできないというんですね。装備がネックになってできないと。本のフィルムコートですよ。

装備をまともにやると、1 冊 250 円くらいかかる。1 冊 1,000 円の本を売ると、もうけがほしい 210 円から 220 円ぐらいです。図書館関係の方で、こういう流通のお金の話をほとんど知らない人もいますよね。「1,000 円の本を本屋さんが売って、利益いくら知っていますか」と聞くと、ポカーンて口開けてる司書さんが多い(笑)。これは知っといたほうがいいですよ。ほしい 21%前後です。それで装備代 250 円もかかると赤字ですよ。1,000 円の本ならまだいいですけど、文庫本とかね、600 円の本で利益が 120 円くらいしかないのに、装備代に 250 円かかっていたら、もうやっていけないわけじゃないですよ。「それはおかしいね」というのでいろいろすったもんだしている間に、その若い本屋の社長さんが自分で福祉施設をみつけてきました。就労継続支援 B 型といわれる福祉施設です。福祉施設で装備をやらしてもらおうということで、「ミラータイム」という小さな福祉施設ですが、最初は、図書館の司書さんたちが障がい者の皆さんに講習しました。アスペルガー症

候群とか、発達障害とか、そういう方々なのですが、講習会は半日ぐらいで、ほぼ手順は覚えてくれたと。この写真は、講習が終わった後、みんなで自分で装備し終わった本を持って喜んでいてところです。そこで、幕別町図書館の新規購入の本は、全部こうやって、福祉施設にやってもらうことになりました。就労継続支援B型なので、B型って1日一人5千何百円くらいの給付金があります。それで職員の人件費や施設費用に回すのですね。工賃はそのまま障がい者の方の報酬になります。幕別町では、最初は書店が50円を負担して、フィルム代は図書館が雑費として負担して、三方一両損じゃないですが、書店も図書館も負担することで始めました。今までは全部東京の業者にタダでやってもらって、お金は助かった。さっきの「今だけ、金だけ、図書館だけ」ですよ。普通なら、これでよかったよかったとなるところですが、こうやってみんなで少しずつ負担して動かしはじめると、うまく回り出しました。

ちょうどこれがうまく回り出したときに、NHKの全国放送『おはよう日本』（2016年2月1日放送「特集 どうあるべき？公共図書館」）から取材の依頼がありました。ちょうど海老名のいわゆるTSUTAYA図書館さんがオープンしたときでした。その前に小牧市が大問題になって、市民運動で反対派が勝ってTSUTAYA図書館の計画は流れました。番組では、そういう経緯をレポートしながら、海老名市はオープンしましたが、賛否両論ありますよと。喜んでいる人もいて、行列ができていますが、委託費は3億3,000万となり、かえって高くなっていますねと。検索がわかりにくいとか、どこからが書店で、どこからが図書館かわからないと不満を寄せる人もいますと。これに対して、なぜかNHKさんは、こういう民間に丸投げの方向に向かっている図書館もあれば、幕別町図書館のように直営で地道に地域づくりをやっている図書館もありますとぶつけてきたのですね。地元の書店から本を購入して、福祉施設で装備をやって、地域経済の小さな還流を起こしますねと。NHKさんはどっちがいいとはいわないです。向こうは3億3,000万みたいな話で、こっちは1冊50円の攻防をしているわけで、比較されてもねえ（笑）。けど、最後にスタジオにカメラが戻ったときに、スタジオの会話はかなり幕別町図書館を讃えてくれて、全国からの反響がすごか

ったようです。

幕別町の「ミラータイム」さんは、小さな軒家で、6、7人がちゃぶ台を囲んで、正座しながら装備作業をしていました。装備って一人の人が1冊仕上げるのってけっこう大変ですけども、完全な分業制にしたんですね。切る担当は切るだけ、合わせる人は合わせるだけ、貼る人はひたすら貼る。そうやって分業すると、ものすごく作業が速くなりました。NHKさんが撮影に来たときも、20冊くらい用意していましたが、セッティングしていたカメラマンさんがOKですよ、本番いってくださいっていうと、もう終わりましたと（笑）。15分くらいでしたか？20冊くらいならできてしまうんですね。今は図書館だけではなくて、学校の図書室も福祉施設で装備をまかなっています。

それで、こんな狭い小さいところでちゃぶ台を囲んでやっていたのですが、図書館の装備って、必ず仕事があって途切れないんですね。それまで福祉施設にくる仕事は、なかなか継続しなくて不安定なんです。ときどきしか仕事が無かったり、季節的なものだったり。けれど、こうやって通年で必ず装備の仕事が継続するというのは、すごく助かることだということで、作業している人達も自信がついてくる。親御さんの話を聞くと、図書館のような、公共の社会の役に立っているっていうことは、本人たちにとっても、ものすごくうれしいことだったらしく、日に日に変わっていったというんですね。それで、「ミラータイム」の社長さんも自信がついて、分厚い申請書を頑張って書いて、助成金を得て、この写真のような立派な工房を建てちゃった（<http://millertime.web.fc2.com/>）。今は、この写真のような広い部屋で、机に座って装備をやっています。しかも、装備作業を担当しているメンバーの中に、エース級が二人いて、一から十まで全部工程をこなせましたが、この4月に民間の企業に就職できました。

結局、これは大きな目でみると、さっきいったように1日5千何百円の給付金、これって税金ですよ？その税金が使われていた二人が、納税者になったわけですよ。幕別町全体からみると、ものすごく大きいことです。装備は装備といってそれだけを切り出して、それがサービスでついてくるからと、東京の業者から本を買っている。地域の本屋さんが今どんどんつぶれていますよね。1日何十軒と

いうペースで消滅しています。そんななかで、幕別町図書館の資料購入費は、だいたい800万ですから。そのうちの約20%っていうと160万ですか？本来は町の本屋さんに入るはずだったお金が、全部東京の業者に吸い取られている。装備がタダだからっていうけれど、その装備を福祉施設に回すことによって、そうやって何人もの障がい者と呼ばれる方々が、生きがいをもって仕事をして、結果として一般の企業にも就職できた。これ、全体をみれば、すごい人材育成のインキュベーションシステムですよね。図書館としては、二人がいなくなってすごく痛かったのは確かで、3ヶ月くらい装備が滞りました。でも、3ヶ月したら新しいメンバーが育ってきて、今また完全に回っていると聞きます。

このように、それまでは全部お金で解決して、装備をタダでやってくれるからって、東京の業者から本を買っていましたが、今は地元の本屋さんが、毎日のように図書館に来て、次の図書館まつりどうしようとか、今はこんな本が売っていますよとかっていうのを司書さんたちと情報交換して、一生懸命図書館づくりをやってくれています。こういうのが私は、一つのソーシャルイノベーションなのかなと思っています。小さな地域の経済循環を起こしながら、人材育成もできるという。

そういう事例を幕別町で進めていたところ、皆さんのお手元にも答申書(出典:「これからの全国書誌情報のあり方について—いつでも、どこでも、だれでも使える—(答申)」、http://www.jpo.or.jp/topics/data/20160615a_jpoinfo.pdf)を配りましたが、超党派による活字文化議員連盟の「全国書誌情報の利活用に関する勉強会」で実務者会議の委員に呼ばれました。これはMARCの問題についての答申書なんですね。この全国書誌情報というのは国立国会図書館が無償で出しているMARCです。この全国書誌情報をつくるのに、人件費だけでも相当かかっていますよね。少なくとも億にはなりそうですね。なのに、今、国立国会図書館の全国書誌情報を全面的に使って、MARC費用をタダで運用している公共図書館はほとんどない。図書館によっては300万とか使って民間のMARCを利用している。幕別町でも100万以上かかっていた。国が多大な予算をかけて、無償で提供しているMARCを使わずに、公共図書

館が何百万、何十万という予算をかけて民間MARCを買っている。これは税金の二重取りじゃないですか。この超党派議員連盟の勉強会でもそういう話をしました。さらに、この答申書の中で問題視しているのは、ある民間MARCの利用が決まると、今の図書館は電算化されているので、選書、発注、納入、検品、管理まで、一気通貫で決まってしまうんですね。そこに地元の書店が入る余地がない。MARCを決めた瞬間に全部持っていかれてしまう。しかもここに装備の問題がからんでいる。なので、この答申では、それを一回切り分けなさいと。それで一つ一つの問題を考えて、クリアにしていきなさい、というようなことが書いてあります。この答申を受けて、勉強会の実務者会議から作業部会という形に移りまして、具体的な課題の解決方法を議論する中で、JPO(日本出版インフラセンター)が出している新刊情報ですね、これは各出版社が出す情報なんです。早いもので出版の半年ぐらい前から情報が出て来ると聞きますが、それを国立国会図書館から全国書誌情報と同じフォーマットで提出すればいいのではないかと。公共図書館がなぜ全国書誌情報を使わないのかという、アンケートをとっているのですが、遅いからという理由なんですね。確かにそうだと思います。納本主義といいますか、出版社から納本されて、MARCをつくるわけですから。ひどい出版社になると、半年後にもってきたりすると聞きました。それでは遅すぎますよね。だったらその遅いという理由を外しましょうというので、JPOの新刊情報を公共図書館でも使えるようにしましょうと。Amazonが使っている情報がJPOの情報ですよ。国立国会図書館さんもやりますよということで、おそらく来年の4月以降のどこかで、国立国会図書館さんから新刊情報を無償で落とせるようになります。しかも、JAPAN-MARCのフォーマットで取れるはずですから、それを公共図書館のシステムに落としておけば、予約も取り始めることができますよね。先行して発注もできるかもしれない。システムがAPI連携でつながっていれば、後から詳細なJAPAN-MARCが仕上がってきたら、シームレスでそれを取り込んで、新刊情報と入れ替えることも可能です。作業部会では新刊情報を元に、選書をして書店への発注書まで作成することができるシステムを開発しました。ここまで用意したら、もう遅いか

らという理由で国立国会図書館の無償の MARC を使わず、高い民間 MARC を使う理由は無いかなと思います。

このように装備の問題も、MARC の問題も、これまでのセオリーを一回外して考えて、ソーシャルイノベーションという視点で、「今だけ、金だけ、図書館だけ」という閉じた考えは捨てて、地域を含めた形でしくみを考え直したら、新しい展開が可能なのかなと思っています。先ほどの答申書ですが、もう一つお手元にお配りしたのは、この答申書に資料として付けられた“幕別町モデル”を説明した資料です (http://www.jpo.or.jp/topics/data/20160615b_jpoinfo.pdf, p.16-17)。図書館システムと MARC を最適化して、本は地元書店から買って、装備は福祉施設と連携して、そこに地域の多様な人材を活用してゆくことによって、今まで当たり前のことだと思って、ずるずるっとやっていたものを、もう一回ソーシャルイノベーション化する。そこで人が育つ、あるいはぐるっと地域の小さな経済が回る。これによって地元の書店さんがなんとか生き残れる、まだ頑張れると。私は地域の読書環境は、地元書店と図書館が手を組まなければ守っていけないと思っています。図書館は図書館で揃えるべき本がありますから、図書館が駅前の書店に並ぶような売れ線の本ばかり並べてどうするんだと。だから本屋大賞に必要以上にうかれる図書館ってあんまり好きじゃなくて(笑)、それぐらいは本屋さんにまかせなさいよって思うのですけど。図書館には、図書館法にあるように、教養を担保するという使命がありますから、そのために入れなければならない一般書や、場合によっては専門書、あるいはいけないレファレンスブックとか、いろいろあるはずですよ。限られた予算の中で、どこの書店でも手に入るような流行本を入れるのは、ちょっと疑問なんですけど。本がいくらでも売れた時代ならともかく、今は地元の本屋さんと図書館がちゃんと手を組んで、役割分担をして、地元の読書環境をどうやって守ってゆくんか、そこでどうやって経済を生み出して、なによりも読書を楽しむ人材をどうやって育ててゆくんかと、本気で考えないといけないと思うんですね。それがこういう装備だの、MARC だの、目先の予算削減みたいは話でおざなりになっていると、どんどんもう地域の読書環境はやせ細ってゆくと思うんですね。これこそソーシャルイノベーションの視

点が大事な話だと思います。

このように、“幕別町モデル”といわれている図書館改革は図の右下(図4参照)のところまで進んできました。図の中にあります「サポート組織づくり」というのは、どういうことやっているかっていうと、幕別町図書館では Web サイト (<http://mcl.makubetsu.jp/>) も同時に全面リニューアルしました。そのために図書館のロゴマークもつくってあげました。Web サイトのデザインは、幕別町には日本を代表するグラフィックデザイナーの田中一光さんの、残念ながら 2002 年に亡くなりましたが、おそらく唯一デザインした緞帳があったのですね。幕別町の百年記念ホールの緞帳ですが、十勝の風景をそのままデザイン化した素晴らしい作品で、そのデザインを踏襲した Web サイトのトップページにしました。

また、この Web サイトには長谷館長にぜひやってほしいと頼まれて、蔵書管理システムと連動したバーチャル本棚 (<http://mcl.makubetsu.jp/index.php/2014-03-26-11-05-05/285056-2014-03-25-11-28-28>) というシステムも実装しました。選書したリストから Web 上で公開出来る本棚表示を自動生成してくれるシステムです。幕別町図書館には、森村誠一さんとか福原義春さんが、読み終わった本を送ってくれている「北の本箱」というコーナーがあるんですね。いろいろ紆余曲折あった末に、文化人が皆さん置き場が無くて困っている本を送ってくれたんですね。この本棚がすこぶるおもしろいんですけど、その中でも森村誠一さんと福原義春さんはいまだに送り続けてくれています。その本棚もバーチャル本棚で Web 上に公開しています。こういう Web サイトの運用に、人材育成をかませて、サポート組織づくりにつなげていこうと考えています。例えば、「あの人の本棚」というコーナーでは、ネギ農家のおやじが普段どんな本読んでるの?とか、図書館の裏に山本商店というユニークな雑貨屋さんがあるのですけど、そこのおやじは普段どんな本読んでるの?とか、消防士さん、看護師さん、魚屋のおやじとか、そういう人たちの本棚を、森村誠一さんとか福原義春さんとかと、全く同じシステムで提供しています。

こうやって人を徐々に多様な人材を巻き込みながら、「まくべつ BOOK サポーター」というのを育てています。

略して「まぶさ」と呼んでいます。「まぶさの女」「まぶさの男」とかね（笑）。こういう「Edit まくべつ〜編集力養成講座」（<http://mcl.makubetsu.jp/index.php/events/286240-edit-mabusa>）ということで、毎月、私が北海道に行って、リアルな講座を5回やりました。その間に、ネット上でお題を出して、徹底的に添削します。その講座で編集力を身につけた人たちが、「まぶさ」デビューするわけですね。このように新聞社の記者さんにも取材してもらって、記事にしてもらいます。この写真は地元の歴史家の方の話を私がインタビューして、それを「まぶさ」の卵の皆さんにまとめてもらうという講座の様子ですね。本棚編集も教えます。さっきいったNDCの分類が中心の棚では、破綻して崩れていくところなどを取り出して、文脈的な並びの棚を新しくおもしろくワクワクさせるように組んでみるというような講座もやっています。卒業するとこういう修了証とともに「まぶさ認定証」が渡されます。「まぶさ」のなかでも、特にこの編集力要請講座を修了した方は、LEDとしてですね、図書館エディター（Library Editor）としてデビューします。さっきの山本商店のおやじも、「まぶさLED」になりました。あと、実はこのなかに、地元の新聞社の記者さん二人も入っています。このように養成講座をやりながら人材、編集力のある人を育てて図書館の運用に組み込んでゆくわけです。この写真は、その「まぶさLED」が頑張ったハンセン病の企画展の様子ですね。私は日本財団さんの仕事でハンセン病に関わっていたので、ハンセン病のパネル展もやりました。今、こういうハンセン病のパネル展やってみたいという図書館さんがいらっしゃったら、図書館と地域をむすぶ協議会でコーディネートしますので連絡ください。日本財団さんから預かった世界のハンセン病の写真パネルを無償でお貸しできます。これは小説『あん』を書いたドリアン助川さんですね。樹木希林さん主演で映画がヒットしましたね。「まぶさ」の方々がインタビューして、それを図書館Webにアップしたりしました。

このように図書館サポーター組織を育てているところまできているのですが、幕別町図書館では、最終的にサポーターもできて、次の段階に入っていて、図の右上（図4参照）にあるような新しい社会モデルをつくるような、予

防医療とか医療負担の削減とか、自治体の抱える問題に図書館が積極的に関わっていかうということですね。このペーパーの裏側にですね、「知る・読む・笑う〜図書館を核にした活字と笑いで活気あるまちづくり事業」というのがあります（http://www.toshokan.club/wp-content/uploads/2015/11/stress_rakugo.pdf）。これは、図書館にストレス測定器を置いて、利用者にストレスを測定してもらって、ストレスケア本を500冊くらい用意しています。もしストレスの数値が高くて、真っ赤っ赤になっちゃった人は、医療系の本をちゃんとレファレンスします。黄色ぐらいの人は、猫の写真集とかね、癒し系の本をすすめます。図書館の本は2週間後に返しにくるんで、そこでまた測定すれば、定期的に継続して測れるわけですね。実はもう一つ大事なのは、測定時のスタッフとの会話のなかに、例えば、青で全然ストレスなかったおばあちゃんが「そんなわけない」と、「うちの嫁は…」ってしゃべりだすわけですよ（笑）。そのなかに、ものすごい多様な町の問題が含まれているんですね。貧困の問題だったり、DVの問題だったり、いじめの問題だったり。そういうのを、幕別の司書さんたちがカウンターで察知して、行政の窓口につなげてゆくってことをやっています。これはストレスケアレファレンス研修の様子ですね。そういうストレス測定やストレスケアをやって、さらに落語会もやります。歌丸さんが会長の落語芸術協会さんと組んで、笑いが一番ストレスケアにいいというのは論文がたくさん出てますからね。ストレスに弱い臓器って、腎臓なんですよ。それで、透析患者一人いると、町の負担が500万だそうです。二人いると1,000万ですよ。幕別町図書館の資料購入費が800万ですから、二人ケアできれば、もとがとれるわけですよ。四人ケアしたら1,000万増やしてくれって町長に言おうかと（笑）。要はそうやって図書館でなにかやることによって町の経済にもう一回還元して還ってくる。これまで町のメインストリームから外れていた図書館を、まちづくりの中心にもってくるといって、こういうことをいろいろやっています。

茂木町の事例も同じような考え方で、茂木はもう町の本屋さんがなくなっていたので、日本一ともいわれる道の駅にツースパンの小さな本屋さんをつくって、その本屋さんから図書館に入れる本を買うようにしました。道の駅が第三

セクターですから、いわば町営の本屋さんですね。装備も社会福祉協議会の福祉施設と連携してやっています。今、梶原という、高知県の山のなかにある人口3,600人の町で、隈研吾さん建築設計の図書館をつくっています。建築中なんですけど、このCGのような図書館ができます。ここでも我々が、ソフト部分を全部コーディネートしているので、高知市内の書店さんと組んで、福祉での装備でやる予定です。海洋堂さんにジオラマをつくってもらったりもします。

このようにわれわれ「図書館と地域をむすぶ協議会」はいろいろやっていますが、この名前ですね。「図書館と地域をむすぶ協議会」は長すぎて呼びにくいので、「図&地」協会で「とんち」協って呼んでいます。実は、この「図」と「地」というのが大事なんですよね。codeとmodeです。情報には必ず「図」の情報、目にみえている情報と、「地」の情報、背景の見えない情報があります。ソーシャルイノベーションというのはこの図と地、codeとmodeの関係をひっくり返していくものかなと思っています。なので、図&地で「とんち」って、だいぶ気に入ってますので、どこかでみかけたら、ぜひ「とんち協」って呼んでくださいね（笑）。最初にいった「図書館で変わる！地域が変わる！」というのは、図書館で地域が変わるということなんで、主客、主語と述語をひっくり返す、図書館を主語で語らない、必ず地域を主語にする。図書館を述語的に扱ったときに、どうなるか。自分のことは後回しにする、図書館のことを後回しにして、まず地域のことを考えたときに、なにができるのかなというのを考えたらいいんじゃないのかなって思います。そのために「今だけ、金だけ、自分だけ」でいいんですか？ということ問いかけ続けたいと思います。

皆さんのお手元に資料がありますが、今日は45分しかなかったのですが、11月の図書館総合展での「とんち協」のフォーラムでは90分フルでしゃべります。もしよかったら来てください。あと、埼玉福祉会のフォーラム、これも90分で大きいホールでやります。佐藤聖一さんという埼玉県立の久喜図書館にいらっしゃる、全盲の司書さんです。去年やってあまりにも好評だったので今年もやるのですが、これも全く同じ話ですね。主客を転倒して、今まで障がい者と思っていた人を、ひっくり返して述語的にみたときに、図書館でなにができるのか。あとはメディアドゥ

さんのフォーラムでは和歌山県的那智勝浦でやっている文科省さんの教育格差解消のためのモデル事業の話します。読書習慣を身につけるコースウェア開発をしています。有隣堂さんのブースでは、AI研究者でビブリオバトル発案者の谷口忠大先生と「ロボットに本シェルフジュがつとまるか」という対談もします。もし興味がある方はみてください。ということで、ありがとうございました。

（永田）

ありがとうございました。ではひきつづき、宇陀先生お願いいたします。

【講演】「図書館はコミュニティを育てる場」

（宇陀）

それでは、筑波大学図書館情報メディア研究科の宇陀と申します。よろしくお願いします。私がどういう仕事をしてきたかという、図書館情報大学、それから筑波大学で図書館情報学の研究・教育をしてきました。太田さんに比べると、図書館に近い場で仕事をしてきたといえるでしょう。これから皆さんにお話するのは、図書館がよりよくなってゆくための新しい図書館の姿についてです。さっき太田さんからありましたように、図書館の内部だけを考えていると、なかなか図書館の新しい姿がみえてこないと思います。

今回、永田先生からお話をいただいて考えたのは図書館内部の視点ではなく、外部の視点をいかに取り入れた話にするかでした（図5参照）。太田さんの話も結局これだと思うんです。図書館だけでなく、いろんな人を巻き込んでゆく、この視点の違いを意識することが重要です。つまり、図書館と利用者という二つの構造でみるのではなくて、巻き込んでゆく。この意識の切り替えが非常に重要です。私自身も、この切り替えが相当難しかったですし、油断するとすぐに図書館だけの視点に戻ります。皆さんも図書館だけでなく、みんなを巻き込んでゆくんだという意識をもっていただきたいと思います。

さて、私はこれまでラーニングコモンズという大学図書館の新しい場についてかかわってきたので、今日は公共図

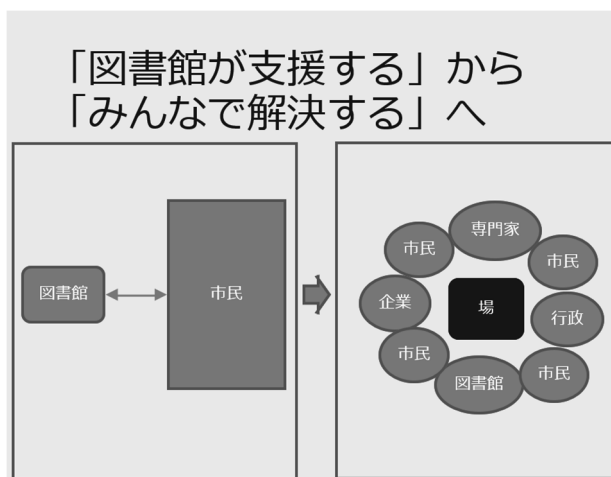


図5 「図書館が支援する」から「みんなで解決する」へ

書館の新しい場はどんな姿かということを考えたいと思っています。特に今回はソーシャルイノベーションがテーマなので、その枠組みのなかで考えます。すなわち、内部の視点の図書館「が」変わるのではなく、みんなが図書館「で」考えるを意識したいところです。

まず、「場」という言葉なんですけれども、「場」と「空間」は区別してとらえます。「空間」は設備を含む物理的スペースを指す言葉で、それに対して「場」は空間、人、設備、プロセスが結びついた活動を「場」と呼びます。例えば、このわれわれがいるホールも、なにもしなければ単なる空間ですが、パネルディスカッションや講演などの活動が行われていると、それは「場」なんですね。したがって、図書館を単なる空間ととらえるのか活動の場としてとらえるのかは大きな違いということです。

今から「場」の例として「フューチャーセンター」という取り組みを紹介します。これは私が何年か前に行っていた研究で出会った場です。私の当時の研究はブレインストーミングを効果的に行うための設備や機能はどういうものかというものでした。ブレインストーミングとはいろいろなアイデアを好きに出し合い、突拍子もないアイデアでも否定せずに、とにかく多くのアイデアを出すという方式の会議を指します。こういう会議を効果的に行う施設をつくっているところはないかを調査していくうちに、フューチャーセンターに出会いました。このフューチャーセンターというのは、簡単にいえば「対話のための専用空間」であり、「人と人のつながり」でもあり、「企業や社会の変革装

置」でもあります。企業もモノを売るだけではだめだということは今や常識になっているわけなんですけれども、企業がどうやって社会貢献するかということを考えなければいけない。それは一つの企業だけではできないので、企業がみんなで一緒に考える場が必要だということで登場したのがフューチャーセンターです。企業には会議室がありますし、公共の場所だったら公民館がありますが、そういう単なる空間ではなく、もっと議論しやすい場を考えようというのが、フューチャーセンターなどを考えるきっかけでした。

フューチャーセンターがどんなものを一言で説明するのは難しいのですが。同じように一言で説明するのは難しいけれども、皆さんがよく知った概念というと学校です。学校とは何かといったときに、施設という回答があるかもしれません。しかし、施設だけが学校じゃないですよね。学校には校舎があり、教える先生がいて、学ぶ生徒がいる、教育目標があるし、課外活動もある。建物でもあり、設備でもあり、組織でもあり、施設でもある。こういういろんなことが複合的に混ざって「学校」という概念を形づくっているわけです。フューチャーセンターも同様で、施設でもあるし、組織でもある。快適な空間で対話をしながら、新しいアイデアをみんなで出し合うという場、そういう総合的な概念をフューチャーセンターと呼ぶわけです。

フューチャーセンターを最初につくったのはスウェーデンのレイフ・エドヴィンソン（Leif Edvinsson）という人です。北欧はアメリカとかに比べると資本や資源は少ない、だけど、われわれは大きなポテンシャルをもっているはずで、それは知的資本だとエドヴィンソンは考えたそうです。スウェーデンの経営者たちが同じように考えてくれて、知的資本の活用をみんなで考えるにはどうすればいいのか、じゃあまずは話をしよう、経営者たちを快適な湖畔のコテージに集めて話し合ったのが、最初のフューチャーセッション、つまり対話の場であったということです。それがやがてヨーロッパのパブリックセクターの人たちも、それいいじゃない、われわれもいろんな人たちと話をしたいと思っていたんだと言って、ヨーロッパに広がっていったということです。さっきちらっと出た知的資本ですけども、知的資本というのは人的資本、構造的資本、関

係性資本の三つから構成されます。人的資本は人の成長、構造的資本はアイデア創出、関係性資本は人と人とのつながりを指し、それをみんなで育ててゆくための場がフューチャーセンターであったということです。ヨーロッパから少し遅れて、日本でもフューチャーセンターが設立されました。一番古くて有名なのは富士ゼロックスの KDI というところ です。

先ほどフューチャーセンターは対話の場であると申し上げましたが、そういう対話をフューチャーセッションと呼んでいます。フューチャーセッションでは、こういう問題がある、こういうことをみんなで解決してゆかないといけないと最初に提案する人がいます。そういう熱い想いがフューチャーセッションの始まりです、太田さんのように非常に熱い想いをもちた人が多くの人たちを巻き込み、一堂に集まってゆく場がフューチャーセッションです。しかし、単にみんなで集まって話し合おうといっても、なかなかうまくいきません。そのときに重要な役割を果たすのがファシリテーターという役割です。ファシリテーターは単純には議論をうまく進める人みたいにとらえられがちなんですが、フューチャーセッションにおけるファシリテーターというのは、単に議論を進めるだけでなく、自らその問題に関心をもち、人との関係づくりを行ってコミュニティをつくり、問題解決方法を探っていくディレクターみたいな役割です。太田さんの活動はまるでディレクターみたいなだと、太田さんの話を聞きながら思っていました。

さてここで少しコミュニティの話をします。フューチャーセッションにおいても図書館においてもコミュニティはとても重要だからです。コミュニティという概念は簡単そうでいて非常に難しい概念で、これこそ永田先生に講義していただきたいぐらいなんですけれども、コミュニティというのは、辞書では共同体のことであると書いてあります。典型的なのは地域コミュニティで、地域の共同体だと書いてあります。そのほか、文化コミュニティ、学校コミュニティなどたくさんのコミュニティがあります。大きいものとしては社会も一つのコミュニティです。これからの社会は「コミュニティの生成力」が成功指標になるのではないのでしょうか。社会変化というのは複数のコミュニティを介して伝播してゆくので、コミュニティを発見し、可視

化して実体化して、活性化するということがイノベーションにおいて重要だと思われます。

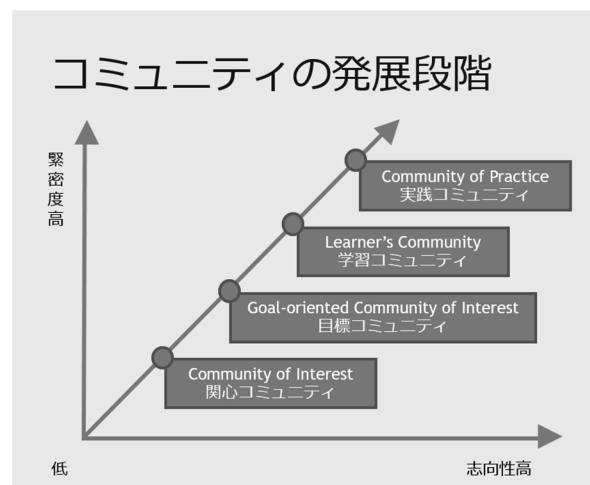


図6 コミュニティの発展段階

コミュニティに関する研究はたくさんあって、図6はアンリ (France Henri) という教育学の人の論文のなかに出てくる、コミュニティの発展段階を示しています。関心コミュニティというのは、なんとなく同じような関心をもっている人たちが集まったもので、それがやがて一つの目標を共通にもつようになると目標コミュニティになります。次にその目標を達成するためにはどうすればいいのかを学習してゆく段階が学習コミュニティです。最後の段階は学習したことをもとに、目標を実現すべく実践してゆくのが実践コミュニティです。まあ、こんな簡単にはいかならないと思いますが、イノベーションのためのコミュニティモデルとしてはわかりやすいと思い、紹介しました。

フューチャーセンターに話を戻します。調査したなかで一番大きいのがオランダの LEF (<https://www.rijkswaterstaat.nl/zakelijk/innovatie-en-duurzame-leefomgeving/lef-future-center/index.aspx>) で、あとデンマークのマインドラボが有名です。なので、この二つを実際に見に行きました。これはちょっと変わった色使いの部屋です (図7参照)。これが LEF のなかで目玉的な部屋なんですけれども (図8参照)、これ部屋はどれくらいの広さでしょう、このホールくらいかもしれません、この部分はこのホールのスクリーンよりもずっと大きいスクリーンがはってあって、横の壁も全部スクリーンです。リアプロジェクターで

投影されています。あと床にも投影されています、いわば全部がディスプレイのようなものです。部屋中にいろんなものを映し出し、その映し出されたものが刺激になって議論が活性化する部屋です。これなんかはそこでボートに乗っているような感じですが（図9参照）、部屋の雰囲気がどんどん変わっていきます。例えば、砂漠になったり、森のなかになったり。つまり仮想的な空間をつくり出し、体験できるようになっているわけです。今だんだん8Kのディスプレイが登場していますが、この部屋も8Kになると、本物と見分けがつかない空間になってゆくと思います。

こういう巨大な設備をみると、そんなお金ないよと感じるかもしれませんが、これは世界でも最大規模のフューチャーセンターだからこういうことをやっているのであって、フューチャーセンター全てがこういう設備をもたないといけないというわけではありません。大胆な発想で空間づくりをしている設計の例として見ていただければと思います。お金がなくても議論が活性化する空間づくりは工夫次第でやりようはあると思います。空間づくりはこのぐらいの大胆さが必要なんだという目線で見ていただければと思います。

これは私が訪問したときの写真ですね（図10参照）。右端に立っているのが私です。ここにもいろんな絵が出るんですけど、「なんか関係のない絵が出ているみたいだけ」と質問したところ、「物事を考えるときはいつも同じような情報に囲まれているだけではインスピレーションは生まれない。むしろ関係のないものを出すことによって、普段考えないような脳の回路が使われる。だから関係のない絵を出すというのはとても意味があることなんだ」とい



図7 (Source : Rijkswaterstaat)



図8 (Source : Rijkswaterstaat)



図9 (Source : Rijkswaterstaat)



図10

う説明をしてくれました。

日本のフューチャーセンター、富士ゼロックスのKDI(<http://www.fujixerox.co.jp/solution/kdi/>)も訪問しました。

KDI はちょっとした会社のミーティングエリアに、簡単なホワイトボードとかポストイットとかテーブルが置いてあるだけで、設備自体はいたって普通です。それでも入った瞬間、気持ちが高揚するような空間づくりがなされていました。いろんなフューチャーセッションが開かれていて、ポストイットを貼ったりして議論するんですけども、そこで終わりなんじゃなくて、ポストイットを貼ったパネルをちゃんと保存しておいて、次の会議にちゃんとそれと同じものを出してきて、すぐさまフューチャーセッションの続きをできるようにしていました。あと、「オランダの LEF はデジタルデバイスを使っていろんなことをやっていたんだけど、そういうのはどう思いますか」って聞いたら、KDI の人は、「われわれもデジタルデバイスはいろいろ試してみただけけど、ポストイットに書くとか、ホワイトボードに書くというような、人間の自然な動作には追従できないので、自然なフューチャーセッションをするには不十分だ」みたいなことをおっしゃっていて、オランダの LEF と富士ゼロックスの KDI の対比はおもしろいと思いました。

KDI は日本の代表的なフューチャーセンターですが、日本には他にこれだけのフューチャーセンターがあります (図 11 参照)。

フューチャーセンターの要素は四つあって、一番目はファシリテーター、二番目は方法論、三番目が空間、四番目がホスピタリティです。ちょっとわかりにくいかもしれませんが、単純に快適な空間があるだけでは、フューチャーセンターとしては成り立たなくて、人々が気持ちよく議論するように、ファシリテーターが、ひとりひとりにちゃんと目を配って、発言していない人には発言を促すとか、暗い顔をしている人がいたら休憩時間に声をかけるとか、疲れている感じになったらコーヒーブレイクを入れるとか、そういうホスピタリティを発揮することが重要です。ただ、ホスピタリティというのは難しくて、こうすればおもてなしになるといったことではないんですね。相手进行を思いやる心が先にあって、結果として行動にあらわれるというか。形だけコーヒーを用意してもおもてなしにはなりません。それから次に方法論についてですが、フューチャーセッション是对話なんですけれど、単に喋ればよいわけでは



図 11 日本の主なフューチャーセンター分布（出典：フューチャーセンター研究会）

(http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1409/24/news042_2.html)

はなく、未来志向で考えないといけません。単にお喋りだけして今日はなにも結論が出なかったというのではフューチャーセッションの甲斐がないので、最終的になにを目標に議論をしているのか、今日はどの段階まで進んだのかということを一定の方法論にのっとってやる必要があります。この手の方法論として有名なものに「デザイン思考」があります。一度調べてみるとよいと思います。

さて、残り4分となりました。話を最初に戻します。私は未来の図書館を考えるうえで、図書館だけで考えるのではなくて、みんなを巻き込んでゆくという視点を提示し、じゃあ図書館はどんな場になればいいのかということを考えていきたいと思います。ということでフューチャーセンターの話をしました。太田さんの話にもあったように、図書館のなかの問題を解決するために図書館があるのではなく、みんなを巻き込んで社会を変えるための図書館であるということですね。私がフューチャーセンターの話をしたのは図書館をフューチャーセンターにしるという単純なことではありません。図書館というのは地域に密着し、市民に情報を提供していますが、その本質は市民の人たちと一緒に幸せになろうということだと思います。だから図書館というのは、本来市民の人たちを巻き込んで一緒にゆくポテンシャルを持っていると思います。そうすると、図書館は情報を提供するだけでなく、対話の場としても機能する必要が出てきて、フューチャーセンターの機能を図書館に取り込み、図書館のサービス機能とミックスすれば、あら不思議、社会を変革するような新しい図書館の姿が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。ただ、フューチャーセンターと図書館には違いがあるので、フューチャーセンターの機能を取り込むときはその違いを意識する必要があります。

もう時間がないので、フューチャーセンターと図書館の違い（図12、13参照）を一つ一つは説明しませんが、簡単に説明しておくと、フューチャーセンターは対話する場、図書館は情報を提供する場です。場の活動の強弱を比較すると、フューチャーセンターのほうが動きが激しくて図書館は動きがありません。それから図書館にはサービスの型があるが、フューチャーセンターは型がない。あと、これも違うかなと思っているのは、図書館は繰り返し訪れる場

であり、滞在する場でもあるが、フューチャーセンターはわーって集まってきてわーって議論して、終わったら解散するという通り過ぎていく場。次が協力度で、図書館協力の仕組みが確立しているのは図書館の強みですね。最後にコミュニティの発見可能性の違い。フューチャーセンターと図書館のコミュニティの発見のありようとはなにか違いがあるような気がするのですが、それをうまく言葉にできないまま力尽きたような感じがしています。この辺はきっと永田先生がうまく話してくれます。

というわけで、まとめとしては、私のなかで完全にまだはっきりとした姿を描いたわけではないんですけども、ソーシャルイノベーションという視点を導入することによって、図書館の新しい姿が必然的に浮かび上がってくるという確信をもっています。

だいたい時間ですので私の発表は以上とさせていただきます

フューチャーセンターと図書館の比較

- 場（活動）としての性格：
 - フューチャーセンターは対話する場
 - 図書館は情報提供（資料提供）する場
- 活動の強度
 - フューチャーセンターは動きが激しい
 - 図書館は動きがありません
- 活動の性格
 - フューチャーセンターの活動は自由
 - 図書館はサービスの形がある程度定まっている。
- 寄り合い度
 - フューチャーセンターは人々が通り過ぎていく場
 - 図書館は繰り返し訪れる場、もしくは滞在する場

図12 フューチャーセンターと図書館の比較（1）

フューチャーセンターと図書館の比較

- 協力度：
 - フューチャーセンター同士のネットワークは弱い
 - 図書館同士のネットワークは強い
- 多様性
 - 目的をもって対話するのはよいが、意見が偏る可能性
 - 多様な人々が同時に多様な資料を入手し、学習している
- コミュニティの段階
 - フューチャーセンターは目標コミュニティからはじまる
 - 図書館は関心コミュニティにとどまっている（ようにみえる）
- コミュニティの発見可能性
 - フューチャーセンターは
 - 図書館は

図13 フューチャーセンターと図書館の比較（2）

きます。

(永田)

ありがとうございました。お二人の、発言者の方々大変ありがとうございました。時間もびしっと合わせていただきました。

皆さま、それでは20分休憩です。正確には19分くらいかもしれません。お手元の資料のなかに、質問の用紙がございます。ご質問がある方はそれを書いて、後ろのほうで、受け付けておりますので、お渡しください。それでは、お茶のご用意もあるようですので、少しリラックスしていただければと思います。では、休憩に入りましょう。

ディスカッション

(永田)

ディスカッションに入りたいと思います。その前に一つご紹介しておきますが、後ろのほうでお二人の方が、模造紙に向かってなにか書いている、なんだろうなと私もみていたんですが、墨田の(図書館)パートナーズの北村さんと小田垣さんが、このシンポジウムの梗概というのかメモというのか、そんなのを描いていらっしゃるようです。たぶん後からみせていただけたと思いますので、楽しみにしています(p.33の図15参照)。

では、質問にまずお答えして、話をつなぎ議論に入ってゆこうと思います。最初の、まず太田さんに、こういう質問がきています。「今回のお話はまわりの人をどう巻き込むか、いかに多く巻き込むかが肝になっているように思いますが、特に幕別の場合、どのようにして地域の人を巻き込んでサポーター育成や、手渡しでの本の移動を実現させたのでしょうか」。また、茂木の話では、「図書館からの発信なのか、地域のインフルエンサー(影響力を与える人)のような人に発信・協力してもらうのか、効果的と考えられる方法はどれでしょうか」という質問です。お答えいただけますか。

(太田)

すべての地域に汎用的に使える方法はあるのかっていうと、そんな便利なものはないと思います。地域地域でそ

れぞれやり方は違うと思う。特に幕別町っていうのは十勝なんですけど、「十勝モンロー主義」という言葉があつてですね、非常に排他的なところがあつて、よそ者がくるとなかなか動かないみたいな、自分たちが御山の大将だみたいな。皆さんおっしゃいます、「十勝モンロー主義」っていうなかで、徹底してまずやったのは、地元メディアとの連携。あと、特に幕別町の場合はホームページ、図書館のホームページを充実させてゆく。それは、図書館員の人もがんばるし、そのホームページをつくるプロセスに人を巻き込んでゆく。情報発信、情報発信といわれますけども、私は情報発信が大事なのではなく、情報発信するコンテンツをつくるプロセスに人を巻き込んでゆくのが一番早いと思っています。そのために、お話しした図書館エディター、「まぶさ」の男、「まぶさ」の女たちを編集力養成講座という形で集めました。あるいは、「あなたの本棚をみせてください」という形で、あのようにインタビューに行つて、メディアをつくる過程に巻き込んでゆくっていうやり方をとりました。山本商店という図書館の裏の商店なんですけど、そこのおやじを引っ張りだして、最終的にはその人がまた「まぶさ」になって、図書館づくりにかかわってくれるっていうような循環をつくり出しています。そうやって人を集めるためには、さっきいったように既存のメディアも使ってゆかなきゃいけないので、十勝毎日新聞の記者さんも北海道新聞の記者さんも「まぶさ」のメンバーに引き込みました。同じように編集力養成講座に出ていただいて、いっしょに企画をやってゆく。だからチラっとおみせしたハンセン病の展示会も、そのメンバーが中心で企画をつくって、一からやってくれていますし、最近そういう企画展がいろいろ回り出しているようです。ただ、まだまだ幕別町は、地域住民のまちづくりそのものに図書館が核になって動き出しているというところまでは、いけてないとは思っています。図書館のなかで「まぶさ」の人たちががんばってやってくれていますけど、実は役場のなかでそれがまだ理解されていない。最初の長谷館長さんはあれだけ懐の深い方でしたから、相当役場からいろんな圧力があつたのをカバーしてくれています。今は定年退職されて、お孫さんと遊んでいますけれど、そのあとを継いだ林館長さんも随分がんばってくれました。ただやっぱり、3人目とな

ると、この8月に突然人事があつて変わりました。そうすると、ちょっと切れてきたかなと。この5年間の流れがね。これをどうやって継承していくか。ここで「まぶさ」の皆さんたちが、続けて図書館を支えていってくれるのかっていうのは、これからだと思います。そのように行政っていうのは、館長さんが変わったりとか、首長さんが変わったりするとがらっと変わることがあるので、この継続性が一つ問題かなと思います。

茂木の場合は、もともといろいろなボランティア団体とかよみかぜの団体とかがたくさんありましたので、そういうところのリーダーの人たちを最初集めてコアメンバーをつくって、「ふみの森もてぎ引越し大作戦実行委員会」っていうのをつくって、20人くらいのメンバーを固めました。その人たちで350人集めて、あのような引越し大作戦をやって、最後はみんなで記念撮影をして、みなさんはこれから、ふみの森の「こだまの会」の会員になるんだよっていうので、少しずつ形を作っていった。だから茂木のほうが、そういう町民の引き込みはできていると思います。ただ茂木は一から新しい図書館つくったのでやりやすかったと思いますが、幕別町は既存の図書館イメージがあつて、後からシステム改修の機会が入っていついてるので、地元メディアだとか、いろいろ駆使しながら、じっくりつくってゆく必要があるかなっていうふうには思っていますけど。

(永田)

はい、ありがとうございました。同じように太田さんへの質問がさらに二つほどありまして、一つは、「業務委託や指定管理など、権限の限られた図書館スタッフが、新しいしくみや試みを行うには、地方自治体のなかに味方となってくれる賛同者や応援してくれる人が不可欠となると感じています。そのような味方をつくる方法、コツなどがあれば」伺いたいとか、「貴重なお話ありがとうございました。幕別町の市民にみられる変化をお聞きしたいです」というものです。まずは、前のほうの話ですね、自治体のなかに味方をつくる方法、これを一つお教えいただけますか。

(太田)

これはまあ指定管理の人は大変だと、私、一昨日に実は九州から帰ってきたんですけども、福岡から宮崎、大分回

って、また福岡に戻って、一週間いろんな図書館で、最近九州からすごい相談がくるもんですから、その多くがやっぱり指定管理の図書館さんで、今日はソーシャルイノベーションっていうんですけど、こういう「まちづくり」とかそういうもので、もっとまちとの関係をつくっていききたいんだけど、どうしたらいいのっていう相談がものすごく多くて。で、その役場との関係、特に指定管理の方で予算がもう決まっちゃってますから、これでこれをやりなさいって仕様も固まっている。そのなかでやってゆくのってすごく大変だと思いますけれども、さっきいった「今だけ、金だけ、図書館だけ」じゃないですが、要はすべてのことを、さっきの引越しの例じゃないですけど、お金でまず考えちゃうんです、予算がないからって。まず最初に予算の話が出てきちゃうでしょ？予算がないからできない。人がいないからできない。だけど、予算や人の話にしないでやるという方法や、アイデアはいくらでもあるはずなんです。まずそこから入っちゃうから動けなくなる。茂木の引越しの話もそうですよね。じゃあ、みんなで並んで本運んだらおもしろいんじゃないのっていったら、「えええ？！」ってなりますよね。でも実際やり始めてみると、いろんなことが起こるんですね。だから、まずお金と人の問題で片付けないことだと思います。じたばたしてみる、っていうのが一番大事だと思う。あと役場の方との関係って、これが一番難しいと思います。指定管理に限らず、各地の図書館をお手伝いしていて、ものすごく感じます。役場と図書館の溝。これはもう一つずつやっていくしかないですね。既存の図書館と役場とのコミュニケーションラインに頼ったり、そのコミュニケーションラインにがっかりしたりしないで、一つずつルートをつくってゆくしかないと思います。役場のなかに、他の課でもいいんですよ、教育委員会や生涯学習課とかだけじゃなくて。あんまり大きな声でいえないですけど、教育委員会はなるべく頼らないほうがいいかも(笑)。建前論が出てきちゃうので。建前論が出てきたときは、無視したほうがいい。別のルートでよくわかっている人がいるはずですから。今あの、ちょうど(客席の)真ん中で笑っている、北海道の札幌の「ちえりあ」という生涯学習総合センターから担当の方がいらっしゃってますけど、実はこないだ幕別でやったあのハンセ

ン病の企画展を札幌市の中央図書館でやろうと思って、いろいろ館長さんにご尽力いただいたんだけど、改修工事と重なったりして図書館ではできなくなったときに、その「ちえりあ」での開催が実現した。そういうほかのルートで実現しながら、じわじわまた、中央図書館に足掛かりを一個一個つくってゆくというような、そういう遠回りをしたり、道草したり、寄り道したほうがいいです。まっすぐに、教育委員会の案件だからって教育委員会に通して動かそうとしていると、たぶん動かないと思います。だからそのときに、やっぱり図書館のシンパになってくれる人がいないとダメなので、とにかく役場の人に図書館に足を運んでもらうのが大事だと思います。そのためには、選書からやり直さなければだめだと思います。役場の職員が読みたい本がありますかっていうところですね。そういう本がもし置ければ、呼んでこないとだめですから。今度こういうのを企画で使ってくださいよと、そういうことを一個一個積み重ねていかないと、役場と図書館の溝は、埋まっていないと思います。有名なのは鳥取県立図書館ですよ。片山善博先生が鳥取県知事時代に一番最初にやったのは県議会の議事室を出たすぐのところに本棚を置いたんだそうです。それで、その日議論された内容に合う本を司書さんに並べさせた。議会が終わって、議員さんたちが出てきたときに、もう議題になった関連本が置いてある。そういうのを徹底してやると片山先生はおっしゃってました。それで議員さんたちに図書館ってすごいなって、そこから政策の相談、資料の相談とかを受けるようになって少しずつ認めさせて、図書館の予算を少しずつ獲得していったっておっしゃってました。そういうあいだの埋め方っていうのはいくらかでもあるので、それを諦めずにやっていくことだと思います。

(永田)

ご質問なさった方、よろしいですか。大変説得力がありますよね。永田が、指定管理であろうが、あるいは直営であろうが同じだと説明したのではとても信頼されないんですけれども、彼がいうと皆さんも納得してくれると思います。大変おもしろい話をいただきました。それで、この延長で、幕別の市民にみられる変化をお聞きしたい、エピソードを一つおっしゃっていただけますか。

(太田)

市民の方に変化っていうか、なんていったらいいんだろうな、その成果をあせらないことが一番大事だと思うんですね。必ず徐々には浸透していきますので。さっき配ったプロフィールにも書いてあったと思うんですけども、僕はもともと市民電子会議室、1995年に阪神淡路大震災っていうのがあって、その年が日本のインターネット元年なんです。そのときに、電子コミュニティを使って、地域の壊れてしまったコミュニティを再生できるんじゃないかというので、日本でインターネットをつかった市民電子会議室の草分けになった実証実験を藤沢市と桐生と淡路島でやったんです。それが95年です。そのあと藤沢市が、市民電子会議室を正式に起ち上げて、15年間私はその世話人やりました。そのときに、徹底してコミュニティづくり、新しいコミュニティってどうやってつくったらいいんだっていうのをやりました。そこで口をすっぱくして、藤沢市の人とか、札幌でもやりましたし、豊橋とか日本中でやったんですけど、口をすっぱくしていていたのが、「あせらず、あわてず、あきらめず」。もうこれに尽きると思います。そう簡単には効果は出ないですから。でも、あせらないで、あわてないで、こつこつやっていたら、必ず広がっていきます。幕別の場合ですと、さっき、ちらっとみせた落語会、最初やったときは、たぶん60人くらい座席置けたのかな。私は、ホールや公民館を借りてとか絶対やらせませんから。図書館のなかに特設の会場つくって、あったけの椅子を集めさせて、形なんかそろってなかったりします。そんななかでやるんですけど、最初の一回目の落語会はたぶん、30人くらいしか来なかったかな。でも、あきらめず四回やっていたら、四回目はどうなったかっていうと、立ち見の人も入れなくて、150人くらい来たのかな。そうやって続けていけば、必ず反響が出てきます。そして、今度は市民の人から、町民の人から、もっとこういう落語が聞きたいとか、こういうことやって欲しいっていうの出てきます。そうやってあきらめずに続けることしかないと思います。コツはね。例えばイベントで一人しかお客さんが来なくても、そこでやめたら終わり。とにかく続けることだと思います。

(永田)

ありがとうございます。今日の一つの収穫はこのあたりだと思います。いただいた質問に対してお答えをいただいておりますが、フロアでこのあたりのことをお聞きになりたい、あるいは議論したい方はいらっしゃいますでしょうか。いかがですか。遠慮なくおっしゃってください。

さらに、同じような質問をもう一つ続けます。「図書館で地域が変わるという考えを、大都市圏、例えば千代田区で実践することは難しいように感じてしまいます。その場合、コミュニティの創出により地域貢献をすることも可能とは思いますが、アイデアがあればご教示いただきたい。」

(太田)

大都市圏って、まず図書館さん、おそらく日常の業務に追われまくっているんだと思います。ものすごい量の予約がくるし、返却本はくるしっていうことですかね。確かに難しいと思います。けど、その難しいとおっしゃっている、理由がなんなのかですよね。僕は、その難しいと思っている最大の理由を、プラスにしたほうが良いと思うんですよ。さっきいったように、地元の本屋さんで本買おうとしたら装備がネックで、本屋さんをお願いしたらかえって迷惑かけるからやめようっていったら、そこで終わっちゃうんですよ。実際そこで終わっちゃってます。だったらその最大のネックになっている1冊二百何円の装備代を、武器に出来ないかっていうのが最初にやった発想なんですよ。だから同じように、なぜ都会の図書館だったらコミュニティづくりができないと自分が思っているのか、じゃあその最大の理由はなんなんですかって考えたときに、それが武器になる方法がきっとあるはずだと思います。それはきっと、既成のやり方だとできないと思います。一回既成のやり方を全部取っ払って、そこに直接図書館がやらなくていい方法、人なのか物なのか事なのかをもち込めば、なにかできるはずなんですよ。それを考えたほうが良いんじゃないのかなって思いますけど。

ただ、おっしゃるように都会の、特に東京の図書館は大変だと思います。ただ、あまりにも頭っから指定管理、業務が大変だから指定管理って思いすぎているんじゃないのかなってちょっと思いますけど。できることはまだまだいっぱいあると思います。

(永田)

ありがとうございました。大都市圏でも、コミュニティ創出のために図書館の応援団がいろいろつくられています。さきほど紹介しました図書館パートナーズさんはその一つで、自分たちでコミュニティを支え図書館を動かしてゆこうとしている人たちですね。どうしたら、今この話題に対して、どんなことをなさっているか、あるいはどういう趣旨でなさっているかなどを、うかがいたいです。突然ですみません。

(北村)

はい、突然ですが、墨田区のひきふね図書館というスカイツリーのそばで、イベントボランティアをやっているんですけど、そうですね、確かに今日のテーマと同じで、私たちもやっぱり地域にコミュニティをつくりたいと思ってやっている活動で、結構イベント、いろんな多種多様なものを行っているんですけど、変わったところでゆくと、例えば、自転車の輪行方法（注：公共交通機関（鉄道～船～飛行機など）を使用して、自転車を運ぶこと）をね、図書館で教えますとか、テントの張り方教えますとか、浴衣の着付け教えますとか、なんかそういう普段一見図書館ではやらなさそうなことをやることによって、普段図書館に来ない人を呼び込む、で、そこに呼び込むことで、そこに図書館をきっかけとしてコミュニティをつくりたいということでやっています。ご質問にあったどうしたらいいのかっていうところなんですけど、確かに墨田区の住民って墨田区全体だと27万人近いですので、ちょっと27万人のコミュニティはつくれないと思うんですね。でも、近隣の同じ興味のある人どうしだとか、あと、やはり地域のなかに地域をよくしたいと思っている都会の人たちもいますので、そういう人たちとつながってゆく。で、つながってゆくときの肝といいますか、コツというのは、お客様扱いしないというか、つい図書館って、図書館で働く人と来る人をお客様としておもてなしするっていうことで、そこで分断されてしまう、全然立場が違ってしまいうんですけど、同じ仲間として、地域をよくしようという同じ目的をもつ同じ仲間として付き合っただけってところ、私はコツだと思っているので、私自身も納税者であり、市民であ

り、利用者なんですけれども、図書館サービスの受け手ではなく、受け手でもあり担い手でもあるっていう意識でやっていますので、そういう人たちとつながってゆくために図書館の方々にやって欲しいことといえば、そうですね、話しかけて欲しい。図書館に行って、結構目も合わないっていうことよくあるんですけど、明らかに探していて、助けて欲しいなっていうときに、目も合わないとか、話しかけてもらえないと、そこが一番最初のきっかけとなると思いますので、私としては、まず第一歩としては、目を合わせ、話しかけて、人と人とのコミュニケーションをする、というところからではないかと思っています。よろしいでしょうか。

(永田)

ありがとうございました。突然振りまして、申し訳ございません。

(太田)

あの、一つフォローすると、コミュニティづくりの三要素というのがあって、ツールとルールとロールなんです。これ編集工学で「ルル3条」というんですけど、ツールとルールとロールをどうやってつくるか、ツール、これ思いがけないものがコミュニティづくりのツールになりますから、だから、例えば幕別の例だと、ストレス測定器がコミュニケーションツールになっています。あれで、ストレスがあった、なかったっていうので、会話が始まって、それぞれの趣味だとか、家庭事情がわかって、それを核にコミュニティに持ってゆくっていうことはできます。だから、なにがツールになるかはわからない。例えば、田原市（愛知県）さんなんかは古い昭和の小道具をたくさん用意して、回想法とかに使っているんですけど、そういうものがコミュニティのツールになる可能性もあるし、私がいった幕別町の例は、メディアをツールにしようとしています、メディア制作の過程を。あと有力なのは本棚だと思っています。本棚、特集棚を一部任せる。特に日本中の図書館、理科の本棚がなってないですから。司書さんに理系の人があんまりいないんでね。私は、もともと理科の先生ですから、生物教えていたんで、もう理科の本棚行くとがっかりするんですけど、どこの図書館に行っても。そういうのを、地元の中学の理科の先生と組んでやってもいいと思うん

ですよ。そういうところからコミュニティづくり、まずツールはできると思います。で、次はどこにどういうルールを発生させるか。これ、なるべく変なルールのほうがいいです。昔コミュニティづくりで、私、経産省と総務省がいっしょにやらなきゃいけないコミュニティづくりをやったことがあるんですけど、仲が悪いんですよ（笑）。もうネット上でケンカばっかりする。そのときに、すごいルールつくりました。一番最後に必ず「うふふ」って入れなさい（笑）。「あなたのいってることはおかしいですよ！うふふ」、ケンカにならないんですよ。どうやってそういうおもしろいルールをつくっていきけるのかっていうのが、コミュニティづくりのポイントになってくる。昔、大阪の箕面市でやったときは、ピンバッジをつくりました。もうみんなそれ付けるのがうれしくて、コミュニティができてきました。だから、そういうツールとルールをどうやってつくるか、どうやったらそのバッジがもらえるかっていうルールをどうつくるか。あとはロール、役割分担です。これが最終的には、一番大事になります。継承してゆく役割をどうつくるのか。ヒエラルキーだけではないですから、ロールのモデルはいっぱいあります。「俺についてこい」みたいなロールもあるし、「料亭のおかみ」ロールとかもありますから、全部仕切っちゃう人ね、「はいはいはい、あんたあっちね、あんたはこっちね」、「はいはい、座りなさい座りなさい」ってね。そういう、いくらでもロールのモデルはありますから。そういうツールとルールとロールをつくれば、コミュニティっていうのは、おのずとできてくると思います。

(永田)

ありがとうございました。服用すると効くような気がします。

この話に関連して、図書館員はその任務をどのようにとらえられるのかという話を少しさせていただきたいと思います。というのは、今の話はいわば「巻き込んでいく」という話ですが、図書館員はそもそも自分たちの役割をどういうふうにとらえているかということを、少しおさえておきたい。

このシンポジウムのテーマを決めたあと、図書館とソーシャルイノベーションに関してペーパーが存在するかど

うかを調べました。ほとんど見当たらなかった。しかし一つだけ発見しました。「ソーシャルイノベーションの触媒としての公共図書館」という論文でした。オランダ南部のティルブルグというまちにある、コミュニティセンスという名のコンサルタント会社で働くデ・ムーア (Aldo de Moor) という人と、同じくコンサルタント会社キュービスのバン・デン・アッセム (Rutger van den Assem) という人が共同で、2017年にイタリアのプラトで、発表した会議論文でした。なかなかおもしろかったので、ここで紹介します。

オランダの公共図書館はすばらしいですから、彼らは停滞した図書館をみているわけではないです。ただ、これまで物理的なコレクションに焦点をおいてきた図書館は、情報ネットワークやデジタル情報が進展する知識社会では、もはや余計なものとなされる危惧があるし、図書館のデジタル化の拡大は受け入れざるをえないけれども、印刷物も重要だと感じている利用者も存在する。そういう矛盾した状況において、今後図書館はどうするのか、そのために

は図書館の役割をもう一度きちんとおさえないといけないのではないのか、というのが彼らの問題意識でした。そこで、図書館は社会に対してなにができるかということという点を図書館員に議論してもらった。いいかえれば、「ソーシャルイノベーションに図書館が役に立つのかどうか」ということを考えてみようというワークショップを行ったのです。そこで、図書館の人たちに自分たちがどんなサービスをしているかっていうことを挙げてもらった。

それを、Roles (役割) とか Tools (道具) とか Services (サービス) とか、Functions (機能) だとかにカテゴライズしたものが図 14 の右の表です。項目には、コレクションへのアクセス、質問に答えるなどさまざまなものがあります。そのうちで、二人がまず注目したのは、図書館は基本的に信頼を受けている、コミュニティから信頼を受けているという点でした。ソーシャルキャピタル (図 14 の Tools の欄にみられます)、つまり社会的な関係上の信頼資本を図書館は持っている点です。もう一つは、レファレンスサービスなどで、図書館員は利用者が知りたいこと

センスメイキング

社会的文脈からもっともなイメージを構成する、進行中の回顧的(そして将来的)な意味づけ[カール・E・ワイク]

身の回りで何が起きているかを、能動的に意味づけること

センスメイキングとは次の特性のプロセス

1. アイデンティティ構築に根づいた
2. 回顧的
3. 有意義な環境をイナクトする
4. 社会的
5. 進行中の
6. 抽出された手がかりが焦点となる
7. 正確性よりもっともらしさ

経営学: 人々に対して、現在と将来のありかたについて意味を与える

(1) 魅力的な策略の創発

(2) その自己の解釈に即した、積極的な行動

公共図書館のツールボックス

Roles	Tools	Services	Functions
- Collectors - Information professionals - Reading consultants - Storytellers - Media coaches - Product managers - Specialists/ advisors - Intermediaries	- Apps - Dialogue tables - E-readers - Buildings - Local networks, contacts - Social capital (low barrier, trustworthy, independent, broad societal reach) - Newsletters - Knowledge & skills - Tempting presentations - Promotion materials - Streaming of content - Study cabins - Social media - Websites - Wifi - Devices - Digital databases - Digital display windows - E-books	- Bookstart - Reading clubs - Lectures & activities - Internships - Study- and workspaces - Interest-based linking - Read-out sessions - Workshops & trainings - Delivery services - CPNB programs (nationwide literature promotion) - Social/cultural education - Services for kindergarten and boarding school education - "The building" (atmosphere) - Individual advice, personal contact (telephone, building, e-mail, social media) - Collection (digital/physical) - Expositions - Online meeting place - Place to "unwind" - Physical meeting place - Facilitating schools - Open writing podiums - Access to worldwide web - Promotion of reading - Organizing	- Warehouse for knowledge and information - Centre of development and learning - Encyclopedia of art & culture - Source of inspiration for reading and literature - Stage for encounters and debate

<https://docslide.net/education/public-libraries-as-social-innovation-catalysts.html>

図 14 センスメイキング・公共図書館のツールボックス

(<https://docslide.net/education/public-libraries-as-social-innovation-catalysts.html>)

に対して、「こういう本がありますよ」あるいは「こういう見方を見ると、こんな本が出ていますよ」と回答する支援の場面です。利用者は少し手に負えない問題について図書館に行って調べようとするわけですが、手に負えない問題の理解について、図書館員がなんらかの示唆によって手助けしている。それは、児童サービスの場面でもそうです。ストーリーテリングをやっているとき、ある種、現実の社会に対する一定の意味づけを伝える行為をしているといっています。つまり図書館員たちは、社会のなかで一定の意味づけを人々に伝えているという点です。図書館には知識などの蓄積があって、そうした支援を行うと、市民、コミュニティに喜ばれるということを、この人たちはワークショップで発見したのです。

人々が現実を理解したいがために図書館に資料を読みにくるときに、なにか不明な点があれば、図書館員に聞いたりもするわけで、図書館員がやっていることは、人々のための意味づけではないかということを彼らは指摘しています。つまり図書館員を、パブリックな、人々のためのセンスメーカーだというふうにこの論文ではみている。そして、公共図書館はそのような働きによって、ソーシャルイノベーションのための触媒になりうると位置づけています。公共図書館は、コミュニティの人々のために、自分たちのもっている力できちんと情報に意味づけをするサービスを展開してゆけばよいと主張しています。こんなサービス対応は、現場の皆様少し参考になるところです。

少し脱線ですが、この意味づけ、センスメーカーは、非常に重要な概念です。センスメーカーというのは、なんらかの能動的な意味づけをすることです。経営学のほうでとても有名になったのですが、この概念については図書館情報学も早くから取り入れていまして、ブレンダ・ダーウィン (Brenda Dervin) という情報の探索行動の研究者をご存知でしょうか。情報検索をしますと結果が返ってくるが、問題は検索者がその結果をどう理解するかであると、彼女はいつています。つまり、情報を探すというのは、その自分が質問をしたものに、自分自身が意味づけすることになる。われわれは現実を理解するときになんらかの意味づけをしているというのです。

また経営論のほうでいうセンスメーカーという主張

も参考になります。非常に有名な話ですが、ある二人のセールスマンがいて、そのセールスマンが未開の地に派遣されていった。靴のセールスマンだったのですが、そのときに、未開の人たちは全然靴を履かずに裸足で歩いていた。この現実を本社に報告する時、一人の方は、「とりあえず一万足即座に送ってくれ」といったんですね。もう一人の人はそうではなくて、「見込みなし、すぐ帰る」という報告をした。前者はですね、要するに、今後のその国の開発を見越して、そして潜在需要がありと考えた。後者のほうは、これまでの歴史からいってとても無理だろうと判断した。その結果は、どちらがよい成果を収めたかは、およそ想像できます。

センスメーカーとかいうか、ものごとをどういうふうにつかむのかでこれほど違う。ある意味、まさに太田さんが先ほどからおっしゃっていただいたように、いろんな見方がある、つないでゆけるということなのです。そのあたりが太田さんのすばらしさであって、われわれは状況をどういうふうの意味づけているかということを、もう一度考えていただくと、よろしいかなと思いますね。

それでは、宇陀先生のほうへの質問があります。一つは「フューチャーセンターのような機能があるとよいという話はもっともだと思うが、図書館の利用者の多くは「図書館は静かな場」という認識の方が多く、ディスカッションをする雰囲気とは遠いイメージがある、参加者が集まらなさそう。私は、図書館はもっとうさくてよいと思うのだが、ディスカッションのある図書館の事例があれば、おうかがいしたい。」

(宇陀)

この質問は、私のプレゼンの趣旨を改めて説明するうえで、とてもよい質問だと思います。先ほど申し上げたとおり、図書館の視点だけで考えるとそういう意見になるんですよね。図書館はこうあるべきだから、そういうのは図書館じゃないという言い方になってしまうんですね。しかし、ソーシャルイノベーションという視点を入れると必然的に話し合う場が必要になります。話し合う場はどこでもいいといえどどこでもいいんですが、図書館というのはやはり地域における情報拠点であり、市民の活動の場であるとするならば、図書館のなかにディスカッションの場があ

るのは必然だろうというふうに私は思います。以前ブレインストーミングの研究をしているときは、フューチャーセンターを図書館にもっていても、「なにそれ？」と言われて終わりだろうなと思っていたんですが、今回永田先生から「ソーシャルイノベーションの視点で考え直してみたら」と言われ、改めて考えてみると、「フューチャーセンター」イコール「図書館」ではないんですけれども、そういう対話の場みたいなものは、図書館にあって然るべきだよなと思った次第です。さっきあちらのほう（北村さん）からも話がありましたとおり、図書館とみんなが対等な場で対話をするという視点に立てば、フューチャーセンターを図書館にもってこくことは違和感がないのではないかと思います。そういうもののとらえ方の話の一つ。

二つ目は具体的なソリューションの話です。静かな場とガヤガヤする場は両立します。というのは、大学図書館のラーニングコモンズで既に先例があるからです。アクティブラーニングという言葉があるんですけど、先生から教えてもらうだけではなく、学生が自主的に議論しながら勉強する場が必要だよなということになり、ラーニングコモンズという場が登場しました。しかし当初は、図書館は静かにものを考える場所という考えが根強く、ガヤガヤする場所をつくることに抵抗がありました。それで、海外の大学図書館はどうしているんだろうと、永田先生と海外のラーニングコモンズを見に行きました。すると、サイレントエリアとガヤガヤエリアを分けている大学図書館が多く見られました。これをゾーニングといいます。ゾーニングを工夫すれば公共図書館でも両立すると思います。

でも大事なものは一つ目のもののとらえ方のほうです。ソーシャルイノベーションに必要な場はどんなものだろうかということ。空間ではなく場です。場とするためには、今までの文脈だと図書館じゃないけれども、ソーシャルイノベーションに対話の場は必要でしょうということになれば、図書館に対話の場をつくれればいいです。

（永田）

ご質問なされた方、ご納得されましたか。この音の問題、いつまでも続きますね。でも、おそらく図書館はだんだんだんだん騒がしくなると思います。そして静かなエリアも必要ですので、それは確保されると思います。基本的に、

特に公共図書館はもっとにぎやかであっていいと思うんですよね。私、最近、新しくできたところに行って、なんでこんなに静かなのだろうなと思いました。活性度が低いのかなと勘ぐってしまいました。

もう一つの質問です、「フューチャーセンターとしての図書館を考えたときに、「対話」というキーワードが気になりました。対話の相手は誰なのか。図書館の場合、一人での活動もあり得るので、自分との対話というシチュエーションも思い当たりました。生産性という観点ではあまり成果がないのかもしれませんが。」どうでしょうか、宇陀先生。（宇陀）

フューチャーセッションに集まった人々どうしとの対話という意味です。図書館で内省的に自分自身に語りかけるといえるのはもちろんあるのですが、少なくともフューチャーセンターにおける対話というのは、フューチャーセッションに参加した人との対話という意味です。

（永田）

先ほど太田さんが、参加者一人でもイベントをやり続けなくちゃいけないみたいなことをおっしゃっていましたね。対話性のあるイベントともあるでしょうか。対話を主にした。

（太田）

例えば、本棚づくりワークショップとかっていうのは幕別町でしょっちゅうやっているんですけど、一つの例だと、皆さん好き嫌いあると思うんですけど、ビブリオバトルっていうのを初めて幕別町でやったときにですね、当時の教育長、今町長になっていますけど、その教育長さんと、われわれがやっている改革にものすごく足引っ張っていた副部長さんと、あと議会でもものすごく図書館応援してくれていた議員さんと、ものすごく足引っ張っている議員さんとがなぜかいて、四人でテーブル囲んでビブリオバトルやっていたんです。それをみて、まあたまたまそういう班になっちゃったんですけど、新聞記者さんがすごくびっくりして、喜んでいたんですけど、要はさっきいった、ルールをつくればそういう対話は起こるんですよね。普段、図書館をめぐるケンカしている陣営が、そうやってお互いの本を紹介し合って、ほほえましかったんですけど。だからそういう対話をつくる方法っていうのはあるとは思

ます。

(永田)

図書館の利用は、これまで資料と人を結びつける、オーソドックスなスタイルですね。それに対して、コミュニティの人々が集まって、そして自分たちの問題だとか、趣味でもいいし、生き方でもいいし、そういったことを図書館という場で議論するというような利用、そうした形はまだ普及の度合いからいえば少ないような気がします。図書館ってコミュニティのためになにができてなんぼか、というわけですから、図書館という場をもっとさまざまに使っていいのではと思います。

日本の行政っていうのはすごく有能で、いろんなセンターをつくります。子どもが帰ってきたら学童保育とか、児童のためのセンターですとかね、あるいはコミュニティセンターとしての公民館とか、さまざまな施設がある。住民はそれぞれに対してイメージをもっていらっしゃいますけれども、生活はバラバラじゃなく一体性をもったものですから、もっとつながっていて欲しい。外国の公共図書館をみると、決してコミュニティセンターがないわけではないんですけど、包括的に図書館がコミュニティに関わるサービスを全体的に展開しているという感じがするんですね。もちろん図書館は、情報に関するサービスがベースですけども、もう少しこういった機会（用途）に住民の方に使っていただけるような、つまり対話の機会をつくるサービスもしていいと、していかないと、進展がない気がします。

質問は以上でありました。皆さん、フロアのほうからご意見、ご質問ございますか。遠慮なさらずにどうぞ。

(質問者)

今日は大変すばらしいお話をありがとうございました。ちょっと私の記憶のなかで確かではないんですけども、東京では公共図書館をNPO法人が指定管理でやっているところが多いと思うんですけども、確か小金井にある図書館で貫井（北）分室というところの田中肇館長という方がたぶんいらっしゃると思うんですけど、その方は確か図書館でそういう対話っていうか、そういうのをやっていたような気がするんですね。ちょっと今検索できないので確かではないんですけども、そのコミュニケーションを

とれる場にしたいというのを八洲学園大学の公開講座で聞いたことがあるので、今宇陀先生がおっしゃっているようなことを具体的にやっているのは、そこなんじゃないかなというふうに思いました。

(永田)

コメント、ご意見ありがとうございました。おっしゃっているところが今日の話の粋だと思います。ですから対話の機会のある図書館がこれから増えてゆくだろうと思います。だんだんみなさんが欲しいような図書館になってゆくでしょうが、まだ途中にわれわれはいると思います。宇陀先生がおっしゃったフューチャーセンターのようなワークショップなんかをやっている図書館は、日本ではあまりないでしょうね。住民の方々にとってそういうものが必要です。公共図書館っていうとどちらかというとレクリエーション施設という感じが強いかもしれませんが、人々の仕事や事業の用には、レクリエーション領域だけのものでは困るわけです。

(宇陀)

オランダのLEFをみせておいてなんですけれども、フューチャーセンターはハコを重視してそこで場をつくるとは限らないんですね。ここの空間だって、今からフューチャーセッションの場にしようと思えばここがフューチャーセンターになるんですよ。要は「場」をどうつくるかということなんですよ。その場づくりのなかに、空間だけでなく人と方法論が入ってくる。そういう意味ではフューチャーセンターは、メソッドというか方法論としてとらえると、図書館も受け入れやすくなるのかなと、今ちょっと感じました。

(永田)

それと、宇陀先生の話のなかに、ファシリテーターが出てきた。今後の図書館員が担わなければいけないのはなんなのか、これまでは資料の専門家というような話だったが、人々の理解が進むように舵取りをしてゆく、ファシリテーションが非常に重要だといわれています。まだ図書館の世界でそれが定着しているとはいえないけれども、そんなことが今後の図書館員の未来像だと思います。

時間がだんだん迫ってきましたので、一言ずつなにかコメントをいただけますか。

(太田)

今日のテーマはソーシャルイノベーションで、フューチャーセンターとか対話とか、いろんな話がありましたけれども、いずれにしてもそれが目的ではないんですよね。図書館とコミュニティと地域っておいたときに、そのあいだって皆さんもまだもやもやしていると思うんです。で、最終的にはなにを目指しているかという、問題解決、なにかしらの問題解決なんです。ソリューションモデルをどうやってつくってゆこうっていうことなんだと思います。今までは地域のソリューション、問題解決に対して図書館って、なにもしていなかったんですね。指くわえていただけて、本貸していただけて。そこにどうやって加わってゆこうかっていったときに、問題解決ってイコール物語の共有なんです。コミュニティにおける問題解決、そのプロセスをどうやって組み立てるかっていうと、物語の型って三つしかないと思うんですね。これは編集工学研究所にいたときに、リクルートさんと研究したんですけど、一つは未知解決型、これははっきりした問題があって、それに対するアプローチがある程度みえていっているときに、一個ずつ問題を提示して解決させてゆく方法。これ本来司書さんは得意なはず。「こういう本ない？」っていわれたときに、順番に本を提示してゆく。その当時、もう十何年前ですから、刑事コロンボ型っていいんですけど、最近の学生にいったら誰も知らなくて、コナン型って呼んでいるんですけど。一個ずつ問題を解いていく。ヒントをみつけては一個ずつ回答を出していく。もう一つのやり方は、関係振幅型。関係ある要素を全部集めておいて、進むべき道はみえていないときに、その関係性のなかでぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅやっているあいだに、なんとなく解決の方法がみえてくる。これサザエさん型って呼んでいるんですけどね。いつもカツオがいたずらしてぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ波平が怒って、いつの間にか平和になっている。このやり方がさっきからいってるフューチャーセンターとか、これから図書館とかでやりたいことだと思うんですけど。もう一つあるのが、所在転移型って呼んでいます。ある全然違うモデルをバーンってもち込むやり方です。これ、水戸黄門型って呼んでいるんですけど。突然印籠が出てきて、それまでぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ、風車の弥七

が出てきてしばらく様子をみましょうっていつてるのに、突然印籠が出てきて解決してしまう。それが、幕別町図書館のストレス測定器を持ち込んでみるとか、そういうやり方です。この三つの物語の型は、どの方法もとれるんで、図書館は無理して一つの方法、例えば印籠型をやる必要もないし。コンサルさんが無理やり印籠をもち込んできて、誰もその印籠を知らなくて、あんた誰みたいになってる例も多いですが、そうではなくて、方法というのは未知発見型になるのか、関係振幅型になるのか、所在転移型になるのかで、プロセスは多様にあると思うので、そのなかで、じゃあソーシャルイノベーションが目的ではなくて、問題解決のなかの一つの方法としてソーシャルイノベーション的なやり方もある、別のやり方もある、フューチャーセンターかもしれない、という考え方でいいのかなと思います。

(永田)

宇陀先生、お願いします。

(宇陀)

はい、じゃあファシリテーターに関連して一言申し上げます。現在、国立大学図書館協会でも、大学図書館の未来を考えようという事業があり、その事業の一環として未来の図書館を考えるワークショップを開いたんですね。西地区と東地区で一回ずつやりました。最初は西地区でやったんです。ワークショップですからグループをつくって議論します。そして、グループごとに委員をファシリテーターとしてつけたんですね。委員はほとんどが大学図書館員です。ワークショップの最後に今後の大学図書館をどうするかというアイデアを発表するって段になったときに感じたのは、ファシリテーターとして上手な人が入っているグループはやっぱりアイデアもおもしろいんですよ。最後に投票してどこのグループのアイデアが一番よかったかを決めました。

次に東地区で同様のワークショップを行いました。参加者は東地区の大学図書館員ですが、ファシリテーターは変えずに西地区のメンバーでやったんです。そしたらおもしろいことが起こりまして、西地区で負けたグループのファシリテーターが自分のファシリテーションのせいで負けたと思ったんでしょうね、そうしたら東地区のワークショ

ップでは西地区とは違ったファシリテーションをやりはじめて、結果として東地区のほうがおもしろいアイデアが多くでした。

これは私の独断と偏見でいいですけども、図書館員はファシリテーターに向いていると思いました。最初はファシリテーターってなにをするんだろうと、とまどっていたようなんですが、一度経験すると学習能力が高いと申しましょうか、なんかうまいんですよ。なにがうまいかはもう少しうまくいえないんですけど。ということで、図書館員はファシリテーターに向いています。

(永田)

最後に、お二方から図書館の方々に夢を与えてくれました。今日は「図書館とソーシャルイノベーション」というテーマで3時間お付き合いいただきました。時間がきてしまいましたが、ご満足いただけているかどうかはわかりません。その結果はお手元のアンケートにぜひ書き添えて、次回の足しにさせていただきたいと思います。次回の参考にさせていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。これにて閉会といたします。

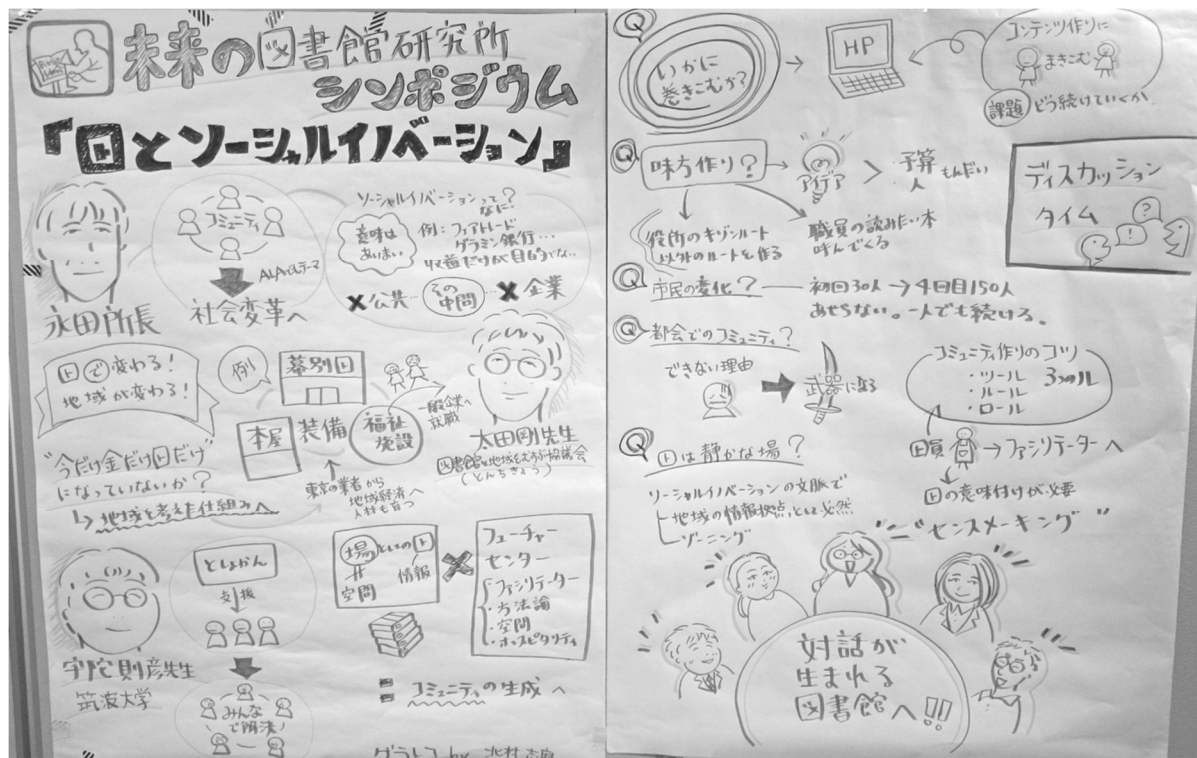


図15 図書館パートナーズ北村氏による本シンポジウムのグラフィックレコード

ワークショップ「図書館員の未来準備」の概要

本号では、ワークショップ「図書館員の未来準備」で展開された内容から、講師の千葉大学アカデミック・リンク・センター 常川氏、野田市立興風図書館 川嶋氏に、ご寄稿いただきました。常川氏による「つながりっぱなしの日常に、『図書館』をいかに埋め込むか：ソーシャル・デジタルライブラリーの設計技法の確立に向けて」(p.39～)、川嶋氏による「Webを活用した図書館サービス」を考える」(p.48～)を掲載しています。

お二人のレポートの前に、まずはこの、当研究所の取り組みであるワークショップ「図書館員の未来準備」についてご紹介します。



図1 第1回ワークショップでのPCを使ったワークショップの様子

1. 趣旨

当研究所は図書館のこれからのあり方についての調査・研究に従事しております。この調査・研究の成果を活かした教育研修の役割を認識し、図書館員の皆さまのこれからのに向けた事業として『ワークショップ「図書館員の未来準備」』を企画・開催しています。

主に公共図書館向けの内容とし、2017年9月に第1回を、2018年9月に第2回をこれまで開催してきました。

新たな社会発展や情報技術の急速な進展のもと、図書館員が必要とするコンピテンシーは変わりつつあると私たちは考えています。そこで、第1回及び第2回のワークシ

ョップでは、公共図書館は人々の学びの場、またコミュニティの共有地であることに注目し、これらの役割の進化したあり方と、日進月歩が続けている図書館システムについて、テーマ（ワークショップの科目）としてとりあげました。講師（ファシリテーター）は、各分野で新たな領域を拓いている方々にご協力いただきました。

2. 参加者

第1回ワークショップは全科目受講11名（領域ごとの受講は平均約14名ずつ）、第2回は全科目受講7名（領域ごとの受講は平均10名ずつ）の参加がありました。

図書館員（特に公共図書館員）に向けた教育研修事業として、図書館勤務者や図書館事業に関心を持つ方々などを対象に、公共図書館向けの内容としてプログラムを設定し、参加者を募集しました。想定していた通り、公共図書館員や、公共図書館向けの事業に携わる法人の方、司書課程での教育に関わる方などの参加がありました。

ワークショップとして効果的な運営のため、募集の際の定員は10名程度としています。全科目通しての参加はもちろん、テーマ（科目）群を領域としてまとめていますが、領域ごとの参加者数を前述したように、領域ごとの参加も可能としました。

3. 内容

3つの領域「図書館の役割（図書館とコミュニティ）」、「図書館の役割（図書館と学び）」、「図書館情報システム」を設定のうえ、カリキュラムを構成しました。実施要項は当研究所ウェブサイト (<http://www.miraitosyokan.jp>) に第1回・第2回とも公開しています。なお、第1回は各コマ時間100分とし、今年度第2回はワークショップの充実を図るため120分に延長し、テーマの更新をするなど、より効果的な運営ができる企画となるよう努めました。

3.1 カリキュラム（最新の第2回ワークショップ）

2018年度の第2回の科目や概要、講師等をご紹介します。3日間3領域6科目でカリキュラムを組み立てています。効果的に学べるよう、原則として事前課題を設定しました。適宜当研究所所員が準備・実施のサポートなどしました。第2回のカリキュラムは表1（p.37）の通りです。

3.2 第2回ワークショップの様子

枠の関係で詳細を書くことはできませんが、ワークショップ当日の様子を、写真とともに簡単にご紹介します。

（1）領域1「図書館情報システム」

「ソーシャル・デジタルライブラリー」（図2）では、ペルソナシートを活用したグループワーク等で効果的に学びました。このワークショップで展開された内容については、常川氏のレポートをご参照ください。



図2 「ソーシャル・デジタルライブラリー」の様子

「図書館サービスの未来準備：VRとAR、そしてAI」では、AR（拡張現実）などの技術についての講義や体験に基づき、図書館サービスのこれからについて考えました。



図3 「図書館サービスの未来準備」の様子

「Webを活用した図書館サービス」では、一人1台のPCを使用してプログラムを作成しながら、外部リソースを活用した検索サービス等の充実の方法を学びました。こ

のワークショップで展開された内容は、川嶋氏のレポートをご覧ください。



図4 「Webを活用した図書館サービス」の様子

（2）領域2「図書館の役割1：図書館と地域コミュニティ」

「図書館と地域コミュニティ」というテーマのもと、紫波町と墨田区で活躍されている講師のお二人から、実践例の紹介などとともに、豊富で充実したグループワークにより、図書館の役割について考えました。



図5 「図書館と地域コミュニティ」の様子

（3）領域3「図書館の役割2：図書館と学び」

「図書館と学び1」では、ファブラボの取り組みで活躍されている講師のもと、デジタルファブリケーションを用いてアイデアを形にする次世代の学習について、体験等を通じて学び、図書館の役割について考えました（モノづくりを通じた学びの支援については、メーカーズスペースなど国内外の図書館でも注目されつつあります）。



図6 「図書館と学び1」の様子

「図書館と学び2」では、「創造的読書のパターン・ランゲージ」(読書の仕方についての言葉(ランゲージ))を用いたワークショップにより、読書の方法についてコミュニケーションをとり、これからの読書とその支援について考えることで、図書館の役割について学びました。



図7 「図書館と学び2」の様子

3.3 参加者の評価や意見

第1回・第2回の各科目とも、アンケートによりご意見をいただきました。ほとんどが満足度、期待度に対する合致度ともに高く、よい評価をいただくことができました。講師の皆さまの、充実した内容・方法によるワークショップの賜物です。

参加者のワークショップでの様子やアンケートから、熟練の講師(ファシリテーター)のもと、先進事例からの学び、講師との対話やグループワークを通じて他者の意見が聞きながら考察できる効果、体験を通じて学ぶことで図書館での活用のアイデアやイメージがわくこと、図書館の役割に関して、これまでも図書館が支援すべきとされてきたこと、例えば読書の方法についても新たな発見を得られたこと、などの影響があったことが読み取れました。

参加者によりワークショップ成果が公開されている事例もあります。例えば、第1回ワークショップに参加された長谷川豊祐氏(立教大学兼任講師)のWebサイトで「雑誌記事と図書の検索」(<http://toyohiro.org/opac+/opacplus.html>)が公開いただいています。

また、第1回では期待と合致しなかった際の理由として時間が足りないという意見があげられましたが、第2回は参加者の様子から時間延長により時間の設定方法について改善できたのではないかと思います。参加費については適切という意見が多く、可能な限り維持していきたいと考えています。第2回の意見では、日程について一日通しで

ないほうがよいかもしれないという意見等があり参考にしながら多忙な図書館員の皆さまがより参加しやすくなる環境を目指していきたいと思います。

4. 今後の展開について

2019年度も引き続き、より効果的な企画を目指しながら第3回を行うことを計画しています。なお、このワークショップの内容に基づき外部展開を行った事例もあります。一般社団法人情報科学技術協会の「Webを活用した図書館サービス: Web API 活用術」(<https://www.infosta.or.jp/seminars/semi180305/>)において、川嶋氏と牧野(当研究所研究員)が「図書館員の未来準備」の内容に基づきワークショップ講師をしました。このように、ご要望・ご依頼があれば、可能な限りお応えできればと考えています。それでは引き続き、常川氏と川嶋氏のご寄稿によるレポートをぜひお読みください。(とりまとめ文責:牧野雄二)

表1 第2回ワークショップ「図書館員の未来準備」のカリキュラム

日時	領域	テーマ	概要	講師
9/18 10:00～ 12:00	① 図書館情報システム	ソーシャル・ デジタルライブラリー	「つながり」の中に図書館を埋め込む：ソーシャルウェブに適応した図書館情報システムを共に考えます。	常川 真央 氏 (千葉大学アカデミック・リンク・センター)
9/18 13:00～ 17:10 (休憩時間含む)	② 図書館の役割1	図書館と地域コミュニティ	住民をつなぎ、人々の力で愛すべき地域をつくるコミュニティ・イノベーションに着手します。	北村 志麻 氏 (墨田区ひきふね図書館パートナーズ) 手塚 美希 氏 (紫波町図書館)
9/25 10:00～ 12:00	③ 図書館の役割2	図書館と学び1	新しい学びへのチャレンジ: デジタルファブ리케이션を用いて、アイデアを形にする次世代の学習をワークショップ形式で考察します。	渡辺 ゆうか 氏 (国際 STEM 学習協会／ファブラボ鎌倉)
9/25 13:30～ 15:30		図書館と学び2	「創造的読書のパターン・ランゲージ」を用いてこれからの読書とその支援について考えます。	庭井 史絵 氏 (慶應義塾普通部)
9/27 10:00～ 12:00	① 図書館情報システム	図書館サービスの未来準備: VRとAR, そしてAI	最近注目を集めている仮想現実 (Virtual Reality), 拡張現実 (Augmented Reality), 人工知能 (Artificial Intelligence) について, 図書館サービスへの応用という観点から議論します。	宇陀 則彦 氏 (筑波大学 図書館情報メディア系)
9/27 13:00～ 17:10 (休憩時間含む)		Web を活用した図書館サービス	情報資源の入口としての役割が求められる図書館 Web サイトのデザインを, 実践的に修得します。	川嶋 斉 氏 (Code4Lib JAPAN／ 野田市立興風図書館)

LAMINAS

ラミナス

桧のぬくもりを図書館へ

ラミナスはなじみ深く、
あたたかみのある国産桧を使用した集成材を採用。

スチール部は環境負荷の少ない
パウダーコーティングを使用し、
パウダーホワイト色は明るく開放的な空間を演出します。

各種の振動実験でも実証された堅牢な書架は
安心・安全・快適な図書館をつくりだします。



シッパ型のスマートなデザインの棚板は、
JIS規格2種（60kg/棚）をクリアしています。
さらに、背当りとブックサポート用のレールを
標準装備しています。



スチール書架と同様に基本型と増結部分で構成。基
本は側板2枚＋スチールフレーム1台、増結は中帆
立1枚＋スチールフレーム1台の組合せとなります。
ヒノキ集成材とスチールフレームという異素材の組
合わせはシンプルでありながら堅牢な構造です。



資料の高さに合わせて天板を取り外すことが
できます。



オリジナルの棚受けレールを使用。丈夫なアルミ合金押出
材で、ピッチ12.5mmという細かさで棚板を調整できます。
また、棚板調整時の目安として10ピッチごとにマークが
ついています。



専用転倒防止金具を標準装備。
複式用には床固定用。単式には床固定用と壁固定用をご用意しています。
※転倒防止工事のお見積もり、施工を承っております。



震動実験による安全性は確認済みです。

「東北地方太平洋沖地震」（宮城県栗原市） X方向：575gal Y方向 495gal
「平成28年熊本地震」（熊本県西原村） X方向：869gal Y方向 480gal

2種類の地震波による実験を行い、安全性を確認しました。
開発協力：後藤正美先生（金沢工業大学）

※専用転倒防止金具（標準装備）による床固定、壁固定の転倒防止工事が必要です。



つながりっぱなしの日常に、『図書館』をいかに埋め込むか：

ソーシャル・デジタルライブラリーの設計技法の確立に向けて

How to Embed Library Services in the Social Web: The Method for Building Social Digital Libraries

常川 真央¹

Mao Tsunekawa¹

1 千葉大学アカデミック・リンク・センター

Chiba University, Academic Link Center

抄録

ウェブは、日常生活のあらゆる情報実践において利用され、市民の情報アクセスの自由を拡大した。さらに、ソーシャルネットワーク・サイトの台頭により、ウェブは「ソーシャルウェブ」へと発展し、人同士の交流も促進するようになった。一方で、フェイクニュースや「炎上」の被害など、ソーシャルウェブには市民の適切な情報の判断や冷静な議論を阻害する負の側面も存在する。しかし、図書館はソーシャルウェブが日常の情報実践にもたらす影響について対応できていない。そこで、本稿ではソーシャルウェブに対応する図書館情報システムとして「ソーシャル・デジタルライブラリー」をいかに設計・実装していくかを検討する。

本稿ではまず、図書館がウェブにどう向き合ってきたかを、ソーシャルウェブの歴史を交えて Library2.0 の事例を紹介する。そして、コミュニティの中でソーシャルネットワークを新規に創出するという既存のアプローチの問題点を指摘し、異なるソーシャルネットワーク同士が一時的につながる場所としての図書館という新たな概念を提起する。本稿では最終的に、ソーシャル・デジタルライブラリーを設計・実装するアプローチとして、既存のソーシャルネットワークを把握し、介入し、組みなおすといういくつかの段階に分けて漸進的に構築する方法を提案する。

1. はじめに

ウェブは誕生以来、25 年以上の歳月を経て現代の人々の情報行動に多大な影響を与えてきた。今や世界中の政府の情報を掌の上のスマートフォンを通じて得られるようになった。世界のどこかで起こった事件を、SNS を通じたライブ中継で見ることができるようになった。ビジネスの場面においても、業務上の情報を取引先とオンライン上でやり取りできるようになった。つまり、現代のウェブを

利用する人々は身の回りの物理的な環境の制約から離れて情報にアクセスできることができるようになったのである。ウェブは人々の情報アクセスの自由を拡大させてきたといえる。

しかし、自由な情報アクセスは、必ずしも人々の生活を向上させるとは限らない。フェイクニュースの氾濫は、個人の日常生活だけではなく、一国の政治情勢を左右するまでに大きな負の影響を及ぼしている。また、SNS における

「炎上」といった現象は、ウェブ上での議論が正しい情報に基づく冷静な判断をかえって阻害するリスクを持つことを示唆している。これからの市民は、与えられた自由な情報アクセスをいかに適切に活用するかという課題をより切実に抱えているのである。

こうした現在の状況を踏まえると、公共図書館は、依然として適切な情報提供を行う使命を帯びている。だが、公共図書館はどのようなアプローチでこの使命を達成できるのだろうか。スマートフォンを通じて絶えず情報を受け取り続ける人々に対して、図書館は単に情報を提供する以上のどんなサービスを提供できるだろうか。利用者側の情報環境の劇的な変容に対して、公共図書館の情報サービスならびに情報システムは明確なソリューションを提供できていない。

そこで、本稿では「電子図書館」のアプローチと「場としての図書館」のアプローチを越えた、新しい図書館情報システム的设计アプローチについて検討したい。そのために、ソーシャル・デジタルライブラリーという新たなデジタルライブラリーの在り方や動向、関連する研究を紹介する。

2. ソーシャルウェブをめぐる図書館の動向

2.1 ソーシャルウェブと日常生活

ウェブは、2005 年以降に SNS の登場によって徐々に「ソーシャルウェブ」へと発展していった。Calhoun によれば、ソーシャルウェブとは、「ウェブ上の相互作用、協働、コンテンツ形成・共有、投稿や参加を促進するウェブサイト、ツールやサービスを包括的に指す用語」である¹⁾。本来、ウェブの目的はインターネット上でドキュメントを共有することであった。そこでは、あくまでもドキュメント同士のつながりがウェブを構成していた。しかし、Facebook を代表とするソーシャルネットワーク・サイト (SNS) の登場は、人々の既存の交友関係を「ソーシャルネットワーク」としてウェブ上で可視化し、共有できるようになった。(注：現在では、SNS は既存の交友関係を越えて新たな交友関係を作り出す機能も有することからソーシャルネットワーク・サービスと呼ばれることが一般的である。) さらに、マイクロブログの普及によって人々

はオンライン上でつながる他の人々が発信する情報を絶えず受け取れるようになった。つまり、ウェブには、文書と文書のネットワークだけでなく、人と人、人と文書のネットワークが含まれるようになった。このような人と文書が混在するネットワークは、ウェブをコラボレーションの場に変えた。O'Reilly は、Web2.0 を提唱してウェブを文書共有の場ではなく、コラボレーションプラットフォームとして再定義した²⁾。以降、ウェブ上では様々なコラボレーションのサービスが構築された。たとえば、GitHub (<https://github.com/>) はオープンソースソフトウェアのコラボレーションサイトとして急成長を遂げている。このように、ソーシャルウェブへの発展は、ウェブが人々の活動を投影、促進するようになったことを意味する。

それでは、ソーシャルウェブは人々の生活にどのような影響を与えたのであろうか。オンライン上のソーシャルネットワークは、物理的な距離の制約を受けないがゆえに、いついかなる状況であっても途切れない状況にある。つまり、日常のどのような情報行動においても、オンライン上のソーシャルネットワークが影響を与え続けているということである。日常の情報行動を研究する研究者たちは、ソーシャルネットワークが日常生活に及ぼす影響を強調している。例えば boyd は、ソーシャルメディアによって作り出された環境を形作る性質として「持続性」「可視性」「拡散性」「検索可能性」の 4 点を挙げている³⁾。そのうえで、アメリカ合衆国におけるティーンエイジャーの SNS 利用に関する調査から、デジタルネイティブと呼ばれることもあるティーンエイジャーが「様々な文脈がつながって崩壊し、目に見えないオーディエンスがおり、言うことなすこと簡単に文脈から切り離されてしまう環境においてどうしたら社会に適応できるのかを探っている」ことを指摘している³⁾。つまり、SNS の情報行動が日常の一部となっている現代において、アイデンティティを形成できるよう安定的な文脈を保つことの支援が必要とされているのである。

このように、ソーシャルウェブがもたらす日常への甚大な影響を考えたとき、公共図書館が人々のソーシャルネットワークとなんの関連も持たなければ、情報源として相対的に認知されなくなってしまう。これからの図書館は、ウ

ウェブ上の単なる情報源というアプローチだけでも、場を提供するというアプローチだけでなく、利用者のソーシャルライフを支える媒介として機能していくアプローチをとる必要がある。

2.2 ソーシャル・デジタルライブラリー

図書館や学術情報流の関係者は、利用者の情報環境への変化に対応するために、ソーシャルサービスの機能を備えたデジタルライブラリーを提案・開発してきた。Casey は、Web2.0 の興隆に触発され、図書館サービスの新たなモデルとして Library2.0 を唱えた⁴⁾。Library2.0 とは、「絶えず変化する顧客の需要に図書館が応えることを可能にする図書館サービスのモデル」であり、SNS やレビュー機能などの利用者参加型の機能を図書館情報システムに実装することを提案している⁵⁾。LibraryThing (<https://www.librarything.com/>) は、ユーザが読書に関する記録を公開したり、ユーザ同士で読書グループを作って交流したりするような機能を提供するサービスである。LibraryThing の大きな特徴は、ユーザ同士の協働によって書誌情報を作成することができる点である。このようなユーザ参加型の仕掛けを用意することで、図書館には所蔵されていない資料についての読書情報も公開できるような場を作ることに成功している。LibraryThing に類似したサービスとしては近年 Amazon に買収された GoodReads (<https://www.goodreads.com/>) などがある。公共図書館の OPAC そのものをソーシャルウェブに対応させる試みがあり、アナーバー地域図書館が「Social OPAC (SOPAC)」として公開していた⁶⁾。SOPAC では、図書館利用者が蔵書資料に関するレビューの投稿や、タグの付与などの機能が提供されている。また、より先進的な試みとしてはオーストラリア国立図書館が提供するデジタルアーカイブ「Trove」(<https://trove.nla.gov.au/>)である。Trove は、クラウドソーシングと一般的に呼ばれる技術によって新聞紙コレクションのデジタル化を一般ユーザから協力を得ることによって進めている⁷⁾。このように、Library2.0 のムーブメントのもとで図書館のコレクションをユーザとの協働で作りに上げていく事例が積み上げられていった。

図書館情報学の研究においても、ソーシャルウェブに対応した図書館情報システムの研究は進められている。

Worrall は、このようなデジタルライブラリーを「ソーシャル・デジタルライブラリー (Social Digital Libraries; SDL)」と呼び、SDL の上で形成される読書コミュニティについて調査を行なっている⁸⁾。このように、ソーシャル・デジタルライブラリーは、新たな社会的ネットワークの構築を志向してきた。LibraryThing や GoodReads は、読書家のネットワークを創造しようとしてきた。

しかし、新たな社会的ネットワークの構築を目指す既存の方向性は、ソーシャルウェブへの適切な対応であるとはいえない。その理由として、まず社会的ネットワークが中核的な役割を持つウェブサービスは、ネットワーク外部性を有することが挙げられる。ネットワーク外部性とは、利用者にとってのサービスの価値がそのサービスの利用者数によって決まるような性質を指す。Facebook や Twitter など、既存の SNS が世界的なシェアを誇る中で、新しい社会的ネットワークを最初から創出していくことは効果的ではない。より本質的な理由としては、そもそもソーシャルウェブの本質は、社会関係を創り出すことではなく、既存の社会関係を可視化し共有することだからである。以上の2点の理由から、ソーシャル・デジタルライブラリーの既存の試みは利用者の日常生活における社会的ネットワークに入り込み、適切な情報サービスを提供する手段としてはあまり建設的ではない。

Library2.0 の議論が図書館情報システム全体を変える大きなムーブメントを引き起こさなかったのは、情報システムが何を可能にするかについての認識の誤りが原因であった。ソーシャルタギング、レビュー機能、SNS の機能といった利用者参加型の機能を実装することは、図書館情報システムを利用者と図書館員の協働のプラットフォームとして活用することを可能にする。しかし、協働そのものを促すとは限らない。Facebook や Twitter などにおいて様々なコラボレーションが実際に引き起こされたのは、機能そのものではなく、その機能を使う利用者の社会的ネットワークが原動力となったからである。

現代において、ソーシャルウェブと図書館の関係性を考えるとき、この錯誤を思考から排除することが重要である。

協働を可能にする機能を実装することと、協働を引き起こす場を形作することは別の問題である。後者を実現するには、情報システムを設計する以上に、既存の社会的ネットワークや活動をとらえ、組み直すことが不可欠なのである。つまり、ソーシャル・デジタルライブラリーの設計とは、協働そのもののデザインに他ならない。

それでは、図書館が協働をデザインしていくには、何を必要があるのだろうか。この問いに答えるためには、ソーシャル・デジタルライブラリーを設計するための根本的な問いに答える必要がある。それは、社会的ネットワークの中で図書館はどのように位置付けられるかということである。

3. ソーシャル・デジタルライブラリーの理論的基盤

3.1 社会的ネットワークにおける図書館

図書館と利用者の社会的ネットワークの関係性は、「コミュニティ」という概念によって理解が阻害されてきた。館種を問わず、図書館とは何らかのコミュニティに属し、情報資源の組織化と提供という形でその構成員に奉仕することを目的とした機関である。大学図書館は、大学という組織に属し、大学生や教員に対して電子ジャーナル、雑誌、図書などの情報資源を提供することで奉仕する。公共図書館は、国内においては主に地方自治体の文教施設として位置づけられ、市民に対して生涯学習の支援を行うことで奉仕する。同時に、いずれの図書館も組織外の人間の利用に対して門戸を開くなど、公共的な役割を負ってきた。図書館がこうあるのは、図書館はある組織の部署として認識されるのではなく、コミュニティという境界があいまいな存在に属する施設として見なされてきたからである。コミュニティという概念がなければ、大学図書館や学校図書館、公共図書館はそれぞれ関連性を持たなくなり、図書館情報学という共通のフレームで語ることができなくなる。このように、図書館の存在意義はコミュニティという概念によって規定されてきた。

しかし、コミュニティという概念は、利用者の日常生活の多様性を無視してしまう危険性がある。同一の地域に居住する市民の間にも、年齢や職業、趣味や所属する

組織などは異なっている。例えば、子どもに読み聞かせをするために絵本を探す保護者と、仕事に関する資格を取得するために図書館で関連資料を探索する独身の成人とが、お互いに同じコミュニティに属しているという連帯意識をもって図書館を利用しているとは言い難いだろう。コミュニティは、具体的なつながりを越えた連帯意識や協働を説明する重要な概念だが、一方で利用者像を詳細化していくことには不向きである。

社会的ネットワークという概念は、こうしたコミュニティという概念では分析しきれないような、人々の社会行動を説明するための概念として提唱され、発展してきた。社会的ネットワークという用語を明確な学術用語として最初に定義した研究者の一人が、社会学者のバーンズである⁹⁾。バーンズは、漁村のコミュニティにおいて村民の同意を得るために、村民同士のマイクロなつながりがいかに重要な役割を担ってきたかを明らかにした¹⁰⁾。こうして、コミュニティの内側で起こる社会行動を分析するために登場した社会的ネットワークは、やがてコミュニティを超えた人々のつながりが持つ社会的な影響について分析する概念として用いられるようになった。グラノヴェッターは、アメリカ合衆国における転職行動の研究の中で、当事者と密接なつながりよりも、むしろ何度かしか会ったことのない弱いつながりの方が転職活動に有利な影響を与えたことを明らかにし、コミュニティの外側にいる人々との弱いつながりの重要性を強調した¹¹⁾。

社会的ネットワークの概念から図書館の利用者を捉えなおすと、コミュニティの内側にある多様な社会関係を考察することが可能になる。例えば、公共図書館における読み聞かせボランティアのグループは、読み聞かせという活動を通じて独自の社会的ネットワークを形作り、絵本などの所蔵資料はそうしたつながりの媒介物として機能する。他方で、自習室に籠る中高生たちは、学校でのつながりから一時的に離れて集中するために図書館を利用しているかもしれない。そうかと思えば、毎日図書館で日々を過ごす高齢の利用者は知り合いと出会い、話すことを望んでいるかもしれない。いずれの利用者も地域コミュニティの一員であり、図書館という空間と所蔵

資料という共通のリソースを利用していながら、それぞれ独自の社会的ネットワークと活動を展開している。つまり、社会的ネットワークの中での図書館とは、異なるネットワークに属する人々が、資料というモノの共有によって一時的につながる場所なのである。

3.2 コミュニティの境界としての図書館

図書館を異なるネットワークが一時的につながる場所であるとみなしたとき、そこではどのようなことが期待できるだろうか。

ソーシャル・デジタルライブラリーは、人々が情報資源を通じて他の文化を理解することを助けることができる。なぜなら、資料から構成される知識の在り方は、利用者の所属するコミュニティによって異なるからである。情報資源が社会の様々な文脈の中でどう意味づけられているかを知ることが、情報資源そのものを理解することと同じように重要である。私にとってこの本はどのような意味を持つのか。あの人にとってこの本はどのような意味を持つのか。他のコミュニティにおいてこの本はどのような意味を持つのか。情報資源の位置づけの違いを知ることが、その情報資源が置かれた文脈を理解することでもある。それは、世界の多様性を理解し、自らの属する文化を深く理解することにつながる。しかし、ソーシャルウェブ時代の人々は、文脈を形作ることが脅かされ、膨大な情報に翻弄されるがゆえに分からなくなってしまうのである。このような混乱を回避するには、情報資源のつながりを整理し、文脈の違いを可視化する境界を作る装置が必要なのである。

デジタルライブラリーの社会的役割についての考察の中で Calhoun は、図書館情報学者によってデジタルライブラリーが異なる人々同士をつなげるネットワークとしての可能性が提示されてきたと論じている¹²⁾。ソーシャル・デジタルライブラリーは、協働の場であるだけでなく、そのような境界を提示する存在となることができる。要するに、図書館資料はコミュニティの境界を定義づけるオブジェクトとして作用する。このような、コミュニティの境界を定義づけるオブジェクトのことをバウンダリーオブジェクト Star らは呼んだ¹³⁾。バウンダリー

オブジェクトの概念は情報学においても注目されている¹⁴⁾。また、Van House は、デジタルライブラリーがバウンダリーオブジェクトとして機能し、異なるコミュニティに属する人々が知識を生み出す協働を行う場所となっていることを主張した¹⁵⁾。

ソーシャル・デジタルライブラリーの役割は、コミュニティ論が述べる同質的な集団への奉仕でも、社会的ネットワーク論が強調する固定的なつながりの内側で機能するものでもない。それは人々が属するコミュニティや社会的ネットワークを越えて、他者が作り出す異なる知識体系や協働の在り方を、デジタル化された資料という境界を通して学ぶ支援をするということである。エンゲストロームは、組織を越えた学習や協働で起こるつながりを表す、ネットワークとは異なる行為の概念として「ノットワーク(Knot Working)」を提唱している¹⁶⁾。ノットワークは、社会的ネットワークのように持続的なつながりではなく、ワークショップや災害での草の根の救助活動などの協働において一時的に作られる、結んでは解かれていくつながりのことを指す。ノットワークは、新しい知見を得たり、それぞれが属する領域で当たり前とされていることを再考したりするような「越境的学習」を促す。これからソーシャル・デジタルライブラリーの設計を評価するならば、利用者の効率性やコミュニケーションの頻度ではなく、越境的学習をどれだけ引き起こせるかに焦点をあてる必要がある。

4. ソーシャル・デジタルライブラリーをどう作るか

ここまで、ソーシャル・デジタルライブラリーの動向についてフォローしつつ、社会的ネットワークの概念に基づいて図書館の位置づけと機能を再考してきた。そして、ソーシャル・デジタルライブラリーの本質が、資料を介したノットワーキングを引き起こす基盤づくりであることを述べた。それでは、そのような本質を備えたソーシャル・デジタルライブラリーを現実の設計していくときに、何が要件となってくるだろうか。加えて、現実には図書館員は何から始めていけばいいのだろうか。本節ではこの問いのヒントを提案していきたい。

これまで述べたように、ソーシャルウェブに対応した図書館であるということは、既存の社会的ネットワークを取り込んでいき、そこから新しいつながりや協働を生み出していくことであると述べた。したがって、図書館がソーシャルウェブに対応していくことは、単に情報サービスの主体としているだけでなく、ターゲット層のことを調査し、介入していき、漸進的にサービスを開発していくことが必要である。

本稿では、ソーシャル・デジタルライブラリーの設計過程を、ターゲット利用者の社会的ネットワークと図書館の関係性という観点から3段階に整理し、各段階における課題と提案を粗描していきたい。

4.1 社会的ネットワークと図書館が対話する段階

公共図書館がある人々を対象として情報サービスを提供するには、まずその人々がどのような社会的ネットワークに埋め込まれているかを理解する必要がある。これは、マーケティング調査の一種であるともいえる。次に、ターゲットとする人々の社会的ネットワークが作り出す場から図書館が見えるようにしていく必要がある。そのためには、社会的ネットワークを可視化し、維持するソーシャルウェブ・サービスに図書館は参画していく必要がある。その手段として、図書館がソーシャルウェブ・サービス上に公式アカウントを開設し、情報を発信していくことは効果的である。ただし、ここでの公式アカウントの目的は、情報サービスの広報ではない。あくまでも、ターゲットとする人々に図書館の存在が認知され、社会的ネットワークを伝播して影響力を持つことが重要なのである。そうすることで、図書館はターゲット層が過ごす日常の単なる背景ではなく、人々の日常を構成する重要な要素として認識されるようになる。

Library2.0の潮流に位置する様々なソーシャル・デジタルライブラリーは、この段階を忘れている。図書館自身が人々と交流する主体として社会的ネットワークに埋め込まれなければ、そもそも図書館サービスに参加しようとはしない。ソーシャル・デジタルライブラリーの設計は、ソフトウェアの開発から始まるのではなく、ネットワークの構築からはじまるのである。

具体的な取り組みとしては、ソーシャルメディアに図書館資料が埋め込まれやすいようにメタデータを適切に整備し、伝達することが必要である。ソーシャルメディア上で図書館資料を紹介する投稿を行うとき、効果的に情報が表示される必要がある。具体的には、ウェブページにソーシャルメディア用の情報を埋め込む Open Graph Protocol(OGP, <http://ogp.me/>)などなどのメタデータ規格を活用することが望ましい。図書館のウェブサイトや OPAC の中には、このようなメタデータを付与していない場合がある。ソーシャルメディア上で効果的に情報発信していくためには、こうした外部のサービスに情報を適切に伝えるためのメタデータ整備も重要である。

そして、SNS に介入するための図書館のエージェントを実装することも重要である。エージェントは、図書館の存在を SNS 上で可視化するための存在であり、具体的にはソーシャルメディアや SNS 上の図書館公式アカウントなどである。エージェントとしての図書館公式アカウントは、単に情報を発信するだけではなく、ユーザの文脈を把握し、対話するような存在ではなくてはならない。エージェントは必ずしも人間の担当者によるものである必要はなく、可能であればボットなどのプログラムによる自動化の導入も可能である。

4.2 利用者参加型の情報サービスを実現する段階

ターゲット利用者とのネットワークが構築できて初めて、ソーシャル・デジタルライブラリーの機能の開発を検討することができる。ゆえに、従来あるような隔年ごとに入札を実施して図書館情報システムをまるごと更改していくアプローチは、ソーシャル・デジタルライブラリーの設計・開発に根本的に向いていない。社会的ネットワークのような常に構造が変動していくものに設計が依存していくのであれば、システム設計と実装は、短期間に高い頻度で行われていく必要がある。近年、ウェブサービスなどの開発ではアジャイル開発と呼ばれる手法が主流となっており、このような短期間かつ高頻度な機能の実装・改善を可能とするシステム導入のプロセスをとることが、ソーシャル・デジタルライブラ

リーを設計する図書館には望ましい。しかし、現実の公共図書館にとって、こうした柔軟なシステム開発体制へダイナミックに移行していくことは、自治体の行政機関としての様々な制約から非現実的である。そこで筆者は、公共図書館がソーシャル・デジタルライブラリーの機能を構築する現実的な戦略として、「ゲーミフィケーション」を提案したい。

ゲーミフィケーションとは、「非ゲーム的な文脈でゲーム要素やゲームデザイン技術を用いること」である¹⁷⁾。注意点としては、ゲーミフィケーションはゲームそのものを開発・実施することではない。あくまでも日常の作業にゲーム設計の知見を活かすことが本質である。ソーシャル・デジタルライブラリーの成功は利用者の協働にかかっている。ゆえに、ゲーミフィケーションの導入により利用者のモチベーションを高めることは有効な手立てである。加えて、ゲーミフィケーションの利点は、それが「ルール設計・実践」であって情報システムの実装を必ずしも必要としない点である。そのため、情報システムの改善や刷新が望めない状況下にある図書館であっても、手作業によって日常のサービスにゲーミフィケーションを活かすことができる。もしソーシャル・デジタルライブラリーをこれから設計するならば、既存のサービスを利用者参加型にしていくゲーム要素を導入・実践し、軌道に乗ったところでその実践を自動化・効率化していくために情報システムを導入していく方法をとることができる。このアプローチは、2.2で述べたように、SNSが既存の社会的ネットワークを原動力としていたことを考えれば極めて自然である。

4.3 社会的ネットワーク同士をつなげる段階

どのような手法によって実装するにしても、ソーシャル・デジタルライブラリーの実装が成功したのであれば、最終的には社会的ネットワークの単なる可視化にとどまらず、拡張に寄与するはずである。それでは、情報サービスを提供する段階から社会的ネットワークの拡張に達するにはどのような取り組みが必要なのであろうか。筆者は、体験情報の資料へのリンクを提唱する。

筆者は、「記憶するラーニング・コモンズ」を提唱した¹⁸⁾。そこでは、大学図書館における学生や研究者の学習体験を「記憶」し、他の利用者と共有するような学習環境を想定した。それは公共図書館でも当てはめることができる。体験の記述は、利用履歴の記録・蓄積とは異なる。利用履歴とは、客観的に観測可能な出来事を記述したものである。一方で体験を記述するということは、当事者の主観的な意味や認識を含むものである。そこでは、当事者自身による意味の規定と了解が不可欠である。同時に、図書館が「記憶」する体験とは、公共的である必要がある。そのため、体験を記述する行為はパブリックスピーチの一種であり、図書館における資料が図書館を利用する権利を有する私たちにとってどのような意味があるのかを言明する。ソーシャル・デジタルライブラリーは、利用文脈情報を機械可読な情報として保有し、蔵書検索時に利用者に提供する。さらに、SNSなどから流入した利用者がこうした情報を得ることで別の社会的ネットワークの存在を認知するようになる。

本提案を具体的にイメージしてもらうために、筆者がかつて提案したアイデアである、プロジェクト型ブックハンティングを例に説明する。プロジェクト型ブックハンティングとは、利用者による一定冊数の選書を書店などで行ってもらう。ただし、プロジェクト型ブックハンティングでは、選書の前に各々の日常の問題を共有するミーティングを設ける。そして、選書した後は、その問題を解決するための何らかの助けとなること、図書館に所蔵される意義があることを説明するタスクが参加者に課せられる。プロジェクト型ブックハンティングでは、そのような一連の議論の過程を記録し、匿名化が為されたうえで、最終的には図書館員の手によってレポートとしてまとめられる。このように、選書に対する一定程度の権利を報酬として与えることで、図書館における資料の意味づけに関する公共的な議論に利用者を参画させることを促すのである。この場合、ソーシャル・デジタルライブラリーは、選書された資料が目録に登録される際、プロジェクトがこの本を選書した一連の議論をまとめたレポートを同時に登録し、リンクする。こうすることで、利用者がOPACで蔵書資料を検索したとき、単に

資料の情報だけでなく「その資料がこの図書館の利用者にとってどのような意味を付与されたのか」「この図書館の利用者がどんな問題と向き合っているのか」という文脈を知ることができる。つまり、ソーシャル・デジタルライブラリーの実装によって公共図書館は、資料の提供場所から、文脈の記述を公共的に行う機関として変貌する。このように市民のプロジェクトによる選書という協働と、図書館利用者の個人的な情報探索との間に資料を通じたゆるやかなつながりをソーシャル・デジタルライブラリーが可視化する。そして、ある社会的ネットワークに組み込まれた利用者が、資料に紐づけられた別の社会的ネットワークの人々の体験に触れ、そうした人々とコミュニケーションをとる経路を提供することで社会的ネットワークの拡張は起こるのである。

5. 結論

本稿では図書館がソーシャルウェブの発展に対してどのように対処してきたのかを振り返りつつ、これからのソーシャルウェブへの対処法を論じた。日常の社会的文脈に図書館が対応していくためには、利用者が属する社会的ネットワークの境界を形作るような資料提供が必要であると主張した。そして、本稿では、図書館が資料の利用文脈を調査し、保存し、異なる社会的ネットワークを有する利用者に提供する機関となることを提案した。そのうえで、ソーシャル・デジタルライブラリーを設計するための現実的な方策について、いくつかの段階に分けて提案した。

現代は、生き方が多様化し、他方で急激なテクノロジーや社会構造の変化によって自律的な生涯学習を市民が行うことが余儀なくされている。しかし、自律していることは孤立していることではない。言論の上にしろ職場などでにしろ、学習は、常に社会实践を伴って初めて完結する。ゆえに、公共図書館は情報アクセスの保障だけではなく、情報の利用文脈の提供をも射程に入れる必要がある。また、現代ではダイバーシティが重要視されている。そのため、様々な文化や集団が自由であり、社会的に認知されている状況を創り出すことが大事である。

そのような状況では公共図書館は、多文化間の仲介役として様々な役割を果たせるだろう。

未来の公共図書館は、地域コミュニティに関わる社会的ネットワーク群において、所蔵資料はどのように位置づけられているのかを明らかにする、ローカルな知を探究する研究機関となるだろう。

【参考・引用文献】

- 1) Karen Calhoun. Digital libraries and the social web : scholarship. In Exploring Digital Libraries Foundations, practice, prospects, chapter 9. Facet Publishing, 2013.
- 2) Tim O'Reilly. "What Is Web 2.0". <https://www.oreilly.com/pub/a/web2/archive/what-is-web-20.html>, (accessed 2019-02-16).
- 3) danah boyd. つながりっぱなしの日常を生きる：ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの. 野中モモ訳. 草思社, 2014. "It's complicated : the social lives of networked teens" の邦訳。
- 4) M.E. Casey, L.C. Savastinuk. Library 2.0 : A Guide to Participatory Library Service. Information Today, 2007.
- 5) M.E. Casey, L.C. Savastinuk. Library 2.0 : A Guide to Participatory Library Service, chapter 2. Information Today, 2007.
- 6) Blyberg, John. "AADL.org Goes Social". Blyberg.net | Alibrary-geek blog. 2007-01-21. <http://www.blyberg.net/2007/01/21/aadlorg-goes-social/>, (accessed 2019-02-16).
- 7) "Contributor guidelines". National Library of Austraria. <https://www.nla.gov.au/content/contributor-guidelines>, (accessed 2019-02-16).
- 8) Adam Worrall. Social Digital Libraries : Their Roles Within and Across Social Worlds, Information Worlds, and Communities. In S.J. Cunningham & E.Rasmussen, editor, Proceedings of the Doctoral Consortium, JCDL 2013, the 13th ACM/IEEE Joint Conference on Digital Libraries, p.55-62, Indianapolis, 2013.
- 9) 野沢慎司, J.A.(John Arundel) Barnes, 立山徳子, Elizabeth Bott, Stanley Milgram, 大岡栄美, Mark S. Granovetter, Barry Wellman, James Samuel Coleman, 金光淳, Ronald

- S. Burt. リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本. 勁草書房, 2006.
- 10) J. A. Barnes. Class and committees in a Norwegian island parish. *Human Relations*. 1954, vol. 7, no. 1, p. 39-58.
- 11) Mark S. Granovetter. The strength of weak ties. *American Journal of Sociology*. 1973, vol. 78, no. 6, p. 1360-1380.
- 12) Karen Calhoun. Social Roles of Digital Libraries. In *Exploring Digital Libraries Foundations, practice, prospects*, number September 2013, chapter 6. Facet Publishing, 2014.
- 13) S. L. Star and J. R. Griesemer. Institutional Ecology, 'Translations' and Boundary Objects: Amateurs and Professionals in Berkeley's Museum of Vertebrate Zoology, 1907-39. *Social Studies of Science*. 1989, vol. 19, no. 3, p. 387-420.
- 14) Isto Huvila, Theresa Dirndorfer Anderson, Eva Hourihan Jansen, Pam McKenzie, Adam Worrall. Boundary objects in information science. *Journal of the Association for Information Science and Technology*. aug 2017, vol. 68, no. 8, p. 1807-1822.
- 15) Nancy A. Van House. Digital Libraries and Collaborative Knowledge Construction. In *Digital Library Use: Social Practice in Design and Evaluation (Digital Libraries and Electronic Publishing)*, chapter 11, p.271-295. The MIT Press, 2003.
- 16) Engeström. Yrjö, Engeström. Ritva, and Vähäaho. Tarja. When the center does not hold: the importance of knotworking. In *Activity theory and social practice: cultural-historical approaches*. Aarhus University Press, 1999.
- 17) ケビン・ワーバック, ダン・ハンター. ウォートン・スクールゲーミフィケーション集中講義. 三ツ松新監訳. 渡部典子訳. 阪急コミュニケーションズ, 2013, p.51-51. "For the Win: How Game Thinking Can Revolutionize Your Business" の邦訳.
- 18) 常川真央, 小野永貴. 記憶するラーニング・コモンズ. 大学図書館研究. 2017, vol. 107.

Author Abstract

Citizen uses the Web through information practices in everyday life. The Web expanded the freedom of citizen's information access. Also, with the rise of social network sites, the Web has evolved into the "social web," which also encourages interaction among people.

On the other hand, such as fake news and "flaming," the social web has negative aspects that impede citizen's discussion and judgment of appropriate information. However, libraries have not corresponded to the impact of the social web on daily practice.

In this paper, we suppose the method of designing "social digital libraries" as a library information system corresponding to the social web.

First, we describe "Library2.0" as a case of how Library has been facing the Web, including the history of the social web. Second, we show problems of the existing approach of creating a social network newly in the community and present a new concept of a library as a temporary connection point between different social networks. Finally, we propose an approach to designing and implementing the social digital libraries. In this approach, libraries gradually build up a social digital libraries in three stages; grasping, intervening and reassembling existing social networks.

「Web を活用した図書館サービス」を考える

Consideration on "Library Service Using the Web"

川嶋 斉¹

Hitoshi Kawashima¹

1 野田市立図書館

Noda Public Library

抄録

インターネット上には、図書館サービスの充実化に活用できる情報源が多く提供されている。最近も openBD による書誌・書影情報や、国立国会図書館サーチ API での書影・近刊情報の提供開始など、新しい動きが続いている。また公共図書館が利用者に提供する資料については、紙の所蔵資料だけでなく、オンライン DB や電子図書館、デジタルアーカイブなど、多様な資料を扱うようになり、国立国会図書館のデジタル化資料送信サービス利用館も増加している。活用できるもの、提供する資料が変わっていけば、これらを使った図書館サービスのあり方も当然、変化していくはずである。

本稿では、まず、著者の勤務する千葉県の野田市立図書館での Web を活用した取り組みと、その効果について解説する。次に、講師を務めた、未来の図書館 研究所主催「図書館員の未来準備」で行われたワークショップ「Web を活用した図書館サービス」について公立図書館の事例を紹介しながら説明し、最後に Web サービスを活用していく上での注意点を述べる。

1. はじめに

「Web を活用した図書館サービス」は、未来の図書館 研究所主催のワークショップ「図書館員の未来準備」で私が講師を担当した講座と実習のタイトルである。

現在、公共図書館の Web-OPAC でも、Google や Amazon の API (サービスをネットワークを介して呼び出す仕組み、Google 等で提供される機能を他のサービスに取り込める) を使った書影の表示や、カーリル¹⁾ や Webcat Plus²⁾ へのリンクアウト (外部サイトへのリンク) など、外部の情報源を活用した情報提供が普及している。

またインターネット上では、国立国会図書館が提供する Web サービスの API やデジタル化資料、各社サービスの

API (書影・書誌情報提供等)、電子図書館など、図書館が活用しやすいサービスが増えてきている。

本稿では、私の勤務している野田市立図書館の取り組みや、該当のワークショップの内容に触れながら、「Web を活用した図書館サービス」について考えてみたい。

私の勤務先が公共図書館であり、かつワークショップが主に公共図書館向けであったため、公共図書館の事例を中心に述べる。

2. 野田市立図書館での取り組み

2.1 野田市立図書館での取り組みの概要

ワークショップをするきっかけは、野田市立図書館の

Web サービスである。その取り組みについて触れたい。

野田市立図書館の Web サイトは「所蔵していることに気づいてもらうこと」、「来館時に近い体験をしてもらうこと」を目指している。

「所蔵していることに気づいてもらうこと」は、Google などのインターネット上の検索サービスで当館の所蔵資料がヒットすることを考えている。この時、検索上位に来る必要はない。

図書館員であれば、相互貸借などの対応として近隣図書館に所蔵がないときに検索サイトで「書名」「責任表示」に「図書館」などと加えて検索し、所蔵している図書館を探す事があると思う。こういった時に、他館に所蔵がないようなら、野田市立図書館にある（そうでない場合は、検索の下位に沈んで 1 ページ目には表示されない）ぐらいの検索優先度でよい。例としては、「所蔵目録（ISBN 未入力）」³⁾が、特徴的な仕組みである。これは、野田市立図書館の所蔵のうち、ISBN のない図書 10 万点ほどについて、HTML 形式の静的なリストで提供する、という仕組みである。単純だが、検索エンジンで該当資料が検索できるようになる事で、普段、野田市立図書館のサイトを訪れない方や図書館からの問い合わせが来るようになった。

一方で、「来館時に近い体験をしてもらうこと」については、さらに 2 つ「常に新鮮な資料紹介をすること」と「『所蔵がありません』で終わらないこと」を目指している。

この実現のために、さまざまな Web 上のサービス機能を活用した。今回はワークショップ「Web を活用した図書館サービス」に関連していることを含めて、「来館時に近い体験をしてもらう」サービスについて、詳しく触れる。内容は、著者の過去の論文「API で図書館サービスを拡張する」⁴⁾と重なる部分もあるが、改めて書くことにする。

図 1 は 2018 年 10 月時点のトップページ⁵⁾である。

まず「常に新鮮な資料紹介をする」ということでは、トップページの中央に、資料が表示される「在架なう！」というサービスがある。「在架」になった（書架に戻った）資料を 30 分毎に更新して表示する。書影表示には Google Books API⁶⁾を使っている。

「在架なう！」は、私の所属しているメーリングリスト「公共図書館 Web サービス勉強会」⁷⁾で 2010 年 4 月ご

ろに「例えば最新のニューストピックをキーワードにして関連資料を提供したり、サイトを訪れるたびにランダムで資料を紹介する仕組みはないか」という、実際に図書館に来た時と同じ資料との出会いを作れないか、という話からできた仕組みである。



図 1 野田市立図書館 トップページ

公共図書館の多くのサイトで予約ベストや新着図書の紹介を行っている。しかし、同じ本が複数ある書店と違って、図書館ではそのような本は利用が多く、書架にあることは少ない。特に予約ベストに紹介されている本は、借りられるまでに半年待ちも珍しくない。

こういった資料を Web サイトで紹介しても、あまり図書館に来館するきっかけにはならないだろう。ホームページ上で資料利用の提案をするのであれば、在架の資料が望ましい、と考えた。イメージは、多くの公共図書館にある今日返却された本の棚を再現することである。

「在架なう！」の名称は、上記メーリングリスト主催者であり、ゆうき図書館の副館長や龍ヶ崎市立中央図書館の館長などをされていた笹沼氏からの提案である。

「在架なう！」の下には、カーリルが提供しているカーリルレシピ⁸⁾から本の紹介情報を表示している。

カーリルレシピを配置したのは、カーリルレシピの場合、図書館や書店、一般の利用者などが頻繁に資料の紹介を行っており、利用者が図書館サイトに来るたびに新しいレシピを発見できると考えたからである。

「在架なう！」もカーリルレシピの活用も、自動的に資料紹介ができる仕組みだ。業務量を増やさずにページの新鮮さを保つには、こういった自動的な方法が適切だろう。

次に「検索サービスが『所蔵がありません』で終わらない」ための仕組みは「web-OPAC+」と呼んでいる。

「web-OPAC+」という名称は、あるコンビニエンスストアの看板を見て思いついたものだ。仕組み的には、システムベンダーの提供するサーバサイドの仕組みと、図書館員が必要と思うサービスや機能をプラスしていくクライアントサイドの仕組みに切り分けることで、より自由度が高く運用できる、というものである。

web-OPAC+での検索結果は図 2 のようになる。

¹¹⁾ などが表示されている。

立」と「デジタル図書館」というタブをクリックすると、
所蔵していない情報源についても表示される。

「デジタル図書館」については、国立国会図書館のAPIを使って、国立国会図書館デジタルコレクション¹²⁾、CiNii¹³⁾、青空文庫¹⁴⁾、デジタルアーカイブ ADEAC¹⁵⁾を対象にこれらを検索したときのヒット数を表示する。

野田市立図書館は、国立国会図書館の図書館向けデジタル化資料送信サービス¹⁶⁾の送信先機関となっている。その利用を促すため、Web-OPAC内にヒット数を表示する、というやり方をした。

「千葉県立」図書館の検索結果については、千葉県立図書館で予約可能な資料のデータ（ISBN）を、毎年、県立図書館に提供してもらうことにより実現している。予約の受け付けまでネット上で済ませるというシステム構造上、図書館員による対応のみでは対応できないので、システムベンダーに協力してもらい、未所蔵でも指定した書誌はWeb-OPAC上で予約を受付けられるように変更した。

千葉県立図書館の資料の予約は、最初に成田市が取り組みを始めた機能を野田市でも模倣したものである¹⁷⁾。

図書の検索結果がない時には、十進分類を表示し、十進分類検索へ誘導する仕組みとなっている。

書影の表示は Google Books と openBD の API を併用している。このため、openBD に「試し読み」がある場合は、そのアイコンが表示される。

web-OPAC+は、図書館システム側の変更を最小限に抑えて、Web-OPAC の使いやすさの改善をしていこうという発想なので、Web サーバに影響が出ず、クライアント（利用者の使うブラウザ）側で動く JavaScript というプログラミング言語を使用している。Web-OPAC 内 JavaScript ライブラリ (opacplus.js) と¹⁸⁾、そのローカライズ用の JavaScript プログラムを讀込ませてカスタマイズを行う方法である。

実施方法は単純で、Web-OPAC 内で読み込まれる Java Script ファイルの一つの末尾に以下のような数行のコードを追加しているだけである。この時、読み込まれたファイルによって Web-OPAC 全体の書き換えを行っている。



図2 web-OPAC+の検索結果

検索一覧のタブには、図書・雑誌などが並ぶ。「千葉県

```
function addOpacPlus(){
var scriptElement0 = document.createElement("script");
scriptElement0.setAttribute("src", "../homepage/decopac/
decopac.js?var=1.7");
scriptElement0.setAttribute("type", "text/javascript");
document.body.appendChild(scriptElement0);
/*****以下追加するファイルを繰り返す*****/
}
addOpacPlus();
```

図3 JavaScript のコード

ベンダー標準の Google Books API に加えて、openBD の API を使った表紙画像の表示や、カーリル開始時の Web-OPAC との相互リンク¹⁹⁾は、この仕組みによる対応であり、ベンダーの正式対応より早く実現できた。

画面中に情報を詰め込みすぎではあるのだが、実際にクイックレファレンスなどに使うものを表示すると思うと、これくらいは必要だろうと考えた。

2.2 野田市立図書館 Web サイトの試みの評価

野田市立図書館 Web サイトの試みについて、ここでまとめてみる。

まずは web-OPAC+ について触れる。

例えば、Web-OPAC とカーリルや openBD との関係をいち早く実現できたことについては、web-OPAC+ の手法の利点である。図書館システムベンダーであれば、提供しているあらゆる環境で、不具合があるかどうか確認が必要だが、web-OPAC+ での実装に関しては、サーバ側の設定やプログラムに影響しない JavaScript での実現なので、単純に現場（この場合は野田市立図書館）での動作確認だけでよい。

web-OPAC+ で実現した、「資料詳細画面」（1 書誌ごとに書誌と所在情報が表示される画面）にカーリルや Webcat Plus のリンクアウトを作る表示形式は、いくつもの Web-OPAC で採用されている。当館のシステムベンダーでいえば、Google Books API を使った書影表示、資料タブ（このベンダーの検索一覧は図書・雑誌・視聴覚などにタブが分かれる）ごとにヒット件数を表示することが、

のちに反映された。図書館員が必要と思って実装したものが標準化していく流れである。

一方で、野田市立図書館の利用状況が目立って変わるほど、これらのサービスが影響を与えているか、というと、残念ながら、そうではない。

千葉県公共図書館協会『千葉県の図書館』²⁰⁾という毎年発行される統計がある。現時点での最新版である 2017 年版で確認してみよう。掲載されている統計データは 2016 年度のもののになる。

市町村立図書館の個人貸出点数合計は 3,121,838 点、同じく予約点数は、639,284 点、貸出点数に占める予約点数の割合は 18.1% となる。また ILL（図書館間相互貸借）による借受総数は 122,828 点で予約点数に占める割合は 2.2% である。

館によっては ILL による借受数が予約点数を超えたり、予約の半分ほどの数字になっているので、ILL による借受けが、必ずしも予約ではない部分はあるが、県内全体で言えば、それほど大きな誤差にならないはずだ。

これを野田市の数字で見えてみると、貸出点数は 1,007,436 点、予約点数は 185,507 点、ILL による借受点数は 4,349 点。貸出点数に占める予約点数の割合は 18.4%、ILL による借受総数が予約点数に占める割合は 2.3%、でほぼ平均値である。

ただし、千葉県立図書館からの借受数のみで見えてみると、『千葉県立図書館 要覧』²¹⁾の平成 30 年度版では、1 位は成田市（2,271 件）、2 位は習志野市（2,228 件）、3 位が東金市（2,173 件）に続いて、野田市は 4 位（2,133 件）である。

平成 29 年度版では、2,592 件で野田市が 1 位、成田市が 4 位（2,237 件）だ。

前述のように野田市、成田市は、インターネット上から県立図書館所蔵資料の予約受付が可能な図書館である。

数字に表れるようになるには、情報源を表示や書影などを追加することによる分かりやすさの追求だけでなく、インターネット上で予約手続きが終了する、という出口までのサービスの形を考える必要がある、ということだろう。

「デジタル図書館」タブの追加によりデジタル化資料送信サービスの利用者が増えたかは、タブ追加自体が該当サ

ービス導入と同時であるので、また他館と比較するための数字もないので判断できないが、「サイトで見た」と言っても、閲覧方法について問い合わせがあったり、来館があったり、というケースは存在した。

「在架なう！」はさらに評価が難しい。

「在架なう！」については、当初、資料のタイトルや著者などの文字情報を表示するだけのものだった。その際は、それほど反応がなかったが、表紙画像を表示するようになって、カウンターで「図書館にこんな資料があるんだって」と思って来た」と言われたり、返却直後の資料にインターネットから予約が入るということが多くなったように思う。また、見た目としても、ページ中央に取り扱う資料の書影が表示されるインパクトは大きい。

ただし、トップページにあるために、アクセス数などの数字は不明である。例えば、「在架なう！」の資料をクリックした際に、特定のファイルを読込むなどすると、アクセスログとして実際の利用頻度が分かり、面白いかもしれない。

3. ワークショップについて

3.1 ワークショップにあたって考えたこと

野田市の立図書館での取り組みもあって、ワークショップ「Web を活用した図書館サービス」を行うことになったが、そもそも、図書館の Web サイトに求められているもの、というのはどういうものだろう？

公立図書館の利用者アンケートは、インターネットで検索すると多数見つけることができる。そのほとんどで、図書館の利用目的は「資料を借りること」がトップとなっている。

図書館サイトの利用目的については、少し古いが横浜市がサイトリニューアルに伴って実施した、平成 21 年のものがある²²⁾。この中に「ホームページの主な利用の目的はどれですか（複数回答）」という問いがあり、回答を見ると「図書の検索」85.1%、「図書の予約」94.3%に対し、「催し物を調べる」は 3%であった。

もちろん、これは一つの館の利用者アンケートではあるが、多くの利用者が資料を検索・予約するためにサイトを訪れるということは、考慮にいれるべきだろう。

しかし公共図書館のサイトを見てみると、多くのサイトで資料紹介に割かれるスペースが少なく、かわりに催し物とお知らせを中心に表示していることに気づく。

特に、書影をトップページに表示している図書館は極端に少ない。月替わり程度の頻度で 1、2 冊の書影を表示している事例はいくつかあるが、館内の紹介コーナーにあるように、何冊もの書影をトップページに展開しているのは、北海道の幕別町立図書館、青森県の板柳町民図書館、千葉県の野田市立図書館、あとはトップページに表示されるスライドのうちの一枚という変則的な形だが茨城県の取手市立図書館ぐらいである。

同じように本を扱い、イベントも開催している丸善や紀伊國屋書店などの書店サイトでは、書影を使った資料の紹介や、バナーを使った特集資料の紹介がトップページの目立つ場所に配置されているのに比べると対照的である。

書店サイトとの差は、検索結果にも表れる。

公共図書館サイトでは、自館で所蔵していない資料の書誌についてはヒットしないことが多いが、書店サイトは例えば、在庫がなく、発注ができないとしても、書誌だけはヒットする仕組みになっているものが多い。

どちらが、図書館内でのサービスに近いかと考えると、書店サイトの方が、実は図書館内サービスに近い。

実際の図書館では、資料の面見せを行い、利用者と資料を出会わせる工夫を行っており、こういった資料との「出会い」や「発見」の提供は、図書館にとっては当たり前のことである。

そして、所蔵の無い資料でも予約やリクエストといった形で受付けを行い、相互貸借等で、資料を提供する。カウンターでの問合せて「所蔵がない」でサービスが終わることはないだろう。

では、なぜ公共図書館でトップページに書影を使った資料紹介が少ないのか、あるいは未所蔵の資料がヒットするようになっていないのか。これは基本的にはシステムベンダーの提供する仕組みが対応しているかどうかによる。

システム更新に際して、公共図書館のシステムベンダーのいくつか問い合わせる機会があったが、「未所蔵でもこちらの指定した書誌は Web-OPAC から予約を受けられるようにしてほしい」とか「最近、在架状態になったもの

のリストを Web-OPAC 上に表示したい」と言う標準ではない、という回答であった。

所蔵以外の情報の提供や、在架になった資料を紹介できるくらい簡単に更新可能な資料紹介の仕組みを、Web 上の API やサービスを活用し改善できる体験ができないか、と考えることがワークショップを行う起点となっている。

3.2 ワークショップの概要

まずはワークショップの内容について触れたい。

類似のワークショップは第 1 回「図書館員の未来準備」を含め過去 4 回ほど行っており、毎回、内容を調整しているので直近の第 2 回(2018 年 9 月)の内容を基本にする。

ワークショップでは、最初に 30~40 分程度、このワークショップを行う目的について話した後、2 コマに分けてワークショップを行う、という作りになっている。

内容は、前述のとおり、「書店サイトではトップページで書影を活用して資料を紹介しているところが多いのに、図書館ではそれをやらないのか」、「なぜカウンターでは所蔵のない資料についても入手方法をアナウンスするのに、Web-OPAC ではそれをしないのか」という内容で、現在の図書館システムでできないのならば、Web 上のサービスを使ってやってみよう、という展開である。

このワークショップは、主に公共図書館での勤務経験のある方を対象としたものである。システム担当者や、Web サービス担当者のみを対象にしたものではないので、ワークショップの内容はあまり専門的にならないように、かつワークショップで出来る成果物が日常の業務の中でも使えるツールとなることを心掛けた。

まずはワークショップで API などを経験し、自分で活用する事から、初めてもらいたい、と考えたためである。

3.3 ワークショップ 1 複数のサイトを検索できるページを作る

1 コマ目は「複数のサイトを検索できるページ」を作るワークショップである。

内容は Web-OPAC で検索できないのであれば、他の資料検索サービスへの誘導をすることで、簡易な検索サービスを作ってみよう、というものだ。

現在は公共図書館も、所蔵資料以外も提供する館が増えている。もともと相互貸借があり、図書館サイト上では「電子図書館」や「デジタルアーカイブ」が提供され、国立国会図書館デジタル化資料送信サービス、さらには、NAXOS ミュージックライブラリー²³⁾という音楽配信サービスや、CiNii 等のオンライン DB を提供している館もある。

しかし、図書館が提供しているコンテンツを統合的な検索できるサービスは、国内のほとんどの公共図書館で実現できていないのが現状である。

もちろん、所蔵以外の検索について工夫している図書館もある。大学図書館で普及しているディスカバリーサービス(図書館で提供しているさまざまな情報源を一つのインターフェイスで検索できる仕組み)は長崎市立図書館に導入されたが、それ以前にも京都府立図書館や明石市立図書館で一時試験導入されている。

また、新潟県立図書館²⁴⁾は「当館の全資料」というように、自館で持つ所蔵・デジタルアーカイブ等を検索できる仕組みがあり、中野区立図書館²⁵⁾は、トップページで検索対象が「所蔵資料」と「電子書籍や記事索引」から選べる。

しかし、こういった試みは、まだ少ない。

統合的な検索サービスを提供するのが難しいのならば、簡単に検索対象を変えられる仕組みを作ってみよう、というのがこのワークショップである。

図 4 が実際のワークショップで作成する画面である。

図 4 ワークショップ 1

このように検索フォーム内に複数のボタンを表示することで、利用者が図書館の提供するコンテンツに気づきやすくなり、また複数サイトを検索する際に検索語を何度も入力させずにすむようになる。

ワークショップの中では各サイトの検索結果を表示するには、どのように各ボタンにパラメータを設定すればいいかの確認作業(サイトによって異なる検索語の指定方法

など) をしてもらおう。

この作業は、検索結果等へのリンク方法を知ってもらう事が目的だ。SNS 等で資料を紹介する際に、検索結果や資料詳細へリンクするという活用もできるだろう。

ワークショップの中では、いきなり公開する、というよりは、例えばレファレンスなどでよく使う情報源のボタンを加えて、自分たちで使えるツールを作ってみてはどうか、という話をしている。

直接利用者向けでなくても、図書館員がこういった仕組みを使うことで図書館サービスが向上するのなら、それも「Web を活用した図書館サービス」だろう。

3.4 ワークショップ2 APIを使って書誌・書影を取得し、ブックリストを作る

二つ目は、API を使って書誌・書影を取得しブックリストを作る、というものだ。図5に流れを示す。

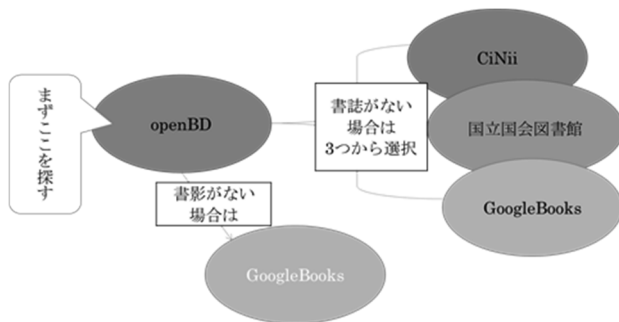


図5 ワークショップ中のAPIの利用の概略図

使用するAPIは、openBD²⁶⁾、Google Books、CiNii、国立国会図書館サーチ²⁷⁾である。検索キーはISBNにしている。Amazon²⁸⁾のAPIは、使用に事前登録が必要なことを考え、ワークショップ中では使わないこととした。

最初にopenBDで検索するのは、1,000件までのISBNを一括して取得することができ、利用制限も少ないためだ。

図書館で使用されている書影を取得できるAPIについて、簡単に触れると、図書で利用しているのはAmazonとGoogleが提供しているものが一般的だ。Web-OPAC上で書影を提供している公共図書館は増加しつつあるが、ほとんどがGoogleを採用している。

いち早く書影表示をしていた図書館の中では、日進市が

2008年にAmazonを使って書影の表示と、Amazonで購入ボタンの表示を行い話題になった²⁹⁾。が、Amazonでの書影表示は現在は少数派で、例えば、2018年10月現在、千葉県では東庄町のみである。

ほかに、日外アソシエーツが提供している有償のBOOKサービスAPI³⁰⁾があるが、Googleなどの無償のものと比べても、採用している例が少ない。私が確認しているのは、取手市立図書館である。

2017年1月からopenBD、2018年6月から国立国会図書館サーチのAPIでも書影の提供が始まった。

どちらも、どの程度、図書館のWebサービスに使われているかの把握はできていないが、openBDについては、2017年4月のカレントアウェアネスポータルに「野田市立図書館（千葉県）、openBDを使った資料情報提供の試行を開始」³¹⁾が掲載された。

GoogleなどのAPIを使ったWeb-OPACでの書影表示自体も、すべての図書館で書影表示がしている状態ではない。2018年11月時点で、千葉県ではWeb-OPACを持つ図書館39館中、書影表示は17館だった。新しい変化への対応は、基本的に、システムのリプレイスに合わせて普及していくものなので、新しいAPIへの対応も相応の時間がかかるだろう。

書誌情報を取得するためのAPIは、書影提供のサービスとして触れたもののほか、CiNiiが提供している。

ただし、すでに多くの公共図書館がMARC（機械可読目録）を購入しているため、あまり公共図書館のWebサイト上では活用されていないようである。

さて、実際のワークショップ「APIを使ったブックリストを作る」は、書誌を取得するためのAPIと書影を取得するためのAPIの両方を使ってブックリストを作ってみようという形である。

まずは、入力フォームに複数のISBNを自由に入力して書誌や書影を取得してAPIで書誌や書影を取得する、という仕組みを体験してもらう。その後、HTMLファイルのJavaScriptプログラムの変数にISBNを指定して固定のブックリストにする、という手順である。（変数にISBNを指定すると入力フォームは非表示になる。）

このワークショップの際、表示された内容はコピペでき

ます、と言っている。業務の中で資料の紹介をする機会が多いが、タイトル、著者などは、意外に間違いやすい。この仕組みで一度 ISBN を読んで、書誌情報などをまとめてテキスト化する使い方もある、という説明である。

複数の API を使ってみることで、システムベンダーが提供しているのが、Google Books だからそれでいいということではなく、同じように書誌・書影を提供している API はあって、それぞれに使い心地は違う。また Google Books がないときは openBD を使うというふうに組み合わせることでヒット率を上げる方法もある、ということも、考えてもらえたら、と思っている。

3.5 ワークショップをやってみて

実際にワークショップの講師をやってみると、ファイルの解凍やドラッグ&ドロップなどの操作について慣れていない参加者もいれば、ワークショップ後に自習の形で時間をかけてチャレンジしてもらおうと用意した「エクストラステージ」の部分の作業まで終わらせる参加者もいた。

図書館に勤務している参加者がほとんどなのだが、IT スキルには非常に差がある。

カウンター業務であろうと、バックヤード業務であろうと PC を使用する機会が多いだろうと思っていたので、やや意外であった。

考えてみれば、私自身も図書館システムの使い方の説明受けたが、PC 講習のようなものは受講していない。

図書館では Web サービスが当たり前になっている時勢なので、共通知識として我流でない PC の使い方について研修の機会が必要なのかもしれない。

受講者のアンケートについては、毎回、目を通していているが、ワークショップの過程は楽しんでもらっているようで、API などを体験してもらおう、という部分では上手くいっているようである。

4. Web を使った図書館サービスの注意点

ここまでワークショップの概要と、野田市立図書館の取り組み、その結果について言及してきた。

Web のサービスを上手に活用することで、図書館サービスの向上や省力化が可能なことを説明してきたが、外部

のサイトを使う以上、注意しなければならないこともある。

一つは、セキュリティの問題だ。

最近、Facebook³²⁾ の「いいね」ボタンからの情報漏洩が話題になった。Facebook の「いいね！」ボタンがあるウェブページを閲覧すると、ボタンを押さなくても Facebook に個人情報が自動で送信されるという問題である³³⁾。

図書館サイトでもボタンを設置している事例がある。

同列には扱えないが、個人情報の取り扱いでは、Google アナリティクス (アクセス解析サービス)³⁴⁾ の例がある。やはり千葉県内の事例で紹介するが、茂原市立図書館ではプライバシーポリシーのページ³⁵⁾の中で、Google アナリティクスの利用について触れている。同様の配慮は、埼玉県立図書館³⁶⁾や龍ヶ崎市立図書館³⁷⁾でも見られる。

もう一つはサービス終了の問題である。

Google Feed API の終了は、触れておくべきだろう。

『新着雑誌記事速報から始めてみよう』³⁸⁾という書籍を新着雑誌記事速報の発案者であり、現在は未来の図書館研究所の研究員の牧野氏と共著する機会があったが、これは Google Feed API を使った仕組みであった。

Google Feed API は、RSS を自分のサイトの情報のように表示できるサービスである。

これを活用した「雑誌記事速報」は茨城県のゆうき図書館が始めた仕組みで、国立国会図書館や、Fujisan.co.jp³⁹⁾が提供している雑誌記事の情報 (RSS) を取り込んで、見やすいように整形して表示している。

RSS を取り込んで提供するという仕組みのため、汎用性が高く、野田市立図書館サイトでも「雑誌記事速報」や「地域&図書館 News」のような形で提供していた。

『新着雑誌記事速報から始めてみよう』では、このような野田市の事例を含め、雑誌記事速報の仕組みを活用した事例を紹介している。しかし、残念ながら、ほとんどが、2017 年 1 月の Google Feed API の終了⁴⁰⁾にあわせて、止まっている。

一部は同様の機能を持つ YQL (Yahoo! Query Language)⁴¹⁾への切り替えによって継続しているものもあったが、2019 年 1 月に YQL もサービス終了した。この後の継続は難しいようである。

セキュリティの問題や、サービス終了の問題の対応としては、あまり一般に利用されないような API の利用は控えることや、自館が使っているサービスについて把握し、情報を集めるようにすることが必要となる。

また、Google Feed API や YQL のような無料で使える WebAPI は、気軽にサービスを作成し、試用できるという点で優れたツールであったが、継続的にサービスを提供していく場合には、自館の Web サーバ上に同様の仕組みを持つなど、動作保証のある仕組みへの移行を検討する必要があるだろう。

5. まとめ

ここまで「Web を活用した図書館サービス」について野田市立図書館の事例とワークショップの概要から述べてきた。

野田市立図書館の事例については、カスタマイズや開発に予算を投じなくても、Web 上の情報源やサービスなどを組み合わせることによって、図書館の Web サービスを向上させることができる例としてあげた。

ワークショップの概要については、その入り口として、どのような体験が必要なのか、と私が考えた例である。

事例では、JavaScript を活用したものが多かったが、ワークショップ中では、プログラミングの部分は意識的に切り離し、見せないようにした。

データベースに関する理解やプログラミングのスキルがあればできる事は増えるだろうが、そこまで身に着けなければ何もできない、となってしまうと、「まずやってみる」ということが難しいからだ。既存のサービスやライブラリを組み合わせる事で、新しいサービスや仕事の省力化ができる、と感じてもらえる方が有効だろう。

問題点としては、セキュリティと、使用するサービスが停止する場合があることについて、触れた。

ただ、そのような問題点があるにせよ、現場の図書館員が、ICT のスキルを身に着けることによって、展開できるサービスも多いことは、野田市立図書館の事例によって明確になったと思う。

予算の削減とサービスの向上、という相反する条件を満たすよう求められる昨今では、サービスの拡充や業務の省

力化の手段として、インターネット上にある情報資源を、うまく活用していくことは、必須になっていくだろう。

例えば、Web-OPAC が、文字通りオンライン上の所蔵目録の役割しかないのであれば、図書館の情報提供範囲の拡大にあわせた、他のシステムを検索サービスとしてメインで使う、という選択肢があってもよい。

カーリルでは、現在、検索エンジンを Amazon, openBD など複数から選択できるようになっている。図書館の Web サービスの中でも、Web-OPAC とは別の検索エンジンを使うことが可能だろう。

あるいは購入が当たり前になっている MARC についても、国立国会図書館をはじめとする無料のものに切り替えて MARC にかかる費用を浮かす事が可能かもしれない。

図書館のほとんどが、自身の Web サイトを持ち、そこでサービスを展開している以上、図書館サービスと Web との関係について、無関心でいられるものではない。

関心を持たなければならないのであれば、ぜひ楽しみながらそのチャレンジをしてほしいと思う。私にとって、「新着雑誌記事速報」を知り、自身の環境の中でどのようなことができるのか、そのためにどんな知識が必要なのか調べることは、必要という以上に楽しいことであった。

本稿で紹介した、野田市立図書館の取り組みや、ワークショップの取り組みが、楽しみながら図書館のサービスを考えるきっかけになれば、と思う。

【参考・引用文献】

- 1) “カーリル | 日本最大の図書館蔵書検索サイト”. カーリル. <https://calil.jp/>, (accessed 2019-01-29).
- 2) “Webcat Plus”. Webcat Plus. <http://webcatplus.nii.ac.jp/>, (accessed 2019-01-29).
- 3) “野田市立図書館 その他の目録”. 野田市立図書館. <http://www.library-noda.jp/homepage/digilib/catalog/catalog.html>, (accessed 2019-01-29).
- 4) 川嶋斉. 図書館を API で拡張する. 情報の科学と技術. 2014, vol. 64, no. 5, p. 188-194.
- 5) “野田市立図書館”. 野田市立図書館. <https://www.library-noda.jp/>, (accessed 2019-01-29).
- 6) “Google Books API”. Google Developers. <https://developers>.

- google.com/books/, (accessed 2019-01-29).
- 7) “公共図書館 Web サービス勉強会”. Google. <https://groups.google.com/forum/#!forum/lib-web>, (accessed 2019-01-29).
 - 8) “レシピ | カーリル”. カーリル. <https://calil.jp/recipe>, (accessed 2019-01-29).
 - 9) “カーリルローカル | 図書館のすべてのコンテンツを検索”. カーリル. <https://calil.jp/local/>, (accessed 2019-01-29).
 - 10) “リサーチ・ナビ”. リサーチ・ナビ. <http://rnavi.ndl.go.jp/rnavi/>, (accessed 2019-01-29).
 - 11) “想-IMAGINE Book Search | 多様な情報源の想いを連ねて発想しよう!”. 想-IMAGINE Book Search. <http://imagine.bookmap.info/index.jsp>, (accessed 2019-01-29).
 - 12) “国立国会図書館デジタルコレクション”. 国立国会図書館. <http://dl.ndl.go.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 13) “CiNii Articles - 日本の論文を探そう - 国立情報学研究所”. CiNii. <https://ci.nii.ac.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 14) “青空文庫”. 青空文庫. <https://www.aozora.gr.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 15) “ADEAC (アデアック) : デジタルアーカイブシステム”. ADEAC : デジタルアーカイブシステム. <https://trc-adeac.trc.co.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 16) “他の図書館でのデジタル化資料の利用 | 国立国会図書館”. 国立国会図書館. http://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/index.html, (accessed 2019-01-29).
 - 17) “県立図書館の蔵書を市立図書館の OPAC から予約・取り寄せできるサービス (千葉県) | カレントアウェアネス・ポータル”. カレントアウェアネス・ポータル. <http://current.ndl.go.jp/node/18150>, (accessed 2019-01-29).
 - 18) 川嶋斉. web-OPAC+. <http://wemfls.web.fc2.com/testjs/opacplus/opacplus.zip>, (accessed 2019-01-29).
 - 19) “野田市立図書館がカーリルとの連携を試験的に開始 - カーリルのブログ”. カーリル. http://blog.calil.jp/2010/04/blog-post_11.html, (accessed 2019-01-29).
 - 20) “千葉県の図書館 - 千葉県公共図書館協会”. 千葉県公共図書館協会. <http://www.chibalib.org/chiba-ken-no-toshokan>, (accessed 2019-01-29).
 - 21) “県立図書館の情報／刊行物 | 千葉県立図書館”. 千葉県立図書館. <https://www.library.pref.chiba.lg.jp/guide/report/index.html#yoran>, (accessed 2019-01-29).
 - 22) “「市立図書館ホームページアンケート」結果”. 横浜市. <http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/library/enq/21hpsukeikekka.pdf>, (accessed 2019-01-29).
 - 23) “NML ナクソス・ミュージック・ライブラリー - 全曲無料視聴できるクラシック音楽配信”. ナクソス・ミュージック・ライブラリー. <http://ml.naxos.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 24) “新潟県立図書館”. 新潟県立図書館. <https://www.pref-lib.niigata.niigata.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 25) “中野区立図書館”. 中野区立図書館. <https://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosh/index.asp>, (accessed 2019-01-29).
 - 26) “openBD | 書誌情報・書影を自由に”. openBD. <https://openbd.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 27) “国立国会図書館サーチ (NDL Search)”. 国立国会図書館. <http://iss.ndl.go.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 28) “Amazon”. Amazon. <https://www.amazon.co.jp/>, (accessed 2019-01-29).
 - 29) 岡本真. “日進市立図書館の Amazon に思うこと”. ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG) - ブログ版. <http://d.hatena.ne.jp/arg/20081228/1230395293>, (accessed 2019-01-29).
 - 30) “日外アソシエーツ「BOOK データ ASP サービス」案内”. 日外アソシエーツ. http://www.nichigai.co.jp/database/book_asp.html, (accessed 2019-01-29).
 - 31) “野田市立図書館 (千葉県), openBD を使った資料情報提供の試行開始 | カレントアウェアネス・ポータル”. カレントアウェアネス・ポータル. <http://current.ndl.go.jp/node/33870>, (accessed 2019-01-29).
 - 32) “Facebook - ログインまたは登録”. Facebook. <https://ja-jp.facebook.com/>, (accessed 2019-01-29).
 - 33) “個人情報の保護に関する法律に基づく指導について”. 個人情報保護委員会. <http://www.ppc.go.jp/news/press/2018/20181022/>, (accessed 2019-01-29).
 - 34) “Google Analytics”. Google. <https://www.google.com/analytics/web/>, (accessed 2019-01-29).
 - 35) “プライバシーポリシー | 茂原市立図書館”. 茂原市立図書館

館公式ホームページ. <http://opac.library-mobara.jp/>

privacy.html, (accessed 2019-01-29).

- 36) “埼玉県立図書館／サイトポリシー”. 埼玉県立図書館.

https://www.lib.pref.saitama.jp/stplib_doc/sitepolicy/,

(accessed 2019-01-29).

- 37) “ホームページのご利用について | 龍ヶ崎市立中央図書館”.

龍ヶ崎市立中央図書館. [https://tosyo.city.ryugasaki.](https://tosyo.city.ryugasaki.ibaraki.jp/about_site.html)

[ibaraki.jp/about_site.html](https://tosyo.city.ryugasaki.ibaraki.jp/about_site.html), (accessed 2019-01-29).

- 38) 牧野雄二, 川嶋斉. 新着雑誌記事速報から始めてみよう.

日本図書館協会, 2012, 161p., (JLA 図書館実践シリーズ,

21).

- 39) “雑誌の Fujisan.co.jp | 雑誌・定期購読専門オンライン書店”.

Fujisan.co.jp. <https://www.fujisan.co.jp/>, (accessed 2019-01-29).

- 40) “Google Developers Japan:Google Feed API 提供終了の

お知らせ”. Google Developers. [https://developers-](https://developers-jp.googleblog.com/2016/07/google-feed-api.html)

[jp.googleblog.com/2016/07/google-feed-api.html](https://developers-jp.googleblog.com/2016/07/google-feed-api.html), (accessed 2019-01-29).

- 41) “YQL”. YAHOO! DEVELOPER NETWORK. [https://](https://developer.yahoo.com/yql/)

developer.yahoo.com/yql/, (accessed 2019-01-29).

Author Abstract

Recently, many APIs such as openBD, NDL Search API are available on the Internet for enhancement of library web services. They are providing “book cover images”, “information of forthcoming books” and so on, which are indispensable for library service.

At first efforts and effects of the web service enhancement in Noda Public Library are presented in this article. This is the basis of the the course contents of "Library Service Using the Web". Then essential descriptions of the workshop course introduced in the Workshop on Librarians' Preparation for the future are mentioned.

『未来の図書館研究所 調査・研究レポート』Vol.2 はいかがでしたでしょうか。創刊号（Vol.1）に引き続き当研究所主催シンポジウム記録（第2回シンポジウム「図書館とソーシャルイノベーション」）掲載とともに、2017年度からの新しい取り組みであるワークショップ「図書館員の未来準備」について紹介しました。さらに研究レポートとして、ワークショップで展開された内容から図書館情報システムに関わる2つのレポートを寄稿いただきました。本誌が皆さまのご参考になれば幸いです。

私たちは調査・研究活動に基づき、今号で紹介した教育研修事業や、本誌のような研究成果発信のための出版事業とともに、調査・研究の成果や各種アプローチ方法などを活かし、図書館づくりの支援なども行っています。2018年度の活動からは、中野区からの業務委託「新図書館及び地域開放型学校図書館等運営計画検討業務」に当研究所員が携わりまとめた報告書が、12月にウェブ公開されたところです（<http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/dept/651500/d026570.html>）。図書館計画の事例として、新図書館等の計画案の内容、そして計画プロセスにおける、住民意向調査、検討委員会等の種々のアプローチ手法など、図書館に関わる皆さまに役立つものがあると思いますのでご紹介させていただきます。また2018年は当研究所の研究員が、本文でご紹介したワークショップの外部展開や、他にご紹介できるものとしては胆振図書館協議会（北海道）での講演なども行いました。こうした種々の図書館づくり・運営に関わる活動全般に関してきちんと整理し発信してゆくことは、私たちの使命と考えています。ぜひVol.3以降も楽しみになさってください。（牧野雄二）



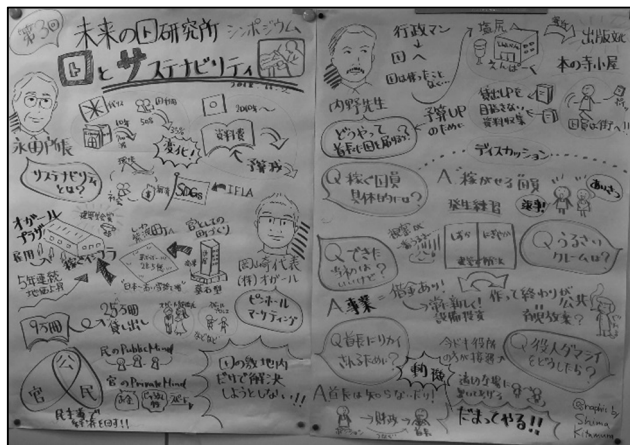
胆振図書館協議会での、当研究所所長 永田による講演

『ヨーロッパの公共図書館からの報告』より

（http://www.miraitosyokan.jp/future_lib/lecture/lecture20181130.pdf）

次号（Vol.3）について

恒例のシンポジウム記録（第3回シンポジウム「図書館とサステナビリティ」）と、今号と同様にワークショップで展開された内容から宇陀則彦氏（筑波大学准教授）の「最新技術が導く未来の図書館：AR、VR、MR、そしてAI」を掲載予定のほか、図書館づくりと運営に関わるレポートを掲載します。ぜひVol.3もご期待ください。



第3回シンポジウム グラフィックレコード



宇陀氏によるワークショップの様子

☑当レポートやその他の弊所の活動に関することなど
当研究所へのお問合せは<info@miraitosyokan.jp>まで
お願いいたします

図書館のアクセシビリティ

「合理的配慮」の提供へ向けて 野口武悟 編著
植村八潮

A5判 219頁 本体2,000円＋税 ISBN978-4-88367-262-2

情報便利屋の日記

専門図書館への誘い

村橋勝子 著 四六判 197頁 本体1,800円＋税 ISBN978-4-88367-265-3

パスファインダー作成法

—主題アクセスツールの理念と応用—

鹿島みづき 著 四六判 174頁 本体1,800円＋税 ISBN978-4-88367-258-5

分類法キイノート

増補
第2版

—日本十進分類法[新訂10版]対応—

宮沢厚雄 著 B5判 104頁 本体1,500円＋税 ISBN978-4-88367-275-2

論考

図書館とレファレンスサービス

齋藤泰則 著 A5判・上製 284頁 本体3,600円＋税 ISBN978-4-88367-283-7

目録法キイノート

—日本目録規則[1987年版改訂3版]対応—

宮沢厚雄 著 B5判 104頁 本体1,500円＋税 ISBN978-4-88367-260-8

やさしいNACSIS-CAT

蟹瀬智弘 著 四六判 249頁 本体2,000円＋税 ISBN978-4-88367-278-3

検索法キイノート

—図書館情報検索サービス対応—

宮沢厚雄 著 B5判 144頁 本体1,800円＋税 ISBN978-4-88367-290-5



万人が本当に
やさしく読める
マンガを求めて
大研究!

B5判 180頁 本体2,200円＋税
ISBN978-4-88367-285-1

障害のある人たちに向けた

LLマンガへの招待

はたして「マンガはわかりやすい」のか

吉村 和真・藤澤 和子・都留 泰作 [編著]

わたしのかぞく

—なにが起こるかな?—

LLブック(やさしく読める本)制作グループ=藤澤和子・川崎千加・多賀谷津也子 編

写真だけの4コマ
マンガ風LLブック

B5判・横長・角背上製

112頁 本体1,500円＋税
ISBN978-4-88367-247-9

第2弾! 新たに
ビジュアルも掲載

はつ恋

[企画・編集・制作] 藤澤和子・川崎千加・多賀谷津也子

B5判・横長・角背上製 90頁 本体1,600円＋税 ISBN978-4-88367-284-4



日本十進分類法の成立と展開

—日本の「標準」への道程1928-1949—

藤倉恵一 著 A5判・上製 310頁 本体3,800円＋税 ISBN978-4-88367-310-0

プロの検索テクニック

—検索技術者検定2級 公式推奨参考書—

一般社団法人情報科学技術協会 監修 原田智子 編著 B5判 180頁

小河邦雄・清水美都子・丹 一信・藤井昭子 著 本体2,200円＋税
ISBN978-4-88367-307-0

NDCへの招待

—図書分類の技術と実践—

蟹瀬智弘 著 四六判 293頁 本体2,000円＋税 ISBN978-4-88367-245-5

新訂10版
対応

図書館業務に役立つHTML・PHP入門

—Webサイト構築のための基礎を学ぶ—

星野雅英 著 B5判 203頁 本体2,100円＋税 ISBN978-4-88367-282-0

健康医学情報の伝達におけるリーダビリティ

酒井由紀子 著

A5判・上製 242頁 本体3,600円＋税 ISBN978-4-88367-303-2

図書館情報学における統計的方法

岸田和明 著 A5判・上製 252頁 本体3,000円＋税 ISBN978-4-88367-249-3

検索スキルをみがく

—検索技術者検定3級 公式テキスト—

一般社団法人情報科学技術協会 監修 原田智子 編著 B5判 144頁

吉井隆明・森美由紀 著 本体1,800円＋税
ISBN978-4-88367-308-7

IAAL大学図書館業務

実務能力認定試験

過去問題集

小西和信 監修
IAAL認定試験問題集編集委員会 編

各B5判 本体2,100円＋税

総合目録—図書編

217頁 ISBN978-4-88367-300-1

総合目録—雑誌編

211頁 ISBN978-4-88367-301-8

情報サービス—文献提供編

177頁 ISBN978-4-88367-302-5

主題アクセスとメタデータ記述のためのLCSH入門

Introduction to LCSH for Subject Access and Metadata 鹿島みづき 著 B5判 223頁 本体2,500円＋税 ISBN978-4-88367-223-3

〒112-0002 東京都文京区小石川5-11-7
URL: <http://www.jusonbo.co.jp/>

樹村房

TEL: 03-3868-7321 FAX: 03-6801-5202
E-mail: webinfo@jusunbo.co.jp



中野区教育委員会「山崎家資料図録（1989）」

図書館を”ゆめ”いっぱい

IIIF に対応したデジタルアーカイブのシステムを構築し、地域資源の利活用に貢献しています。

Contents

■ Introduction	1
■ 2nd Symposium of The libraries of the future research, Inc. :	3
Library and Social Innovation / Tsuyoshi Ota, Norihiko Uda and Haruki Nagata	
■ Workshop on Librarians' Preparation for the Future : An Outlines	34
■ Research Report	
How to Embed Library Services in the Social Web:	39
The Method for Building Social Digital Libraries Mao TSUNEKAWA	
Consideration on "Library Service Using the Web"	48
Hitoshi KAWASHIMA	

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 2018 第2号

2019年3月10日発行

定価(本体2,000円+税)



編集・発行

株式会社 未来の図書館 研究所

〒113-0033 東京都文京区本郷 5-23-12 7階

Tel.03-6673-7287 Fax.03-6772-4395

URL <http://www.miraitosyokan.jp>

印

刷

株式会社 丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれの筆者の個人的見解であることをお断りいたします。

本誌 PDF 版を当研究所ホームページ (<http://www.miraitosyokan.jp>) でご覧いただけます。